

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VIII-5

1981

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VIII-5

1981

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

県下のは場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査も、はや八年を迎え、ますます工事側と調査側の調整が困難をきわめること再々となっている。

本書はこの困難のなかでも、特に人材と時間の不足に反して、激増する調査資料を公開すべくまとめたもので、古代近江を考えるうえで新たな知見が数多く明らかにされている。

本報告書の作成にあたって、調査から整理までの一貫の作業の中で、地元教育委員会、地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言、援助を得た。ここに記して謝意を表したい。

昭和 56 年 3 月

滋賀県教育委員会
文化財保護課
課長 沢 悠光

例　　言

1. 本報告書は、昭和55年度の県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、守山市赤野井遺跡の調査成果を収載したものである。
2. 調査にあたっては、地元各町の役場、教育委員会、区長から種々の協力を得た。
3. 現地調査は、本県教育委員会文化財保護課技師大橋信弥を担当者とし、滋賀県埋蔵文化財センター技師谷口徹を主任調査員として実施した。
4. 本書の編集、執筆は大橋と谷口が分担してあたり、文末に文責を明記した。なお遺物写真は寿福滋氏にお願いした。

目 次

守山市赤野井遺跡調査報告

序

例 言

I. はじめに	1
II. 検出遺構	3
G地区	3
L地区	10
M地区	14
N地区	19
O地区	35
P地区	37
Q地区	38
X地区	39
III. 出土遺物	45
(1) I期の土器	45
(2) II期の土器	52
(3) 出土土器の年代観	53
出土遺物観察表	56

挿 図 目 次

第1図 位置図	2
第2図 G地区遺構全図	5・6
第3図 G地区遺構断面図	7
第4図 L地区遺構断面図	10
第5図 L地区遺構平面図	11・12
第6図 M地区遺構断面図	14
第7図 M地区遺構平面図	17
第8図 M地区N 2トレンチ遺構断面図	20
第9図 N地区N 3トレンチ遺構断面図	24
第10図 N地区N 4トレンチ遺構断面図	25
第11図 N地区N 5トレンチ遺構断面図	27
第12図 N地区N 6トレンチ遺構断面図	28
第13図 N地区N 7トレンチ遺構断面図	32
第14図 N地区N 8トレンチ遺構断面図	33
第15図 O地区・O 1トレンチ遺構平面図・断面図	35
第16図 P地区試掘トレンチ設定図	37
第17図 Q地区グリッド設定図	39
第18図 X地区・X 1トレンチ平面図	41・42
第19図 出土遺物実測図	47
第20図 出土遺物実測図	48
第21図 出土遺物実測図	49
第22図 出土遺物実測図	50
第23図 出土遺物実測図	51

付 図

付図1 赤野井遺跡各調査地区設定図

付図2 N地区遺構全図

図版目次

- 図版一 遺構（上）G地区・G01～G06グリッド設定状況
(下) G地区・G11、G12トレント設定状況
- 図版二 遺構（上）G地区・G11 全景（南西から）
(下) G地区・G11 掘立柱建物（S B02・S B04）
- 図版三 遺構（上）G地区・G11 溝（S D01）から北東を望む
(下) G地区・G11 溝（S D04・S D05・S D06）
- 図版四 遺構（上）G地区・G12 掘立柱建物（S B07・S B08）から南西を望む
(下) G地区・G12 掘立柱建物（S B09）、土塁（S K01）から南西を望む
- 図版五 遺構（上）G地区・G12 土塁（S K01）遺物出土状況
(下) G地区・G12 檻（S A01）から北東を望む
- 図版六 遺構（上）G地区・G20 溝（S D02・S B03）から南西を望む
(下) G地区・G22 溝（S D01・S D02）から北東を望む
- 図版七 遺構（上）L地区・L2 掘立柱建物（S B01）
(下) L地区・L2 掘立柱建物（S B02）から東を望む
- 図版八 遺構（上）M地区・M1 全景（南西から）
(下) M地区・M1 掘立柱建物（S B01・S B02）
- 図版九 遺構（上）M地区・M1 掘立柱建物（S B01・S B02・S B03）
(下) M地区・M1 檻（S A01）柱根出土状況
- 図版一〇 遺構（上）M地区・M2 掘立柱建物（S B06）
(下) M地区・M2 掘立柱建物（S B07・S B08）
- 図版一一 遺構（上）M地区・M2 掘立柱建物（S B07・S B08）
(下) M地区・M2 掘立柱建物（S B09）
- 図版一二 遺構（上）N地区・N1 掘立柱建物（S B01・S B02）
(下) N地区・N1 檻（S A01）
- 図版一三 遺構（上）N地区・N2 掘立柱建物（S B03）と溝（S D06）など
(下) N地区・N2 方形周溝状遺構（S X01）
- 図版一四 遺構（上）N地区・N3 方形周溝状遺構（S X02）と溝（S D09）など
(下) N地区・N3 掘立柱建物（S B06・S B07）
- 図版一五 遺構（上）N地区・N4 全景（南から）
(下) N地区・N4 溝（S D16）と掘立柱建物（S B08）
- 図版一六 遺構（上）N地区・N5 全景（西から）
(下) N地区・N6 掘立柱建物（S B09）、方形周溝状遺構（S X03・S X04）、
溝（S D09）

- 図版一七 遺構 (上) N 地区・N 6 挖立柱建物 (S B10)、土塙 (S K08・S K09)
(下) N 地区・N 7 全景 (南から)
- 図版一八 遺構 (上) N 地区・N 8 挖立柱建物 (S B14)
(下) N 地区・N 8 挖立柱建物 (S B15)
- 図版一九 遺構 (上) N 地区・N 8 挖立柱建物 (S B16)
(下) N 地区・N 8 北側遺構群
- 図版二〇 遺構 (上) O 地区・O 1 方形周溝状遺構 (S X 1)
(下) O 地区・O 1 方形周溝状遺構 (S X 1)
- 図版二一 遺構 (上) O 地区・O 1 溝 (S D01～S D04)
(下) X 地区・X 1 挖立柱建物 (S B04)
- 図版二二 遺構 (上) X 地区・X 1 挖立柱建物 (S B07)あたり
(下) X 地区・X 1 挖立柱建物 (S B09)
- 図版二三 遺構 (上) X 地区・X 1 挖立柱建物 (S B09)
(下) X 地区・X 1 挖立柱建物 (S B02)
- 図版二四 遺物 1～7 (G-11, S D-1)、14(L-1, S D-1)、16(L-1, P-1)、
17(L-1, 遺構面)、19(L-2, S D-3)
- 図版二五 遺物 20(L-2, P-2)、21～32, 34(M-1, S D-1)
- 図版二六 遺物 38, 39, 41～44(M-1, S D-1)、63, 64(N-2, S D-4)、65(N-2, S D-5)、
73(N-2, S D-3)
- 図版二七 遺物 75(N-2, S K-1)、78(N-3, S K-4)、79(N-3, S K-9)、80(N-3, S X-2)、
81(N-3, P-1)、82(N-3, 遺構面)、83(N-4, S D-16)、85(N-4, S D-15)、
86(N-4, P-2)、91～93(X-4, S D-2)
- 図版二八 遺物 94～106(X-4, S D-4)
- 図版二九 遺物 107～114, 118, 120, 122(X-4, S D-4)
- 図版三〇 遺物 (上) 8, 9(G-11, S D-1)、10～12(G-11, S D-4)、13(L-1, S D-1)、
15(L-1, S D-2)
(下) 18(L-1, 遺構面)、33, 35～37, 40(M-1, S D-1)
- 図版三一 遺物 (上) 45～47(M-1, S D-1)、48(M-1, P-1)
(下) 49, 51, 53, 54(M-1, 柱穴内)、55(M-1, 遺構面)、56(M-2, S D-2)、
58(M-2, P-7)、61(N-2, S D-3)
- 図版三二 遺物 (上) 57(M-2, S D-6)、59, 60(M-2, 柱穴内)、62(N-2, S D-4)、
66(N-2, S D-5)、67～69(N-2, S D-6)
(下) 70(N-2, S D-6)、71, 72, 74(N-2, S D-3)、76(N-2, S X-1)、
77(N-3, S D-13)
- 図版三三 遺物 (上) 84(N-4, S D-16)、87(N-5, S D-19)、88(N-5, S D-9)、89(N-6, S K-9)、
115, 116, 117, 121(X-1, S D-4)

守山市赤野井遺跡

I は じ め に

赤野井遺跡は、守山市西部に所在する、標点的な集落遺跡として、昭和50年度以降、ほ場整備事業に伴う発掘調査を連続して実施してきた。この間、弥生時代から、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代と各時代の遺構、遺物が検出され、野洲川の洪水などにより、中絶を繰り返してきた。野洲川下流域の諸遺跡の中では、特異な存在であることが明らかになっている。

本書は、昭和55年度に実施した、県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の成果を収載しているが、本年度の対象となつたのは、県営ほ場整備守山南部地区杉江第2工区、十二里工区、山賀工区にかかる、市道守山杉江線の南側一帯で、赤野井遺跡の最南端で、一部杉江東遺跡の東端に含まれる部分と、森川原遺跡の西端である。

発掘調査は、支線排水路、切土部分に試掘トレッチを設定し、支線排水路部分については、遺構検出した時点で、全面調査に移行したが、切土部分については、遺構が検出された場合は、設計変更の協議の後、調査をすすめることとした。その結果、調査を実施したのは、次の8地区で、調査面積は、約12,000m²に達した。

G区

G-1～G-9 山賀工区第7号支線排水路に設定したもの

G-10～G-14 山賀工区第8号支線排水路に設定したもの

G-15～G-25 山賀工区第9号支線排水路に設定したもの

X区

X-1 杉江第2工区第10号支線排水路に設定したもの

X-2～X-4 杉江第2工区第11号支線排水路に設定したもの

Q区

Q-1～Q-5 十二里工区第10号支線排水路に設定したもの

O区

O-1～O-4 十二里工区第9号支線排水路に設定したもの

P区

O-4の西側の畠地部分に設定したもので、切土の予定となっていた。

N区

N-1～N-8 十二里工区4-1支線道路の西側の畠地で、切土の対象となっていた。

L区

L-1 L-2 十二里工区8号支線排水路の北半と、その西に接する切土部分に設定したもの。

M区

M-1 M-2 十二里工区8号支線排水路の南半に設定したもの。

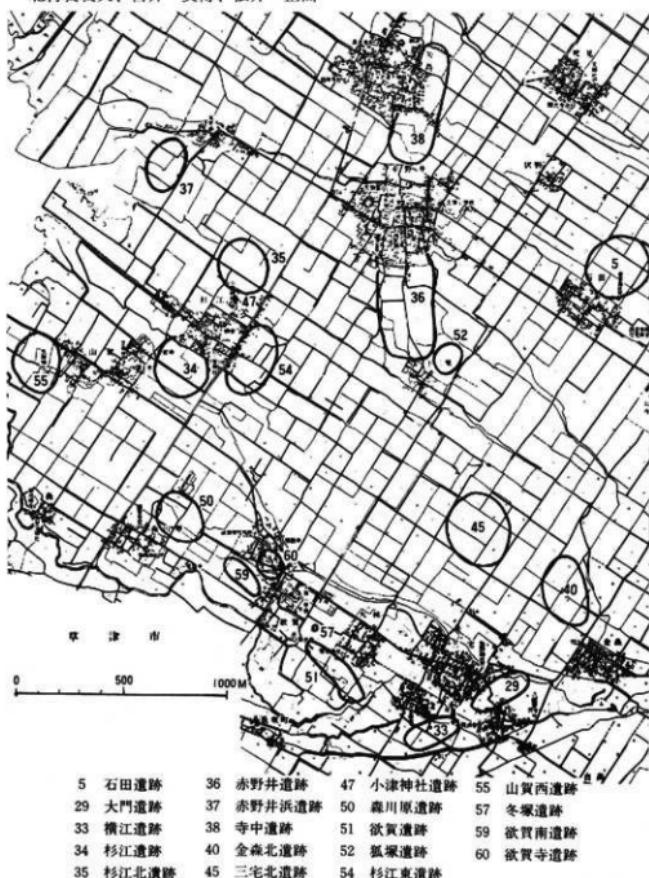
調査は、山賀工区については、昭和55年7月15日より、G-1から順次調査をすすめ、8月上旬から、G-19以降に着手し、8月24日をもって調査を完了した。十二里、杉江第2工区については昭和55年10月6日より開始し、N区つづいてM区の順序で調査をすすめた。そして、N区・M区の調査に並行して、L区、つづいてX区にも調査をすすめ、つづいてQ区、P区、O区へと調査をすすめた。そして、12月20日をもって、現地調査を終了した。

なお、現地調査および整理作業に当たったのは、次の諸君である。

進藤 裕、北野 隆司、浦谷 昌章、上形 徳行、福山 武尚、

吉川与司一、北脇 邦彦、南井 安則、玉井 弘樹、角出 裕資、

北村義夫、筈井 美博、松井 正高



第1図 位置図

II 検出遺構

G 地区

G地区は、県営ほ場整備守山南部地区山賀工区に位置する。昭和55年度の夏に、3本の支線排水路域を中心に調査を実施した。調査は、全路線域に、幅4m、長さ5m余のグリッドを適宜設置して遺構の存否を確認し、遺構の存在する箇所については、その広がりに応じてグリッドを拡張し、狭長なトレンチ調査とした。G地区に設置したグリッドは、G01—G29の総計29ヶ所に及ぶが、その内で遺構が検出されたのは、G04・G05付近、G11—G13南半付近、G16・G17付近、G20—G25付近の5つの小ブロックに分けることができる。以下、ブロックごとにその概要を記すことにしてよう。

G04—G05区

G04・G05の両グリッドは、G地区南東端に位置する。両グリッドとも耕土及び床土直下には、黄灰褐色砂質土からなる地山が広がっている。地山上部は酸化鉄の沈着が著しい。両グリッド間で、この地山を切り込んで幅7.2m余の大溝を検出した。深さは最深部でも0.4mと浅く、覆土として3層が識別される。下層より③暗赤褐色泥土、②暗黒褐色粘土、①灰褐色粘土が層を重ねている。②層は腐植上の混入が認められ、層中より若干の土師質土器片や木製品が出土した。一方、G05南西端では、これとは別に小溝状の遺構を検出している。覆土は上記②層と同様の単純層である。遺物の出土はない。

G11—G13区

今回のG地区的調査中、最も多くの遺構を検出したブロックである。各遺構とも、耕土とその床土直下に広がる灰褐色砂質土層に、その痕跡を刻んでいる。遺構は、掘立柱建物、柵、土壙、溝などよりなる。以下、その順に略記することにしよう。

掘立柱建物は、G11で5棟、G12で5棟を確認した。ただし、狭長なトレンチ調査ということもあり、建物としてまとまり得ない多数の柱穴を残している。柱穴は詳細にみると、その色調や形状から3類が識別される。以下、A・B・C類としよう。A類は、掘り方部分が黒灰褐色粘土、柱穴部分が黒褐色粘土をなすもの。一辺40cm程度の隅丸方形プランの掘り方、径20cm余の柱穴として検出されることが多い。G12で確認したS B06・S B07・S B08・S B09・S B10の各掘立柱建物棟がこれに属している。B類は、掘り方部分がほとんどなく、ほぼ黒灰色粘土の柱穴部分のみのもの。柱穴部分は径20cmに溝たない。G11のS B04・S B05がB類の掘立柱建物である。C類は、掘り方部分に暗灰褐色粘土、柱穴部分に淡黒灰褐色粘土を充填させている柱穴群である。掘り方部分は一辺30—50cm、柱穴部分は径20cm前後を計る。G11で検出したS B01・S B02・S

B 03がこの類に属している。

A類の掘立柱建物は、その方位などから、さらに2群に細分できそうである。S B 06・S B 07・S B 08・S B 09とS B 10である。前者は、いずれもその方位をN-70°-W前後に保つ掘立柱建物で、梁行2間、桁行数間程度の建物規模が予測される。柱間は、1.4-2.2mのものまであって必ずしも一定しない。後者は、前者の掘立柱建物群とは、およそ50mの距離をおいて1棟のみ検出したものである。N-36°-Wを保ち、梁行、桁行とも2間程度の規模となろう。A類の掘立柱建物は、周辺の覆土を同じくする遺構との関連から、古墳時代前期の所産である可能性が高い。

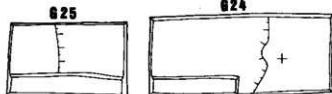
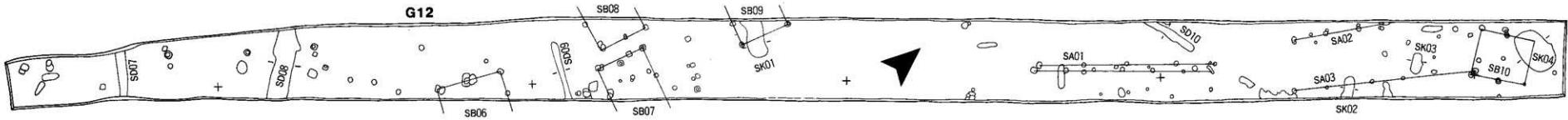
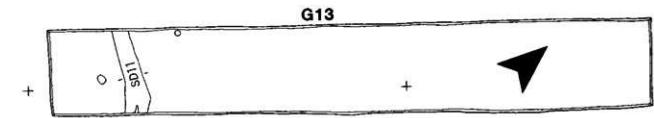
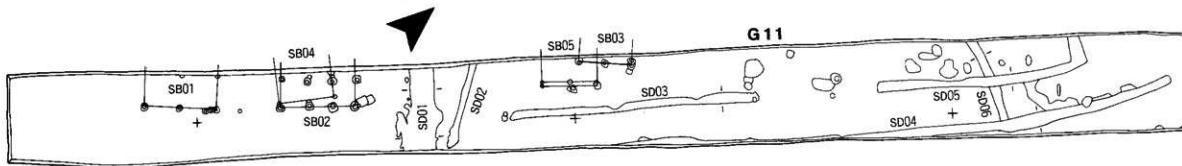
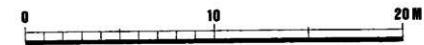
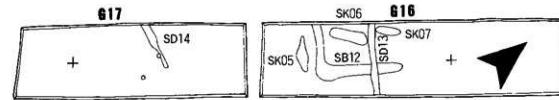
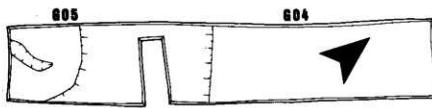
B類の掘立柱建物は、S B 04・S B 05の2棟である。C類の掘立柱建物群と同じあたりに群を形成するが、柱穴の切り合い関係からC類より古い建物である。その方位をN-50°-W余に保ち、梁行2間、桁行数間程度の建物となろう。柱間は1.4mにはほぼ統一されているようである。S B 05の南東辺は、一度建て替えたのか、新旧を1単位とする柱穴が並存している。

C類の掘立柱建物は、S B 01・S B 02・S B 03の3棟である。方位は先述のB類にほぼ等しい。梁行2間ないし3間、桁行数間の建物規模が予測される。S B 01とS B 02については、繩柱の建物になるであろう。柱間はS B 01では1.8m前後と比較的広いが、S B 02とS B 03では、1.1-1.5mと狭い。C類の掘立柱建物は、他遺構との関連などから、古墳時代後期(7C)に比定することができそうである。

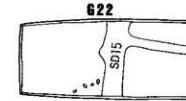
柵は、G12の北東で相次いで検出した。S A 01・S A 02・S A 03の3列を数える。S A 01は、一度作り替えが認められ、N-39°-E及びN-40°-Eとわずかな振りがある。延長11.0m、柱穴は5柱穴と8柱穴を数える。S A 02は、N-28°-E、現存の延長6.0m、4柱穴を確認する。S A 03は、N-34°-E、延長11.5m、6柱穴からなる。いずれの柵の柱穴にも黒褐色粘土が充填されている。

土壤の検出例も多い。すべての土壤について掘り込みを行ない、その性格や時代を明らかにすべく努めたが、成果は不十分に帰した。代表的な4基の土壤について、それぞれの観察結果を略記し、報告に替えたい。S K 01は、G12のほぼ中央、S B 09と重複する形で検出したものである。平面は、短径1.3m、長径は一端がトレチ外に伸びるため不明だが、2.4mを越える楕円形である。深さは0.2mで、断面は皿状を呈す。覆土として6層が識別され、⑥灰褐色泥土層、⑤黒灰褐色粘土と地山のブロック状混入層、④黒灰褐色粘土層、③暗灰褐色粘土層、②黄灰褐色粘土層、①黒褐色粘土層の各層が層を重ねている。①の層中より、壺・甕・高杯などの古式土師器片が比較的豊富に出土し、この土塙の時期を決する好資料となった。

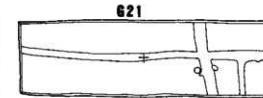
S K 02は、G12の北東側、S A 03と重複して検出したものである。S K 01同様に、平面は、短径0.5m、長径は一端がトレチ外に伸びるが、現存長1.3mを計る楕円形。深さ0.2m、断面は浅い椀状を呈す。覆土として4層が識別され、④黒褐色砂質土層、③黒褐色粘土層、②黒灰褐色粘土層、①黒灰褐色粘土と地山のブロック状混入層の層順で埋没する。②・③・④層には、炭化物片の混入が著しい。S K 03もG12の北東で検出した土壤である。平面は、短径0.5m、長径1.3mの楕円形を示し、深さは0.2m、断面は浅い椀状を呈す。覆土として3層が識別され、③地



+



+



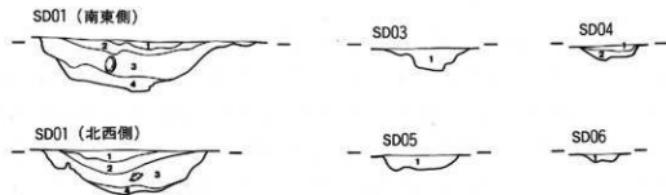
621



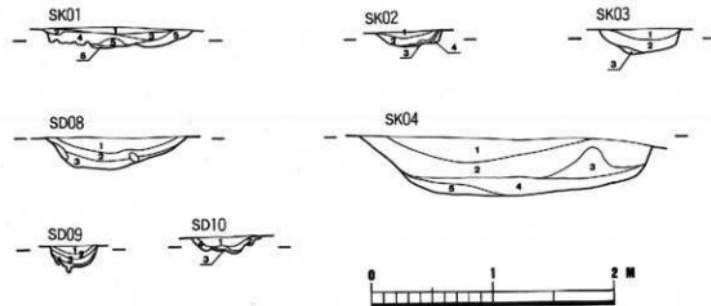
620

第2図 G地区遺構全図

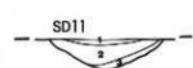
G11



G12



G13



第3図 G地区造構断面図
(G11はTP 88.30m、G12・G13はTP 88.50m)

山のブロック、②黒褐色粘土層、①黒褐色粘土と地山のブロック状混入層が順次層をなす。

S K04は、G12の北東端で検出した土壤である。平面は、短径2.4m、長径2.9mの大型の椿円形を示し、深さは0.5m、断面は浅い椀状を呈す。覆土として5層が識別され、⑤暗灰褐色砂泥層、④黒灰褐色砂泥層、③地山のブロック、②淡黒灰褐色粘質土層、①暗灰褐色粘質土層が層をなす。④・②・①の各層には炭化物片の混入が認められる。この土壤の覆土のみ灰褐色を基調とする点で、他の土壤と異なる。S K04と同じ色調の覆土を持つ造構として、先の掘立柱建物C類があり、そのことからこの土壤も古墳時代後期(7C)の所産と解される。

溝の検出例も多く11条について精査した。その結果、覆土の色調から2種が識別された。SD08・SD09・SD10とSD01・SD02・SD03・SD04・SD05・SD06・SD07・SD11の両者である。前者は黒褐色粘土を基調とするもので、先述のSK01に混入していた資料から古墳時代前期の所産と予測される。後者は灰褐色粘土を基調とするもので、後述のSD01に混入してい

た資料から古墳時代後期（7C）の造構と考えてよいだろう。以下、各溝ごとに成果の概要を記していくことにしよう。

S D01は、南東から北西へ流れを刻む溝である。幅1.4—1.8m、深さ0.4m、断面は椀状を呈す人為的なものである。覆土は4層が識別され、④黒褐色砂泥層、③暗黒褐色腐植土層、②暗灰褐色粘土層、①灰褐色粘土層が層を重ねている。③・②層には灰褐色の微砂が薄く層状に介入しており、古墳時代後期（7C）の須恵器を主体とする遺物が多く含まれていた。又、①層中には、地山のブロック状混入が著しい。S D01は、先述の掘立柱建物C類と軸線を一にしており、これらの建物群を分離区画する機能を有していた可能性が考えられる。

S D02・S D03・S D04・S D05・S D06・S D07の各溝は、幅0.3—0.6mの浅くて断面が椀状を呈す一連の溝である。S D02・S D03・S D05・S D06・S D07は黒灰褐色粘土の単純層で覆われる。S D04は②黒褐色砂泥層、①黒灰褐色粘土層の2層で構成される。S D04中からも古墳時代後期の須恵器片が出土している。これらの溝は、その規模・形態が似ており、同様の性格が予測される。中でもS D03・S D05とS D04は、幅2.0m余をへだてて連続と平行している。掘立柱建物C類を各単位ごとにさらに小さく区画する溝であったと思われ、両側に溝をたずさえ幅2.0m余の狭長な空間は道路敷ではなかったかと推定される。興味深い造構ということができよう。

S D08はG12の南西側で検出した比較的大型の溝である。南東より北西に流れを刻む。溝幅1.1m、深さ0.3m、断面は浅い椀状を呈している。覆土は3層が識別され、③煤色砂泥層、②黒色粘土層、①黒褐色粘土層が層を重ねる。先述のS D01と同様の機能、つまり掘立柱建物A類を分離区画する溝ではなかったかと考えられる。

S D09は、周囲の掘立柱建物A類とほぼ軸線を一にする小溝である。溝幅0.4m、深さ0.2m、断面がU字状を呈す安定した溝である。覆土として4層が識別され、④黒褐色粘土層、③灰褐色粘土層、②淡黒褐色粘土層、①黒褐色粘土層が順次薄く層をなしている。S D10は、S D09と同様の小溝。溝幅0.5m、深さ0.2m、断面椀状を呈す。覆土として③地山と黒灰色砂質土のブロック状混入層、②黒灰色砂質土層、①黒褐色粘土層の3層が確認される。

S D11は、G13の南西端で検出した溝。東より西へと流れを刻むが、東側では2条に分離している。溝幅0.9m、深さ0.3m、断面は安定した椀状を呈している。覆土は、③黒灰褐色砂質土層、②黒褐色粘土層、①暗灰褐色粘土層の3層が認められ、③層中には地山のブロック状混入が著しく、又、②層中からは須恵器細片若干が出土した。S D01・S D08などと同様の機能が考えられる溝である。

G16—G17区

G16・G17の両グリッドは、G地区北端に位置する。両グリッドより、耕土と床土直下の地山（暗青灰色粘土層）上で、溝及び若干のピット等が検出された。

S D12は南東より北西に向かって直進する小溝、幅0.3m、深さ0.2m、断面椀状を呈す。覆土

は黒灰褐色粘土の単純層。

S K05・S K06・S K07は、いずれも楕円形を呈す土壤状の落ち込み。いずれも幅0.5m程度、深さ0.3m、断面椀状で、暗灰褐色粘土の単純層で埋まる。

S D14は、G17で検出した溝状遺構。東西に流れを刻むが、東は途上で消失する。幅0.3m、深さ0.2m、断面椀状を呈す。覆土は灰褐色粘土の単純層。周辺に若干の柱穴が認められるが、建物としてまとまるまでにはいたらない。

G20—G25区

G地区の西端で検出した遺構群である。G20—G22で検出した溝群と、G24・G25で検出した大溝に大別される。いずれも耕土と床土直下の地山（青灰褐色粘土層）で確認されたものである。

G20—G22で検出した溝群は、S D15の溝とそれに直交ないし平行する小溝群で構成される。S D15は、南東より北西に流れを刻む溝。幅1.0m、深さ0.5m、断面椀状を呈す。覆土は、③暗黒灰褐色粘質土、②黒灰色粘質土、①黒灰褐色粘土の3層が識別される。②層中には微量の砂が混じり、流れのあったことを裏付けている。他の縦横に交わる小溝は、幅0.3m前後、深さ0.2m余、断面U字状を呈すものが多い。覆土は、②黒灰色粘質土、①黒灰褐色粘質土の2層で構成される。これらの溝群は、かつては水田の畦畔に伴う溝であった可能性が高く、その場合には、S D15を本流、他の小溝を支流としていたであろう。

G24・G25で検出した大溝は、両グリッドにまたがり、南東より北西に向かう自然の流路である。旧河道と称して良いだろう。溝幅14m余を計り、最深部0.5mと深い皿状を呈している。覆土として、③黒灰褐色粘土、②黒灰色粘土、①淡黄灰褐色粘土の3層が識別される。

L 地 区

L地区は、現在の赤野井集落の南方、正南北条里域の南端に位置している。昭和55年度の冬に、県営ほ場整備事業に伴って支線排水路部分（L1区）と削平部分（L2区）の調査を実施した。調査の結果、多数の柱穴や溝等を検出した。柱穴の数は比較的豊富で、L1区で1ヶ所、L2区で3ヶ所、ブロック状に集中する箇所が認められた。かって、多数の建物が、棟を連れ、時期を遡えて存在していたものと思われるが、本稿では確実に建物プランを把握できた2棟に記述をとどめ、他はあえて建物としてまとめずに識者の判断をあおぐことにしたい。以下、遺構ごとに略記することにしよう。

掘立柱建物（S B01）

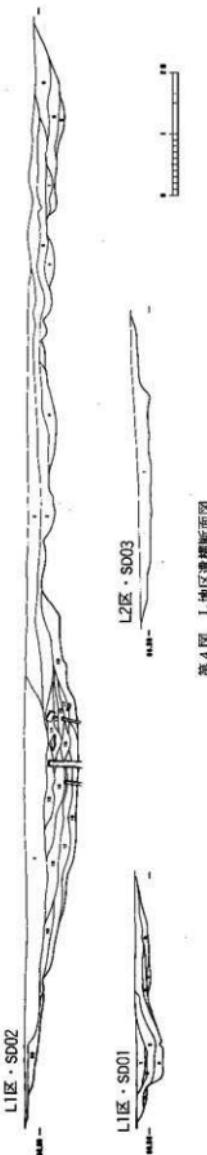
L2区中央やや北東よりで検出したN-54°-Eを保つ掘立柱建物である。桁行2間、梁行2間の総柱。柱の掘り方は、0.3-0.5m四方の隅丸方形を呈し、掘り方内には径0.2mの柱穴痕が確認される。掘り方には黒灰褐色粘質土、柱穴には黒褐色粘質土が充填される。柱筋は良く通っており、柱間は桁行1.8m、梁行1.5mにほぼ揃っている。古墳時代後期の溝（S D03）を切り込んで構築されており、他の柱穴内出土土器などから考えて奈良時代頃の建物と考えられるが、断定するまでには至らない。

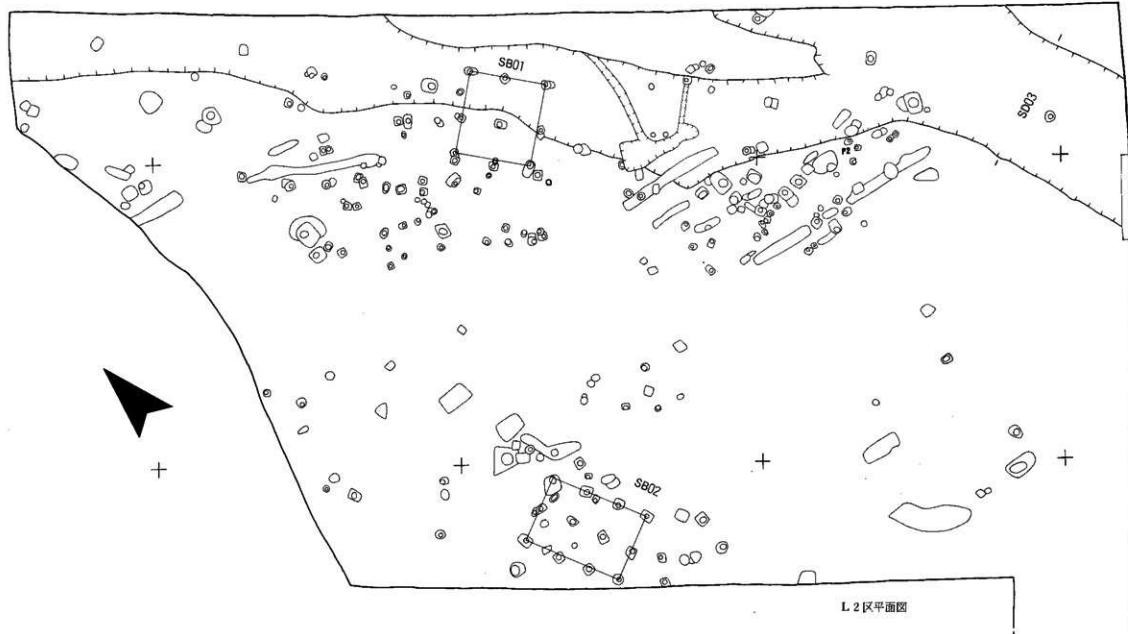
掘立柱建物（S B02）

L2区中央南西端で検出したN21°-W-を保った掘立柱建物である。桁行3間、梁行2間の総柱。柱の掘り方は、0.4m-0.7m四方の隅丸方形を呈し、掘り方内には径0.2mの柱穴痕が確認される。掘り方には黒灰褐色粘質土、柱穴には黒褐色粘質土が充填される。柱筋は良く通り、柱間は桁行1.3m、梁行1.5mにほぼ揃っている。S B01と同様、倉庫であろう。

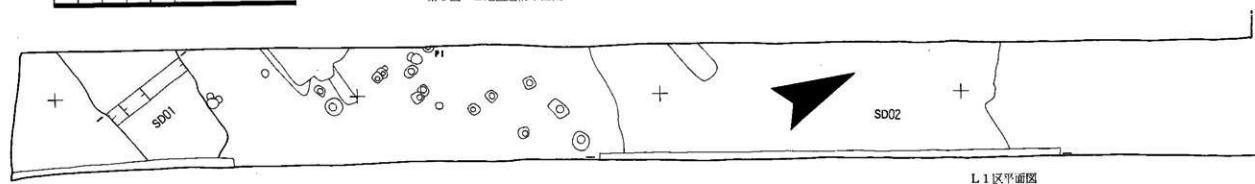
溝（S D01）

L1区南西端を東から西へ流れる溝である。このあたりの地山である灰褐色砂礫層を切り込んで流れをつくる。溝幅は4.0m。ただし、一度テラスを設けており、テラスを除いた狭い溝幅は





第5图 L地区选址平面图



1.4m、深さ0.4mを計る。溝内の覆土として7層が識別される。⑦層は淡黒褐色砂泥層、以下は⑥灰褐色砂礫層、⑤灰色砂層、④黒褐色泥土層、③黒灰色砂質土層、②赤褐色砂礫層、①淡黒灰褐色粘質土層が累々と層を重ねる。③層には若干の小礫を含み、古墳時代後期の須恵器・土師器の他、木製品や骨片などが出土する。②層は酸化鉄の沈着が著しく、全体に赤色を帯びている。この溝は、昭和52年度に隣接地の発掘調査で検出した溝の続きであり、その際には木製の琴などが出土して話題となった。

旧河道（S D 02）

L 1区中央を、南東より北西に流路を刻む旧河道である。地山の灰褐色砂礫層より切り込まれ、灰白色砂層中に底部を置く。幅18.0m、最深部0.9mを計る。ただし、実際に河道の機能を果していたのは、河道中央の6.5m間。河道中には、護岸のためか、あるいは他の意図があったのか、何本もの杭が打ち込まれていた。旧河道の覆土としては20層を識別することができた。⑩層は黒灰褐色粘質土層、以下⑨黒灰褐色泥土層、⑧黒灰色礫層、⑦灰褐色粘質土層、⑥黒褐色粘土層、⑤黒灰色砂礫層、④黒灰褐色粘土層、③黒褐色腐植土層、②黒灰褐色粘質土層、①黒褐色礫層、⑩灰褐色砂質土層、⑨黒灰褐色粘土層、⑧黒灰褐色砂礫層、⑦黒灰色礫層、⑥黒灰色砂質土層、⑤淡黒褐色粘土層、④黒灰色砂礫層、③黒灰色粘土層、②黒褐色粘土層、①暗黒褐色粘土層が層を重ねる。⑩・⑪の両層には礫の混入が認められる。⑪層では粒状のリン分が検出され②・①・両層中には酸化鉄と酸化マンガンの沈着が著しい。そして、⑭-⑪層中から奈良時代の須恵器や木製品が出土した。遺物は⑬・⑪層中に特に多く含まれていた。

溝（S D 03）

L 2区北東側で、南から北に流れを刻む溝である。溝は途中から2条に分流している。人為的な溝とは考え難い。溝幅5.0m、深さ0.2mの浅く広い溝。溝中は①黒褐色粘土の単純層で埋まる。

M 地 区

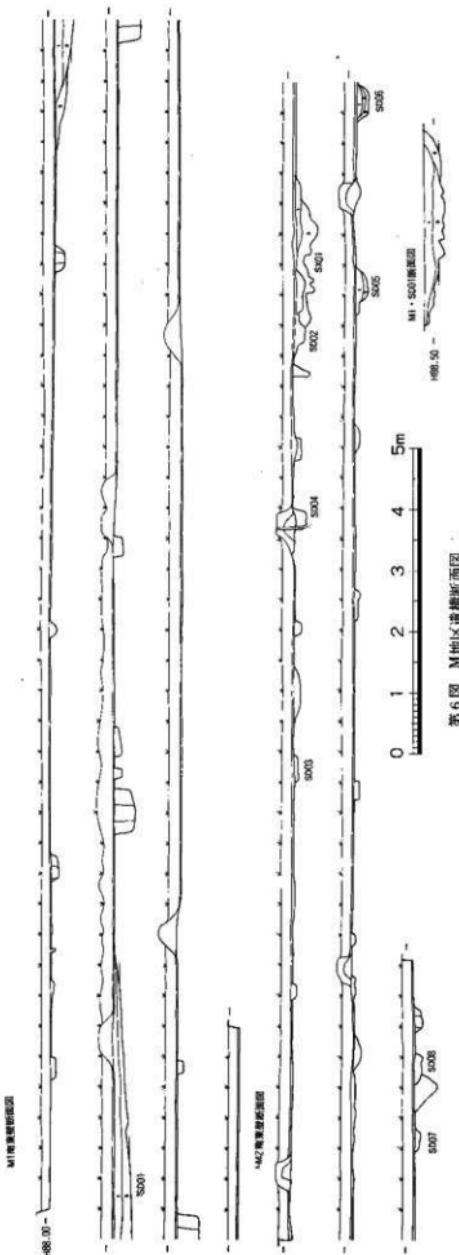
M地区は、L地区とは1条のクリークをへだてた南西に位置する。このクリークは赤野井正南北条里城の南限を画してもいたようだ。M地区は、L地区の支線排水路部分（L 1区）の延長上にあり、M 1区・M 2区の狭長なトレンチで構成される。

調査の結果、全域から柱穴、溝などの遺構が検出された。柱穴の数はおびただしいものがあるが、狭長なトレンチ調査でもあり、掘立柱建物として構成するのは容易なことではなく、一応 S B01—S B09の9棟にとどめた。各遺構とも奈良時代のものが主体をなすようである。

これらの遺構は、耕土とその床土直下に広がる地山、灰褐色粘質土層より切り込まれる。地山は比較的安定しているが、M 1区北東側のみや砂質化が認められた。以下、検出した遺構について、それぞれの概要を記すことにしておこう。

掘立柱建物（S B01）

M 1トレンチの北東、溝（S B01）のすぐ西で検出した掘立柱建物である。N—7°—Eとほぼ正南北に近い方位を保つ。西側の一部がトレンチ外に伸びているが、桁行2間、梁行2間の総



第6図 M地K遺構断面図

柱からなる掘立柱建物と考えられる。掘り方は0.8—1.0m四方の隅丸方形を基調とする。すべての掘り方内に柱根跡が認められ、その径は0.3m余、掘り方・柱根跡とともに大型である点が留意される。総柱であることも考慮すると、倉庫であった可能性が高い。掘り方には黒灰褐色粘質土が充填され、柱根跡には黒灰色粘土が流入している。両土とも地山のブロック状混入があり、それは柱根跡で特に著しい。柱筋は良く通り、柱間は桁行1.8m、梁行1.6mを計る。柱穴P2より奈良時代後葉の須恵器杯蓋1点が出土している。

掘立柱建物（S B02）

S B01のすぐ東に位置する掘立柱建物である。S B02に近いN—11°—Eの方位を保つ。建物の東側過半がトレチ外に伸びている。桁行2間、梁行1間以上を数える。掘り方は、一辺0.8m前後の隅丸方形を基本とする。柱根跡は径0.3m。掘り方に黒灰褐色粘質土、柱根跡には黒灰色粘土が入っている。掘り方・柱根跡ともS B01と同じく大型であり、S B01と同時期・同規模の倉庫様建物であった可能性が高い。柱筋は良く通り、北側はS B01と面をそろえている。柱間は桁行2.0m、梁行1.6mを計る。

掘立柱建物（S B03）

S B01の南で検出した掘立柱建物である。方位をN—16°—Eに保つ東西棟の建物。東側の一部がトレチ外に伸びているが、桁行2間以上、梁行2間を数える。掘り方は0.5—0.7mの隅丸方形を呈するが、棟に沿った長方形プランのものが顕著である。柱根跡は径0.2m。S B01・S B02の倉庫様建物に比べると掘り方・柱根跡ともに小型であるが、方位などを考慮すると同期の建物を考えるのが妥当である。掘り方に黒灰褐色粘土、柱根跡に黒褐色粘土が入る。柱筋は比較的良く通り、柱間は桁行1.8m、梁行1.7mを計る。

掘立柱建物（S B04）

S B03の南方で検出した掘立柱建物。N—9°—Eに保ち、東西棟の建物かと思われる。東側過半はトレチ外に伸びるため建物の全容は不明だが、現況で桁行1間以上、梁行2間。掘り方は0.5—0.7mの隅丸長方形を呈す。柱根跡は径0.2m。掘り方に黒灰褐色粘土、柱根跡に黒褐色粘土が充填される。柱筋は若干みだれる箇所が認められるが、桁行2.2m、梁行2.2m。他の建物に比べやや間延びした感がある。柱穴P4とP5より奈良時代後葉の須恵器杯蓋各1点が出土している。

掘立柱建物（S B05）

M1トレチ南西端近くで検出したN—8°—Eの建物。やはり東西棟か。東側過半はトレチ外に伸びており不明。桁行1間以上、梁行2間を計る。掘り方は小さく0.3—0.4m、柱根跡は0.2m。掘り方に黒灰褐色粘土、柱根跡に黒褐色粘土が入る。柱筋は良く通り、桁行2.1m、梁行2.3m。

掘立柱建物（S B06）

M 2 トレンチ北東側で検出した掘立柱建物。N—6°—Eに保ち、棟は南北棟。北西側の一部がトレンチ外に伸びており不明だが、桁行3間、梁行2間と思われる。掘り方は0.3—0.5mと小さく、柱根跡は0.2m。掘り方に黒灰褐色粘土、柱根跡に黒褐色粘土が充填される。柱筋は比較的良く通り、桁行は北より1.8m、2.2m、2.5mと不揃い。梁行は2間で4.0mを計る。

掘立柱建物（S B07）

M 2 トレンチ南西側で検出したN—3°—Eの建物。棟は東西棟。建物の一部がトレンチ外に伸びているが、桁行3間、梁行2間の規模が想定される。掘り方は円形と方形プランのものがあり、径0.4—0.7mと一定しない。柱根跡は0.2m。掘り方に黒灰褐色粘土、柱根跡に黒褐色粘土が入る柱筋は良く通り、柱間は桁行2.0m。梁行は2間で3.0m。柱穴P 7より奈良時代後葉の須恵器杯蓋1点、P 8より同期の須恵器杯身1点が出土している。

掘立柱建物（S B08）

S B07に一部重複する形で検出した建物である。方位をN—7°—Eに保ち、棟は東西棟、一部トレンチ外に伸びるが、桁行3間、梁行2間の規模が予想される。掘り方は一辺0.6m前後の隅丸方形を基本とするが、一部円形に近いものも認められる。柱根跡は0.2m余、掘り方に黒灰褐色粘土・柱根跡に黒褐色粘土が入る。柱筋は若干みだれるが、桁行1.8—2.0m、梁行1.7m前後を計る。

掘立柱建物（S B09）

M 2 トレンチ南西端で検出した掘立柱建物である。N—4°—Eにその方位を保つ。建物の南側がトレンチ外に伸びるため全容はつかめないが、桁行・梁行とも1間以上の総柱。掘り方は0.8—1.0m四方の隅丸方形を基調とし、柱根跡は径0.3m余。S B01・S B02などに類似する点が多く、それらと同規模の倉庫様建物と考えられる。ただし、東西棟か。掘り方には黒灰褐色粘質土が充填され、柱根跡には黒灰色粘土が流入している。柱筋は良く通り、桁行2.0m、梁行1.6mを計る。

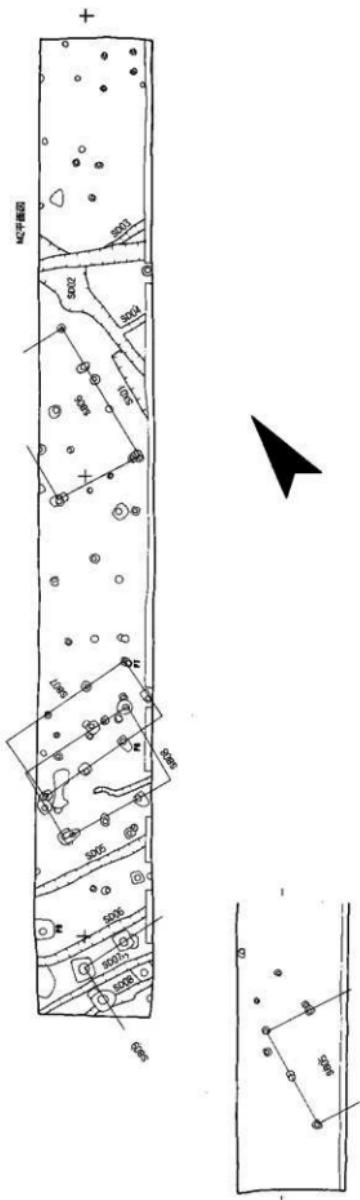
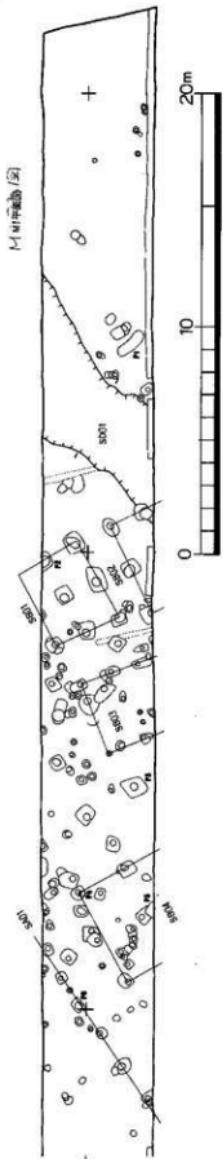
櫛（S A01）

M 1 トレンチ南西側で検出した櫛である。N—3°—Eの方位を保ち、トレンチを斜めに横切っている。5柱穴が確認され、いずれにも掘り方に黒灰褐色粘土、柱根跡に黒褐色粘土が入る。柱穴P 6より奈良時代後葉の須恵器杯身及び柱根が出土している。各掘立柱建物と同期の造構であり、建物との関連が注目される。

溝（S D01）

M 1 トレンチの北東を北から南へ流れる溝である。灰褐色砂質土より切り込まれ、灰褐色グラウシ粘土層中にその底部を置く。溝幅3.0—4.5m、深さ0.4m、断面は浅い皿状を呈す。断面観察の

第7圖 M地K地塊平面圖



結果、③暗黒褐色粘土層、②黒灰褐色砂質土層、①黒褐色粘質土層の3層が識別された。②層中には、奈良時代中葉から9世紀前葉に至る須恵器や木製品が豊富に混入していた。

溝（S D02・S D03・S D04）

M2トレチ北東側で検出した一連の溝である。S D02は北から南へ流路を刻み、そこから枝分かれしたかのようにS D03とS D04の小溝がそれぞれ直交して東方へ流れる。S D02は断面が皿状の浅い溝。S D03・S D04は断面がU字状を呈し、S D04はやや深い。いずれの溝も黒褐色粘土の単純層で覆われる。S D02より奈良時代後葉の須恵器杯蓋1点が出土している。

溝（S D05・S D06・S D07・S D08）

M2トレチ南西側で検出した一連の溝群。いずれの溝も東西方向に流路を保ち並んでいる。断面は各溝とも椀状を呈しており、S D07・S D08は黒褐色粘土の単純層、S D05は②黒灰色粘土層、①黒褐色粘土層、S D06は③黒灰褐色粘土層、②黒灰色粘土層、①黒褐色粘土層でそれぞれ覆われる。S D06より奈良時代後葉の須恵器杯身1点が出土している。これら並存する溝の機能用途は不明。

不定形落ち込み（S X01）

M2トレチの北東側、S D02に切られる形で検出した不定形の落ち込み。断面は皿状を呈す。断面観察の結果、②黒色粘土層、①暗灰褐色粘質土層の2層が識別された。②層には炭化物片が多く含まれ、地山のブロック状混入も認められる。

N 地 区

N地区は、L地区の南方約100mの位置にある。当地区もL地区L2と同じくは場整備による面的な掘削が予想されたため、掘削対象域について全面的な発掘調査を実施した。各調査区は、旧畦畔を尊重し、一筆ごとに1つの区を設けることとした。その結果、調査区はN1-N8に至る8区となった。なお、掘削されるレベルは、地表下40-50cm前後までであることを考慮し、それ以上深い造構については全面掘開せずに、部分掘開方式をとった。以下、各区ごとに検出遺構の概要を記すことにしよう。

N1区

N1区はN地区の最南端に位置する。N地区の中では最もレベルが低く、地山も灰褐色砂質土と砂の混入が著しい。検出した遺構は、柱穴と溝である。柱穴は2棟の掘立柱建物と柵のプランが認められる。掘立柱建物は両棟とも現行条里に近い方位を示す。柵は逆に正南北方位。一方、溝は2条あり、いずれも正南北方位に近い。

掘立柱建物 (SB01)

N1区東隅近くで検出した建物である。方位をN-36°-Eに保つ。現行条里N-34°-Eに近い数値を示す。北東辺、北西辺、南西辺の各中央の柱穴が未確認だが、おそらく桁行2間、梁行2間の総柱の建物であったと思われる。掘り方は直径0.4mの円形を基本とするが、中には隅丸方形プランのものも介在している。柱根跡は約0.2m。掘り方に黒褐色粘土、柱根跡に暗黒褐色粘土に入る。柱筋は比較的良好通り、柱間は桁行・梁行とも1.8mを計る。

掘立柱建物 (SB02)

SB01の南西で検出したN-35°-Eの建物。現行条里にほぼ平行する。南隅と南西辺中央の柱穴が未確認だが、SB01と同様同規模の総柱建物と考えられる。掘り方は一辺0.4mの隅丸方形を基本とするが、中には円形のものもある。柱根跡は0.2m。掘り方に黒褐色粘土が充填され、柱根跡には暗黒褐色粘土が流入している。柱筋は比較的良好通り、柱間が桁行・梁行とも1.3mとSB01より一まわり小型の建物である。

柵 (SA01)

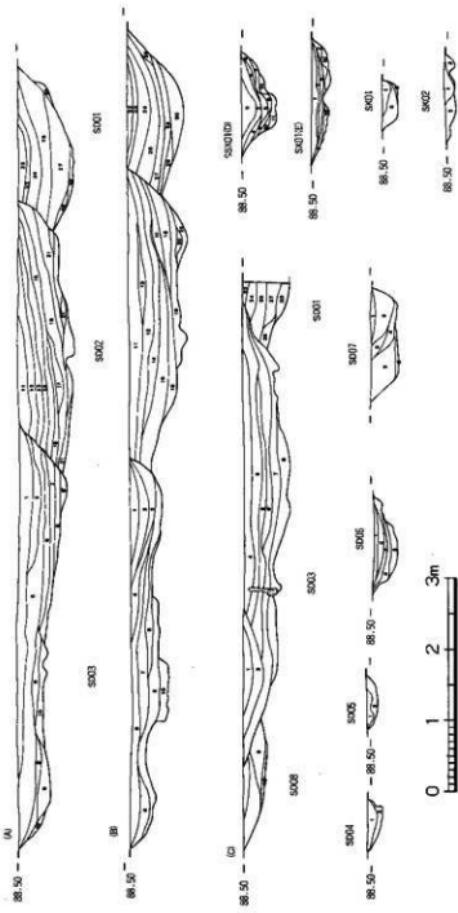
N1区西側で検出した柵。正南北方位を示し、途中で西方向に直角に折れる。南北方向12.5m、東西方向7.4mを計り、いずれも片側は調査区外に伸びる。土地を画する用途に供された柵であろう。柱穴の柱間は2.2-2.4mで、柱筋は良く通っている。

N2区

N 2 区は N 1 区の北東に隣接するトレンチ。枠土と床土直下に灰褐色粘質土が厚く層をなしており、各遺構はこの土層より切り込まれる。調査の結果、小規模な掘立柱建物の他東西方向に走る大小の溝、方形周溝状遺構それに若干の土壤などが検出された。

掘立柱建物 (S B03)

N 2 区南西側で検出した小規模な掘立柱建物である。方位を N - 4° - E に保つ東西棟。桁行 4 間、梁行 1 間の細長い建物が予想される。掘り方は直径 0.2 - 0.3m の円形、柱根跡は 0.1 - 0.2m と小規模。掘り方に墨灰褐色粘土、柱根跡に黒褐色粘土が入る。柱筋は一部掘れる箇所もあるが比較的良好く通っている。柱間は桁行



第8図 N地区N 2トレンチ遺構断面図

1.0m、梁行1.3m。なお、この棟の東方にもかなりの数の柱穴が認められた。中には規模の大きなものもあるが、建物としてのまとまりに欠く。ただ、いずれの柱穴も上部に炭化物片が多量に混入しており、奈良時代末から平安時代初頭頃の須恵器片が出土する。

掘立柱建物（S B04）

S B03の北方で、S B03と一部切り合いつつ直交して存在する建物である。方位をN-10°-Wに保つ南北棟。桁行はS D06に切られて未確だが、おそらく2間になるものと予測され、梁行は1間。小規模な建物である。掘り方は直径0.3mの円形ないし隅丸方形、柱根跡は0.1-0.2m。覆土はS B03に同じ。柱間は桁行1.8m程度が予測され、梁行1.7mを計る。

土壤（S K01）

N 2区東端近くで検出した土壤。方形周溝状造構（S X01）に伴う土壤ではない。長軸1.3m、短軸0.7mの小判形。深さ0.2m、断面は逆台形状。覆土として③暗灰褐色粘質土層、②淡黒灰褐色粘質土層、①暗灰褐色砂質土層の3層が識別される。各土層とも全体に色調が淡く、砂粒の混入が多い。

土壤（S K02）

N 2区東端で約半分を検出した土壤。方形周溝状造構（S X01）を切り込んで構築される。桁円形を呈し、長軸1.3m。深さ0.2m、底部は凹凸があって定まらないが、皿状を呈す。構内は、③黒灰色粘土層、②黒褐色粘土層、①黒灰褐色粘質土層が順次堆積する。①層より奈良時代後葉の須恵器が若干出土している。

大溝（S D01・S D02・S D03）

各溝とも東から西へと流れを刻む大型の溝。A・B・Cの3箇所にセクション帯を入れて断面観察を実施した。その結果、切り合い関係からS D03が最も新しく、次いでS D02、S D01が最も古いことが判明した。S D01は、想定幅3.0m程度、深さ0.8m、断面椀状の溝。灰褐色粘質土層の地山より切り込まれ、灰褐色砂層を経て灰褐色腐植土層中にその底部を置く。覆土として⑩-⑪の9層が確認される。⑩黒灰色泥土と灰白色砂の継状堆積層、⑪黒灰褐色泥土層、⑫黒褐色砂泥層、⑬淡黒褐色粘土層、⑭地山と⑮層のブロック状混入層、⑮黒灰色粘土層、⑯暗黒灰色粘土層、⑰黒色粘土層、⑱淡黒色粘土層が順次層を重ねる。⑯層の中には炭化物片の混入が著しい。S D02は、想定幅5.0m程度、深さ0.8m、断面はやや浅くて広い椀状の溝。覆土として⑪-⑯の11層が堆積する。⑯暗灰白色砂層、⑰黒灰色砂質土層、⑲暗黒灰色泥土層、⑳灰褐色粘土層、㉑暗黒褐色粘土層、㉒黒灰色泥土層、㉓黒褐色泥土層、㉔暗黒褐色粘土層、㉕黒灰褐色粘土層、㉖淡黒褐色粘土層、㉗暗黒灰褐色粘質土層である。㉗層中に炭化物片の混入があり、㉘層は酸化鉄の沈着が著しい。S D03は幅6.0m前後、深さ0.6m、断面は溝底に若干の凹凸が認められるが、

全体として浅い皿状を呈す。覆土として⑩—①の10層が識別される。⑩黒灰色泥土層、⑨黒褐色粘質土層、⑧暗灰褐色砂質土層、⑦黒褐色泥土層、⑥暗黒灰色粘土層、⑤黒灰色砂質土層、④黒灰色粘土層、③暗黒灰色粘土層、②黒灰褐色粘質土層、①暗黒灰褐色粘質土層が層を形成する。⑩層中には自然木が多く混入する。流木と思われ、一時的な激しい流れを裏付けるものであろう。⑦層は一部砂質化しており、そこに土器や木製品の混入が認められる。⑨層には酸化鉄、②・①両層には酸化マンガンの沈着が著しい。これら3条の大溝は、いずれもほぼ正しく東から西方向に流路を刻んでおり、区画的な機能を保持していたとも考えられる。S D03より奈良時代後葉の須恵器が若干出土する。

溝（S D04）

S D03の南方に、S D03と平行して流れる小溝。それはやがてS D06に合流する。溝幅0.7m、深さ0.3m、断面は浅い椀状を示す。覆土として、②黒灰色粘土層、①黒灰褐色粘土層が堆積する。①層には酸化鉄と酸化マンガンの沈着が認められる。層中より奈良時代の須恵器片が若干出土する。

溝状造構（S D05）

S D04に平行し、S B03の手前で溢りとなって消失する溝状造構。S B03と関連する造構であろうか。溝幅0.7m、深さ0.3m、断面は浅い椀状を呈す。覆土として、②黒灰色粘土と地山の混入層、①黒灰色泥土層の2層が確認される。奈良時代後葉の須恵器が混入する。

溝（S D06）

S D03より分岐し、S D04と合流する溝。溝幅1.4m、深さ0.6m、断面は椀状を呈す。溝内には5層の土砂が堆積を重ねている。⑤黒灰色粘土と地山の混入層、④暗黒灰色粘土層、③黒灰褐色粘土層、②暗灰褐色粘土層、①黒褐色粘土層である。各層とも薄いレンズ状堆積を示す。奈良時代後葉の須恵器が混入する。

溝状造構（S D07）

S D06の北隣で検出した溝状造構。狭長な土壤とも考えられる。幅1.6m、深さ0.4m、断面は逆台形。⑥黒灰色泥土層、⑤黒色の強い地山流入土層、④黒灰色粘土層、③暗灰褐色粘土層、②淡黒灰褐色粘土層、①黒灰褐色粘土層の6層が堆積を重ねて埋まる。②層には地山のブロック状混入が著しい。

溝（S D08）

S D03に切られてほとんどその姿をみせない溝である。C断面でかろうじて確認することができた。溝幅は復元すると3.0m程度、深さ0.4m、断面は皿状を呈す。⑩黒灰色泥土層、⑨黒褐色粘質土層、そして灰褐色粘質土層、最上部に暗灰褐色粘質土層の4層が堆積する。

方形周溝状遺構（S X01）

N 2 区東方で検出した方形周溝状遺構。南溝は S D01 に切られ、東溝は区外に伸びるため不明。各コーナーは陸橋部状に幅を狭める傾向がある。北溝の中央約 6 m 間は、内側に偏して溝が 1 段深くなる。主体部は確認されない。セクション番を入れた D・E 2 地点での観察によると、溝幅は D 地点で 1.5 m、E 地点で 1.8 m、深さは D 地点で 0.5 m、E 地点で 0.3 m をそれぞれ計る。覆土は 11 層が識別され、①黒灰色粘土と地山のブロック状混入層、⑩暗灰褐色砂質土層、⑨淡黒灰色砂質土層、⑧灰褐色泥土層、⑦黒色粘土と地山の薄い縞状堆積層、⑥淡灰褐色砂質土層、⑤淡黒色粘土層、④黒灰褐色粘土層、③黒色粘土層、②暗黒灰色粘土層、①暗黒褐色粘土層の各層がレンズ状堆積をなす。③層中より須恵器片が若干出土しているが、後世の流入に起因するものであろう。

N 3 区

N 3 区は、N 2 区の北東に隣接する狭長なトレンチである。地山は N 2 区同様灰褐色だがやや砂質化する。掘立柱建物の他、柵・土壤・溝そして方形周溝状遺構が検出された。掘立柱建物は 3 棟あり、いずれも方位が近似する。おそらく同期の建物と考えられる。

掘立柱建物（S B05）

方位を N-3°-W とほぼ正南北に保つ掘立柱建物。未確認の柱穴もあるが南北棟の建物で、桁行 4 間、梁行 2 間の規模が予想される。柱穴の掘り方は一辺 0.3-0.6 m の方形ないし隅丸方形、柱根跡は 0.2-0.3 m の円形。掘り方に墨灰褐色粘土が充填され、柱根跡に黒褐色粘土が流入する。柱筋は現存のものに限ると比較的良く通っている。復元される柱間は、桁行 1.6 m、梁行 1.8 m を計る。

掘立柱建物（S B06）

S B05 の北東に位置し、方位を同じく N-3°-W に保つ掘立柱建物。S B05 の東側柱筋が、当建物の西側柱筋にはば揃う。南北棟の建物で、桁行・梁行とも 2 間。柱穴の様相は S B05 に同じ。柱筋は良く通り、柱間は桁行 2.1 m、梁行 1.9 を計る。

掘立柱建物（S B07）

S B06 の北にあり、S B06 と柱筋をほぼ同じくする建物である。方位は N-1°-W。建物の西側はトレンチ外に伸びるため不明だが、S B06 と同規模である可能性が高く、南北棟で桁行・梁行とも 2 間の建物が予測される。柱穴の様相は他の建物に同じ。柱筋は良く通り、現況での柱間は、桁行 2.1 m、梁行 1.8 m。なお、以上の建物以外にも、この建物の北東方向には多数の柱穴が認められる。本米はさらに多くの建物が群在していたものと思われるが、現状では建物としてのまとまりにいまひとつ欠けるため、誤謬を恐れ建物として記載しなかった。

構 (S A02)

S B05に重なりながら、N 3区を越えN 6区へ伸びる構。方位をN-8°-Wに保つ。9柱穴が確認され、掘り方は0.3-0.4mの円形ないし隅丸方形、柱根跡は0.1-0.2mの円形。掘り方に黒灰褐色粘土が充填され、柱根跡に黒褐色粘土が流入する。柱穴の柱間は2.7mと3.1mの2様が存在するようである。柱筋は良く通っている。

土壤 (S K03)

調査区南方で検出した1.0m×0.8mの円形に近い隋円形の土壤。深さ0.2m、断面はU字状を呈す。壇内には②黒灰色粘土層、①黒褐色粘土層の2層が堆積する。

土壤 (S K04)

一边が1.2m×1.5mの隅丸長方形の土壤。深さ0.4m、断面は椀状を呈す。壇内より②黒灰色粘土層、①黒褐色粘土層の2層が識別される。壇中より奈良時代末の須恵器杯蓋が出土している。

溝 (S D09)

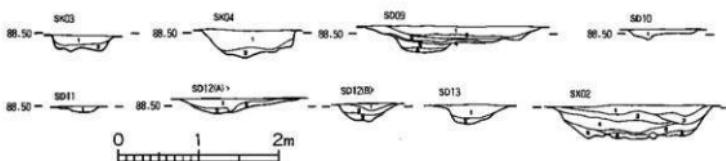
東より西へ、わずかに弧を描いて流れる溝。溝幅2.2m、深さ0.3m。断面は皿状を呈し、一部U字状に深くなる箇所が認められる。覆土として6層が確認される。⑥黒灰色砂礫層、⑤黒褐色粘土層、④黒灰色砂礫層、③暗黒灰色粘土層、②黒灰色砂礫層、①黒灰褐色粘土層の6層、粘土層と砂礫層が互層をなしている点が留意される。溝内より奈良時代末の須恵器杯蓋などが出土する。

溝 (S D10)

S B05を切って、北から南へ流れる溝である。N 7区に端を発しており、N 6区を経て当区に流路を刻む。溝幅0.9m、深さ0.1mの浅い皿状の溝。黒灰褐色粘土層の単純層で覆われる。

溝 (S D11)

S B06の北に発し、東へ弧を描いて流れる溝。溝幅は東に向かってだいに広くなるが、断面観察を行った箇所で0.5m、深さ0.1mの浅い皿状を呈す。黒灰褐色粘土層の単純層で覆われている。



第9図 N地区N 3 トレンチ造構断面図

溝 (S D12)

調査区東端で大きく弧を描いて流れる溝である。次のS D13に切り込まれる。溝幅・深さともに所によって変化が激しいが、A断面箇所で幅1.5m・深さ0.2m、B断面箇所で幅0.7m・深さ0.3mをそれぞれ計る。覆土として3層が識別される。③黒灰色粘土層、②黒灰褐色粘質土層、①暗灰褐色粘質土層である。

溝 (S D13)

東から西へ、S B07やS D12を切って流れる溝。西端はS D10に直交しかつ合流しているものと思われる。溝幅0.9m、深さ0.3m、断面は椀状を呈す。②黒灰色粘土層、①黒褐色粘土層の2層によって埋没する。溝内より奈良時代末の須恵器杯蓋が出土している。

方形周溝状遺構 (S X02)

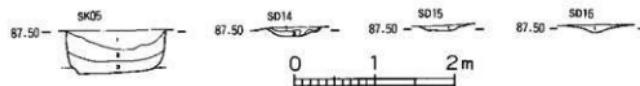
調査区南端で、かろうじて北コーナー部を検出し得た方形周溝状遺構。周溝は安定しており、溝幅2.0m、深さ0.4m、断面は底部の平坦な椀状を呈す。覆土は6層が識別され、⑥暗灰褐色砂質土層、⑤黒色粘土と黒灰色粘土の縞状堆積層、④地山と⑤層のブロック状混入層、③黒灰色粘土層、②暗灰褐色粘土層、①黒色粘土層の各層が薄いレンズ状堆積をなす。溝内には奈良時代後葉の須恵器杯身などが混入している。

N 4 区

N 4 区はN 3 [X]の北東に位置する調査区である。地山はこれまでと同様の灰褐色粘質土であるが、北端あたりのみ砂礫化を強める。そのため北端一帯で耕土改善が行なわれ、この地山を40cm余排除し、新しく粘質土が投入されている。したがって、当初の地山に刻まれていた各遺構は現存していない。検出した遺構は、掘立柱建物・土壙そして溝である。

掘立柱建物 (S B08)

調査区東方の柱穴群中で把握した掘立柱建物。方位をN-3-Wのほぼ西南北に保つ。桁行・梁行とともに3間の縦柱からなる、比較的規模の大きな建物が予想される。掘り方は0.3-0.5mの隅丸方形、柱根跡は0.2m前後の円形を呈す。掘り方には黒灰褐色粘土が充填され、柱根跡には黒



第10図 N地区N 4 トレンチ遺構断面図

褐色粘土が流入する。柱筋は良く通り、柱間は桁行2.3m、梁行2.1mを計る。P 2より9 C前葉の灰釉皿が出土している。

土壤 (SK 05)

調査区南端で検出した隅丸方形の土壤である。幅1.3m、深さ0.5m、断面は明確なU字状。灰褐色粘質土の地山より切り込まれて、次の灰褐色砂礫層中に底部を置く。層内は、③黒灰色粘土層、②黄褐色粘土層、①黒灰褐色粘土層がそれぞれ安定した堆積を示す。各層とも地山のブロック状混入が著しく、炭化物片の混入も認められる。

溝 (SD 14・SD 15)

両溝とも南より北へ小さな流れを刻む溝である。調査区南方に端を発し、北方の擾乱に至って消失する。SD 14は、溝幅0.7m、深さ0.2m、断面は浅い皿状。②黒灰色粘土層、①黒褐色粘土層の2層が識別される。SD 15は、溝幅0.6m、深さ0.1m、断面は浅い皿状を呈す。黒褐色粘土層の単純層で埋まる。SD 15内から9 C前葉の平瓶が出土している。

溝 (SD 16)

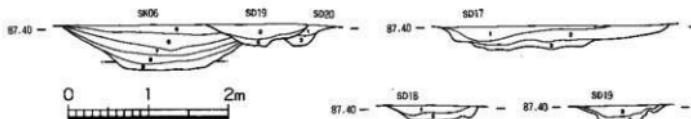
南東より北西に向かって流れる溝である。南東側はトレンチ外に伸び、北西は擾乱によって消失する。先述のSD 15に切られている。溝幅0.8m、深さ0.1m、断面は浅い皿状を呈す。溝内は黒褐色粘土の単純層で覆われる。酸化鉄の沈着が著しい。溝内より奈良時代末の杯身などが出土している。

N 5 区

N 5区は、N地区の北東端に位置する。当区は地山が安定せず、中央一帯は他区に同じく灰褐色粘質土であるが、東方は砂質化して酸化鉄や酸化マンガンの沈着が著しく、遺構検出を困難ならしめた。一方、西方はさらに下層の地山である灰褐色砂礫層が直接露呈していた。検出した遺構は、土壤及び溝である。出土遺物は余り多くないが、全体として他城より古式のものが多いようと思われる。

土壤 (SK 06)

SD 18・SD 19・SD 20の各溝に切られる楕円形の大型土壤。灰褐色粘質土の地山より切り込まれ、次の灰褐色砂礫層中に底部を置く。長軸3.8m、短軸2.5mを計る。深さは0.6m、断面は碗状を呈す。覆土として5層が識別され、⑨黒灰色粘土層、⑧黒褐色粘土層、⑦暗黒灰褐色粘土層、⑥黒色粘質土層、⑤灰褐色粘土層がきれいなレンズ状堆積を示している。⑨層には地山のブロック状混入があり、⑧層中には炭化層の薄い縞状介入が認められた。



第11図 N地区N5トレンチ遺構断面図

溝 (SD17)

南東より北西方向へ直線的に流れる大型の溝。南東側はN4区に端を発し、北西側はN7区に連続する。溝幅2.8m、深さ0.3mと浅く広い皿状の溝である。覆土として、③灰褐色砂礫層、②黒灰色砂質土層、①黒灰褐色粘土層の3層が確認される。

溝 (SD18)

調査区東端に発して東から西へ流れ、途中で流れを直角に振って北へ進み、やがてSD17の下にかくれる溝である。溝幅1.2m、深さ0.2mの浅い皿状を呈す。②黒灰色粘土層、①黒褐色粘土層の2層が識別される。②層中には地山のブロック状混入が著しい。

溝 (SD19)

SD18とはやや方位を異にしながらも、東から西へ流れ、途中で流れを直角に振り北進する溝である。SD17を切って流れる。溝幅1.1m、深さ0.2m、断面は上方を皿状に、下方をU字状に掘開する。覆土として、④黒灰褐色粘土層、③暗黒褐色粘土層の2層が堆積する。この溝で画された内側には若干の柱穴が確認されており、建物の外周を巡る溝であった可能性も考えられる。溝内より奈良時代前期の杯身などが出土する。

溝 (SD20)

SD18の一辺に平行気味に流れを刻む直線的な溝。SD17に切られるため明確ではないが、SD18に合流する流れであったと予測される。覆土はSD18に全く同じである。溝幅0.5m余、深さ0.3m、断面は椀状を呈す。

N6区

N6区はN3区の西隣に位置し、N3区同様、最も遺構の集中するトレンチの1つである。地山も安定し、灰褐色粘土が厚く層をなしている。この地山を切り込んで、掘立柱建物・土壤・溝・方形周溝状遺構などが多数検出された。特に土壤は15基検出しており、数とともにその性格が留意されるところである。

掘立柱建物（S B09）

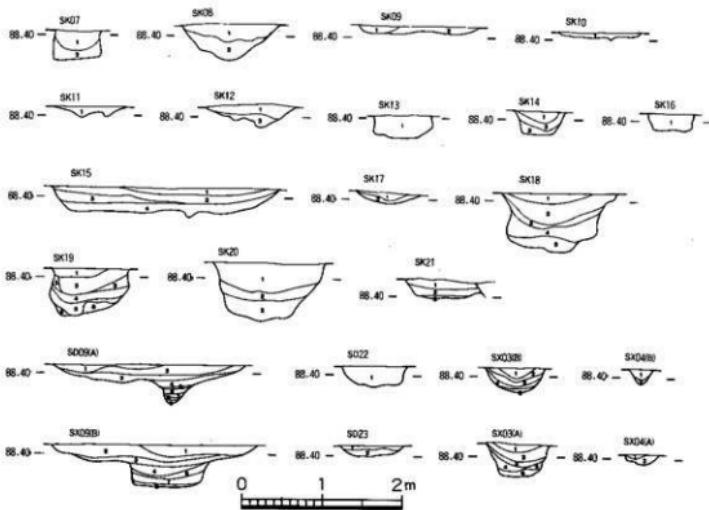
N 6 区南端で検出した総柱の掘立柱建物。方位を N—9°—W に保つ。建物の過半がトレンチ外に伸びるためその全容は不明だが、桁行 2 間以上、梁行 2 間の南北棟建物が予想される。柱穴の掘り方は 0.3—0.5m、柱根跡は 0.2m 前後、掘り方に黒灰褐色粘土が充填され、柱根跡には黒褐色粘土が流入する。現存する柱筋は良く通り、柱間は桁行・梁行とも 1.8m を計る。

掘立柱建物（S B10）

S B09 の北方に位置する総柱の掘立柱建物。方位を N—9°—W に保つ。S B09 に柱筋がそろっている。桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟建物である。柱穴の様相は S B09 に同じ。柱筋は良く通り、柱間は桁行 2.2m、梁行 2.0m を計る。

掘立柱建物（S B11）

S B10 の北方に存在する N—3°—W の方位を保つ掘立柱建物。建物の西辺の一部がトレンチ外に伸びており全容は不明だが、桁行・梁行とも 2 間の南北棟建物が予想される。柱穴の様相はこれまでの建物に同様である。柱筋は比較的良く通り、現存の柱間は桁行 3.0m、梁行 2.3m。この建物の北東方向にもピット群が存在しており、かつては數棟の建物が存在していたものと思われるが、現状では建物としてのまとまりにいまひとつ欠ける。



第12図 N地区N 6 トレンチ遺構断面図

土壤 (S K 07)

S B10の南方に存在する楕円形の土壤。長軸0.6m、短軸1.2m、深さ0.4m。断面は袋状にやや広がって台形を呈す。壙内には、②黒褐色粘土層、①黒灰褐色粘土層の2層が堆積する。両層とも炭化物片の混入が認められる。

土壤 (S K 08)

S K07の東方で検出した楕円形の土壤。長軸1.8m、短軸1.2mを計る。深さ0.5mで断面は椀状。②黒褐色粘土層、①黒灰褐色粘土層の両層で覆われる。両層中より炭化物片が若干出土した。

土壤 (S K 09)

S K08の北東側で検出したL字状の土壤。断面観察を行った箇所で、幅1.5m、深さ0.1mの浅い椀状を呈す。覆土として、②黒褐色粘土層、①黒灰色粘土層の2層が確認された。覆土中より9 C前半の須恵器杯身が出土している。

土壤 (S K 10)

S B10の西方で検出した隅丸長方形の土壤。長軸2.4m、短軸1.0mを計る。深さは0.1mで、断面は浅い皿状。黒灰褐色粘土と黒灰色粘土と地山のブロック状混入からなる単純層で埋没する。

土壤 (S K 11)

S K10に切られる隅丸長方形の土壤。現存する長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.1m、断面は底部が一定しないが皿状を示す。壙内は黒褐色粘土の単純層で覆われる。

土壤 (S K 12)

S B10を構成する1柱穴を切って掘開された土壤。長軸1.8m、短軸1.1mの隅丸長方形を呈す。深さ0.3m、断面は浅い椀状。②黒灰色粘土層、①暗灰褐色粘土層が層を重ねている。

土壤 (S K 13)

S K12と同様、S B10を構成する1柱穴を切って掘開された土壤。一辺0.7m余の隅丸長方形である。深さ0.3m、断面はU字状。壙内は①黒褐色粘土の単純層で埋まる。層中には炭化物片の混入が認められる。

土壤 (S K 14)

S B11の南に位置する三日月形の土壤。断面観察の位置で幅0.6m、深さ0.3mのU字状を呈す。壙内は、③黒褐色粘土層、②黒灰褐色粘土層、①暗灰褐色粘土層が順次層を重ねて埋没する。

土壤（S K15）

S B11の下に重複して存在する大型の円形土壤。土壤の径は2.8m、深さ0.3mの浅い楕状を示す。境内は4層の覆土が確認される。④淡黒灰褐色粘土層、③黒灰褐色粘土層、②黒褐色粘土層、①暗灰褐色粘土層である。層中より奈良時代中葉の須恵器杯蓋などが出土している。

土壤（S K16）

楕（S A02）に重複する小規模な橢円形土壤。長軸1.0m、短軸0.6m、深さ0.2m、断面はU字状である。境内は黒褐色粘土の単純層で埋まる。層中には地山のブロック状混入が認められる。

土壤（S K17）

楕円形の土壤。長軸1.6m、短軸0.8m、深さ0.2m、断面は皿状である。覆土として②黒灰色粘土層、①黒褐色粘土層の2層が存在する。②層中には地山のブロック状混入が著しい。

土壤（S K18）

N 6区北端からN 7区南端にかけて群在する土壤の1つである。S K18は径1.5m、深さ0.7mの円形土壤。断面はU字状を示す。境内は5層が識別され、⑤黒灰色砂泥層、④黒灰色粘土と黒褐色粘土と地山のブロック状混入層、③黒灰色粘土の地山のブロック状混入層、②黒灰褐色粘土層、①黒褐色粘土層で構成される。⑤層は黒色泥土と青灰色砂の混入の結果生まれた土層である。

土壤（S K19）

S K18の北に位置する小型の土壤。隅丸長方形を呈す。長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.6m、断面は深い楕状を示す。⑥青灰黒色砂泥層、⑤黒灰色砂泥層、④黒灰褐色粘土層、③黒灰色粘土層、②黒灰色粘土と地山のブロック状混入層、①黒褐色粘土層の6層が堆積を重ねて埋没する。④層には地山の、③層には炭化物片の混入が若干認められる。

土壤（S K20）

N 6区北端で、約半分をかろうじて確認した土壤。隅丸長方形を呈す。断面観察の位置で、径1.4m、深さ0.7mを計り、断面の形状は比較的深い楕状を示している。覆土として、③黒灰色砂泥層、②黒灰色粘土と地山のブロック状混入層、①黒灰色粘土と黒褐色粘土と地山のブロック状混入層が識別される。

土壤（S K21）

S K20と同様に、N 6区北端で約半分をかろうじて確認し得た土壤である。しかも東側はS D10に切り込まれている。現存幅0.9m、深さ0.2m、断面は浅い楕状を示す。③黒色粘土層、②暗黒褐色粘土層、①黒褐色粘土層が層を重ねて埋没する。③・②両層には炭化物片の混入が著しい。

溝 (S D 09)

N 3 区より流れ来た溝。この溝は当調査区を横切って、本来 N 8 区へ伸びるものだが、N 8 区が遺構面のレベルを下げるため、その姿をほとんどとどめていない。A・B 2ヶ所で断面観察を行ったので、観察結果をみておくことにしよう。溝幅は2.5m前後、深さ0.5m。断面は浅い皿状下に一段深くて狭いU字状の落ち込みが付く。落ち込みはAからBへとしだいに幅を広げる傾向にある。覆土は9層が識別される。⑨黒灰褐色砂質土層、⑧黒灰色砂質土層、⑦黒褐色泥土層、⑥暗黒灰褐色砂礫層、⑤黒灰褐色砂質土層、④黒褐色粘質土層、③暗黒灰褐色砂質土層、②黒灰褐色粘土層、①黒褐色粘土層である。⑤—①層には9C前葉の須恵器杯身など若干の遺物が混入していた。

溝 (S D 22)

S K16の近くで検出した小溝。S K16の横あたりに端を発し、L字に曲折してトレンチ外に伸びる。延長3mにみたないもので、溝というより狭長な土壤であるのかもしれない。溝幅0.8m、深さ0.2m、断面はU字状を呈している。黒灰褐色粘土の単純層で覆われている。

方形周溝状遺構 (S X 03)

調査区南端で検出した方形周溝状遺構。北西コーナーを中心に全体の約4分の1を検出した。この周溝はS B09の柱穴に一部切られている。Aで溝幅0.8m、深さ0.4m、Bで溝幅0.7m、深さ0.3m、断面は椀状ないしU字状を示す。覆土として、⑥黒灰色粘土と地山のブロック状混入層、⑤黒褐色粘土と黒灰褐色粘土と地山のブロック状混入層、④黒色粘土層、③暗灰褐色砂質土層、②黒灰褐色粘土層、①黒褐色粘土層が順次薄くレンズ状に堆積する。

方形周溝状遺構 (S X 04)

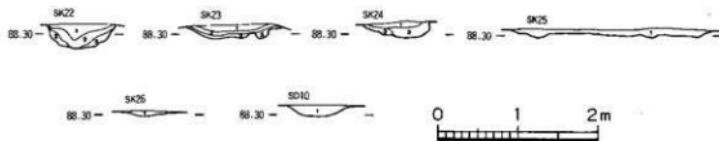
S X 03の西方で、S X 03にはほぼ平行して構築された方形周溝状遺構。北東コーナーを中心に全体の約4分の1を検出した。Aで溝幅0.4m、深さ0.1m、Bで溝幅0.3m、深さ0.2m、断面は椀状。②黒褐色粘土と黒灰褐色粘土と地山のブロック状混入層で覆われる。

N 7 区

N 7 区はN 6 区の北に位置するトレンチである。トレンチ中央は、N 4 区から連続する灰褐色砂礫層の地山であり、遺構は存在しない。他域は灰褐色砂質土の地山を切り込んで、土壤や溝などが検出された。

土壤 (S K 22)

N 7 区南端で検出した土壤。このあたり一帯は、N 6 区北端に連続する土壤群が存在する。S



第13図 N地区・N7トレーンチ邊縁断面図

K22は、円形に近い楕円形を呈す。短軸0.8m、深さ0.3m、断面は楕状を呈している。③黒灰色粘土層、②淡黒灰褐色粘質土層、①暗灰褐色粘質土層の3層で埋没する。各層とも地山のブロック状混入が著しい。

土壤 (SK23)

S K22のすぐ北方で検出した隔丸長方形に似た不定形な土壤。長軸2.8m、短軸1.2m、深さ0.2m、断面は浅い皿状を呈す。覆土として、③黒灰色粘質土層、②黒褐色粘土層、①黒色粘土層の3層が確認される。②・①両層には炭化物片の層状介入がある。

土壤 (SK24)

調査区南東端で検出した小型の楕円形土壤。長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.2m、断面は皿状を呈す。③暗灰褐色粘質土層、②黒灰色粘質土層、①黒灰褐色粘質土層の3層によって埋没する。②層には炭化物片の混入が著しい。

土壤 (SK25)

S K24の北方で検出した隔丸長方形状の不定形土壤。長軸2.5m、短軸最大1.4m、深さ0.1m、断面は浅い皿状を呈す。①黒灰褐色粘質土層の単純層によって覆われる。

土壤 (SK26)

調査区中央付近で検出した楕円形土壤。長軸1.4m、短軸0.7m、深さ0.1m、断面は浅い皿状を示す。①黒灰褐色粘質土層の単純層で覆われる。

溝 (SD10)

N 3区よりN 6区を経て当区へ正南北に近い直線的な流路を保つ溝である。当区へ入って4m余で途切れる。溝幅0.8m、深さ0.2m、断面は皿状。①黒灰褐色粘質土層の単純層によって覆われる。

N 8区

N 8 区は N 地区の西方に設置した長大なトレンチである。中央付近は N 4 区や N 7 区に連なる灰褐色砂礫層の地山が広がっており、遺構は存在しない。その南側は灰褐色粘質土の安定した地山となり、S B12—S B16 の掘立柱建物群が存在する。一方北側は、灰褐色砂質土からなるやや不安定な地山ながら、上塙や溝が群在していた。

掘立柱建物 (S B12)

方位を N—1°—W とほぼ正南北に保つ掘立柱建物。N 6 区にまたがって存在するが、柱穴の遺存状態は不良。桁行 2 ないし 3 間、梁行 2 間の東西棟と思われる。柱穴の掘り方は 0.3—0.4m の円形又は隅丸方形、柱根跡は 0.2m 前後の円形。掘り方に黒灰褐色粘土が充填され、柱根跡には黒褐色粘土が流入する。柱間は桁行不明、梁行 2.1m を計る。

掘立柱建物 (S B13)

方位を N—6°—W に保つ掘立柱建物。桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟が想定される。柱穴の様相は S B12 に同じ。柱筋は比較的良く通り、柱間は桁行・梁行ともに 2.2m。

掘立柱建物 (S B14)

方位を N—45°—W に保つ掘立柱建物。S B15・S B16 とともに 1 群を形成した建物と思われる。桁行 3 間、梁行 2 間、柱穴の様相は基本的にはこれまでに同じだが、掘り方の規模に大小のばらつきがある。柱筋は良く通り、柱間は桁行 2.0m、梁行 1.8m。

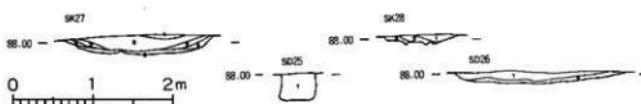
掘立柱建物 (S B15)

方位を N—43°—W に保つ掘立柱建物。桁行 3 間、梁行 2 間を数える。柱穴の様相は従来に同じ。柱筋は良く通っており、柱間は桁行 1.7m、梁行 1.5m。

掘立柱建物 (S B16)

方位を N—43°—W に保つ掘立柱建物。2 柱穴を欠損するが、桁行 3 間、梁行 2 間である。柱穴の様相は従来に同じ。柱筋は通り、柱間は桁行 1.7m、梁行 2.0m を計る。

土塙 (S K 27)



第14図 N地区・N 8 トレンチ遺構断面図

不定形ながら大型の土壤。長軸3.8m、短軸1.9m、深さ0.3m、断面は皿状を呈す。覆土として5層が識別され、⑤黒灰褐色砂礫層、④暗灰褐色砂質土層、③黒灰色粘質土層、②黒灰褐色粘土層、①淡黒灰褐色砂質土層が順次層をなす。②層中には炭化物片の混入が認められる。

土壤 (S K 28)

長軸2.3m、短軸0.9mの楕円形土壤。深さ0.2m、断面は浅い皿状である。③黒褐色粘質土層、②黒色粘土層、①黒灰褐色砂質土層の各層により覆われる。③層には地山のブロック状混入が認められる。

土壤 (S K 29)

小型の楕円形土壤である。長軸1.1m、短軸0.7m、深さ0.2m、断面は浅い皿状を呈す。黒褐色粘土の単純層で覆われる。

土壤 (S K 30)

辺1.2mの隅丸方形プランの土壤。深さ0.2m、断面は皿状を呈す。黒灰褐色砂礫層の単純層で覆われる。

溝 (S D 24)

調査区東方より西へ向かってわずかに蛇行しながら流れる細い溝。S K27に接するとともに消失する。溝幅0.3mを計り、赤褐色砂層で覆われた浅いもの。溝に沿って杭列が若干確認される。

溝 (S D 25)

S D 24の北方に端を発し、北へ向かう小溝。溝幅0.4m、深さ0.3m、断面はU字状を呈す。淡黒灰色粘土と黒褐色粘土と地山のブロック状混入層によって覆われている。

溝 (S D 26)

調査区北端で検出した弧状の溝。南方はあたかも溜りのごとく広がるが、北へ向かって2条の細い流れに分岐している。溜りの箇所で断面観察を行なったところ、幅2.1m、深さ0.2mの浅い皿状であることが判明し、②黒灰褐色砂礫層、①黒褐色粘土層の2層の堆積土が識別された。

O 地 区

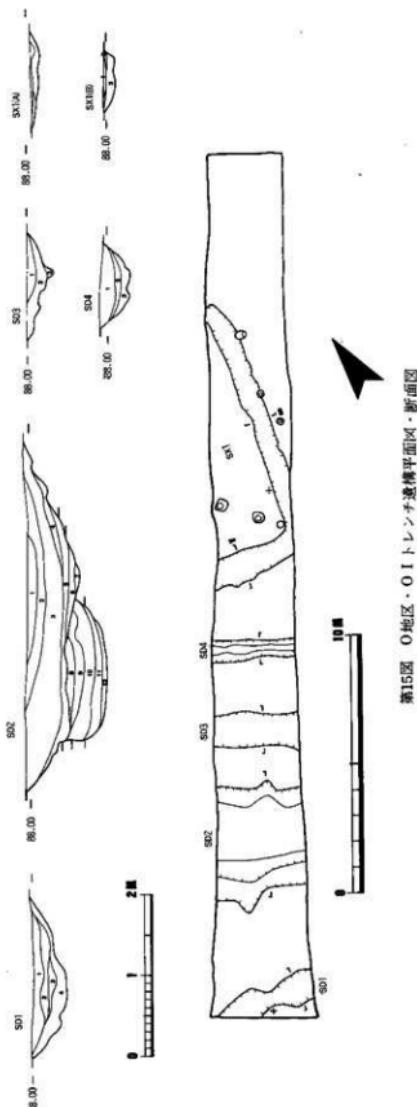
O地区は、N地区的北西に位置する。支線排水路の策定に伴い、試掘トレンチを配して遺構の存否を確認した。試掘トレンチは南西より北東へO1-O4の4ヶ所に設定した。その結果、O2-O4の各トレンチに遺構は認められず、O1で溝や方形周溝状遺構を検出した。

O1区

O1区は、O地区の南西端に位置する。O地区は北東より南西にむかって漸次比高を減じており、当区は最も低い地所にある。試掘トレンチを設けた結果、遺構が姿をみせたため、その広がりに応じてトレンチを拡張したところ、溝4条と方形周溝状遺構1基が検出された。いずれも、耕土と床土直下の地山である灰褐色粘質土層上に切り込まれる。以下に、検出した各遺構の概要を記すことにしよう。

溝 (S D 1)

トレンチの南西端で検出した溝である。流路を東から西に刻む。溝幅は広くなったり狭くなったりで必ずしも一定していないが、断面観察を実施した箇所で2.0m、深さは0.4mを計る。典型的な椀状の溝である。覆土として、④暗黒褐色粘土層、③黄褐色砂質土層、②黒灰褐色粘土層、①黒褐色粘土層の4層が識別される。



第15図 O地区・O1トレンチ遺構平面図・断面図

③層には酸化鉄の沈着が著しい。

溝（S D 2）

S D 2は、南東から北西へ流れを刻む本來は2条の溝。幅広く浅い皿状の溝の下に、深いU字状の溝が存在する。後者が埋没後、前者が再掘開された。前者をA溝、後者をB溝と仮称する。A溝は溝幅4.3m、深さ0.8mで、灰褐色粘質土層の地山より切り込まれ、淡黒灰色粘土層を経て暗黒灰色粘土層中に底部を置く。覆土として7層が識別される。⑦黒灰褐色砂質土層、⑥淡黒灰色粘土層、⑤暗灰褐色砂質土層、④黒灰色粘土層、③黒灰褐色粘土層、②黒褐色粘土層、①暗黒褐色粘土層が層を重ねている。③層中央では砂粒の混入が多くなるようであり、この層レベルでもいまだ流れが存在したことと物語っている。

B溝は、現存幅0.9m、深さ1.0mを計る。底部を青灰色グライ粘土層中に置く。⑫黒灰褐色砂質土層、⑪黒褐色粘土層、⑩淡黒褐色粘土層、⑨暗黒灰色粘土層、⑧暗灰褐色砂質土層の各層によって覆われる。A溝の③層とB溝の⑫層中より古墳時代前期頃の土器細片が若干出土している。

溝（S D 4）

S D 2に同じく南東から北西へ流路を刻む溝。溝幅1.3m、深さ0.3m、断面は浅い皿状を呈す。③黒灰色砂質土層、②黒灰褐色粘土層、①黒褐色粘土層により埋没する。時期不明。

溝（S D 3）

S D 2・S D 3に平行する溝。溝幅は1.0mと狭いが、深さは0.4m、断面は椀状。覆土として③黒褐色粘土層、②黒灰褐色砂質土層、①黒灰色粘土層が識別され、③層中より古墳時代前期の土器細片などが出土している。

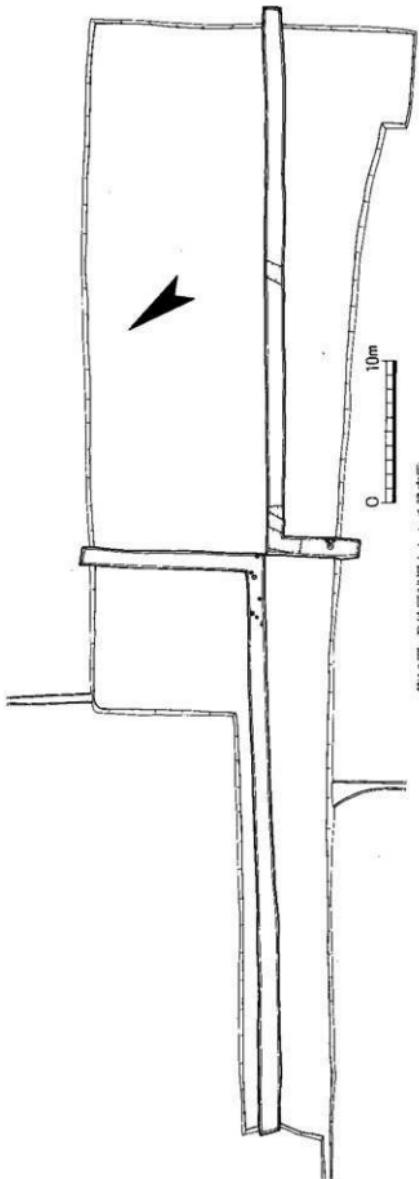
方形周溝状遺構（S X 1）

東溝及び南溝の一部を検出した方形周溝状の遺構。東溝は一辺9.5mを計る。主体部や他の周溝はトレンチ西方に広がっており未確認。遺構の遺存状態は不良であり、盛土等は削平されて残っていない。したがって、主体部も遺存していない可能性が高い。断面観察のため、南溝にA、東溝にBのセクション帯を置いた。Aは溝幅1.2m、深さ0.2mの浅い皿状、Bは溝幅0.8m、深さ0.2mの皿状を呈す。溝内には③黒灰色粘土と地山のブロック状混入層、②黒灰色粘土層、①黒褐色粘土層が堆積する。①層中には炭化物片の混入が著しく、古墳時代前期の土器細片がわずかに出土する。

P 地 区

P地区は、O地区の北方にある畑地である。旧水田レベルよりおよそ40cm高いため、全城が削平の対象となった。そのため、遺構の存否と検出レベルを確認すべく、四分法による狭長なトレンチを入れた。

調査の結果、畑地の地表下およそ50cmに至って、つまり旧水田下10cmの地点で、灰褐色砂質土の地山を切り込む遺構が検出された。遺構は、東から西方向へ走る溝、土壤それに若干のピットなどからなり、畑地の中央に集中する傾向が認められる。一部掘開したところ、遺構の覆土は黒褐色粘質土を基調とする単純層。各遺構ともば場整備の削平下に存在することが明らかとなつたため、それ以上の拡幅調査は実施しなかつた。

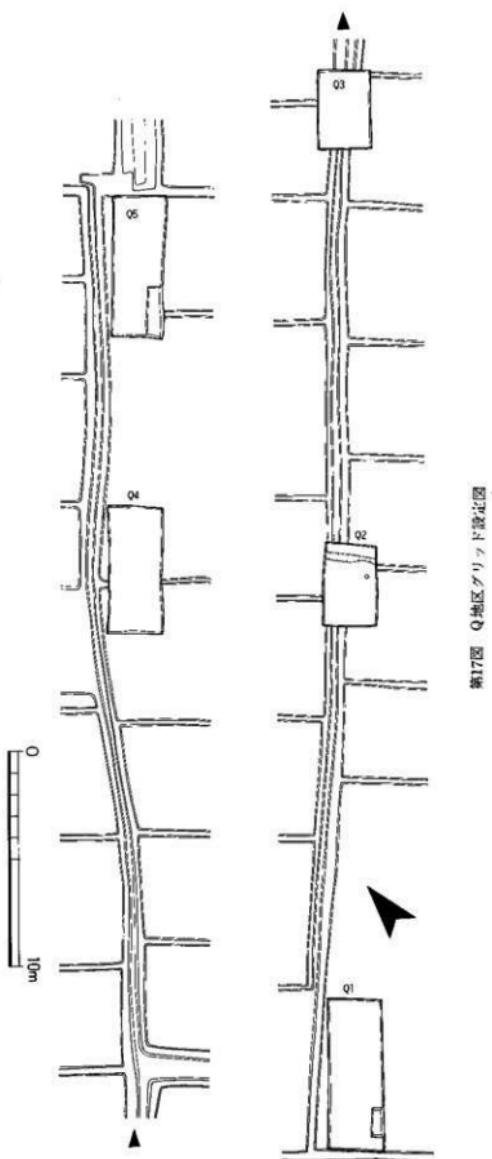


第16図 P地区試掘トレンチ設定図

Q 地 区

Q地区はO地区の北西100mの距離を置いて平行して走る支線排水路予定地に位置する。この地区は、両側に畦、中央に溝をもつ条里制造構の坪界にも相応している。

調査は、支線排水路予定地約200m間にQ1—Q5のグリッドを設定して、遺構の存在を確認した。いずれのグリッドとも、耕土と床土直下に灰褐色砂質土からなる比較的安定した地山が検出され、その地山を追認するかたちで遺構検出につとめた。その結果、Q2グリッドで1条の溝と柱穴を確認した以外に遺構の存在は認められなかった。溝は現行畦畔に平行するもので、南東より北西方向に走る。覆土は柱穴と同じく、黒褐色粘質土の単純層。断面は浅い皿状を呈している。Q1・Q5のグリッドでは、さらに下層遺構の存否を確認するため、深掘り調査を実施したが、地山が漸次グライ化を強めるものの遺構は確認できなかった。



第17図 Q地区グリッド調査図

X 地 区

X地区は、現在の杉江集落の東方に位置する。第10号及び第11号の支線排水路敷設予定路線に沿って、まず試掘グリッドを設定し、遺構の存否を確認した。その結果、第10号については、予定路線のほぼ全域から遺構が検出されたため、約200m間をすべて調査した。これをX1区と称し、第11号関係の遺構未検出グリッドについては、そのままX2-X4区の称を与えた。以下、遺構を検出したX1区について、調査の成果を略記することにしよう。

X1区は、耕土及びその床土直下に灰褐色砂質土からなる比較的安定した地山が広がっており、この地山を切り込んで掘立柱建物を中心に溝や土壌などが検出された。掘立柱建物や溝などのように方位を割り出し得る遺構に留意すると、正南北方位ないしそれに近いものと、現行の条里地割つまりN-34°Eに類するものの2様が大きく確認できるようである。そして、両者の切り合ひ関係などから、前者が古く後者が新しいことがわかる。後者については、溝(SD04)の豊富な資料から12C前葉の時期が与えられる。なお、地層確認などのため一部深く掘り下げた結果、これらの遺構を切り込む地山の下に、灰白色砂層次いで灰褐色砂礫層が層を刻んでいるのを知る。両層とも河川の氾濫などに起因して形成された不安定な地山であり、両層より切り込む遺構は存在しなかった。

掘立柱建物 (SB01)

方位をN-28°Eと現行条里地割に近い値を示す縦柱の掘立柱建物である。南東側はトレント外に伸びるため不明。現状で桁行1間以上、梁行2間を数える。柱穴の掘り方は一辺が0.3-0.4m程度の隅丸方形、柱根跡は径0.2m前後の円形。掘り方には黒灰褐色粘土が充填され、柱根跡には黒褐色粘土が流入する。掘り方には地山のブロック状混入が認められ、柱根跡には一部砂質土の流入もある。以上のような柱穴をA類と仮称しておこう。柱筋は比較的良好通り、柱間は桁行2.0m、梁行1.8mを計る。なお、各柱穴に隣接して他に柱穴が多数認められる。柱の据え替えないし建て替えが行なわれたことを示すのであろうか。

掘立柱建物 (SB02)

方位をN-36°Eに保つ縦柱の建物。現状で桁行・梁行ともに2間を数える。柱穴の様相は前述のA類。柱筋は良好通り、柱間は桁行2.1m、梁行1.9mを計る。

掘立柱建物 (SB03)

方位をN-34°Eに保つ縦柱の建物。現状で桁行3間、梁行1間以上を数える。柱穴の様相はA類。柱筋は一例を除いて良好通り、柱間は桁行1.8m、梁行2.0m程度。

掘立柱建物 (SB04)

方位をN-41°-Eとやや振幅のきつい総柱の建物。現状で桁行3間、梁行2間。柱穴の様相はA類。柱筋は良く通り、柱間も桁行1.4m、梁行1.7mと安定している。

掘立柱建物（S B05）

方位をN-35°-Eに保つ建物。トレンチの側邊で検出したため桁行は3間だが梁行は不明。柱穴はA類。桁行の柱筋は良く通っており、柱穴も規模がそろっている。桁行の柱間は1.4m、を計る。

掘立柱建物（S B06）

方位をN-39°-Eに保つ建物。桁行は3間だが梁行は不明。柱穴はA類。桁行の柱筋は良く通る。柱間は1.6-1.7m。

掘立柱建物（S B07）

方位をN-30°-Eに保つ総柱の建物。桁行2間、梁行1間以上。柱穴はA類。柱筋は良く通るが、柱間は桁行4.0m、梁行2.5mと間延びしている。

掘立柱建物（S B08）

方位をN-28°-Wに保つ建物。現状で桁行1間以上、梁行2間を数える。柱穴の掘り方や柱根跡の規模はA類と大差ないが、掘り方に黒褐色粘土が充填され、柱根跡には暗黒褐色粘土が流入する。全体に土の色調はA類より暗い。これをB類と仮称する。柱筋はおよそ通っており、柱間は現存の桁行2.0m、梁行1.6mを計る。

掘立柱建物（S B09）

方位をN-8°-Wに保つ総柱の建物。現状で桁行4間、梁行2間を数える。柱穴はB類。柱筋はおよそ通っており、柱間は桁行2.0m、梁行1.3mを計る。

掘立柱建物（S B10）

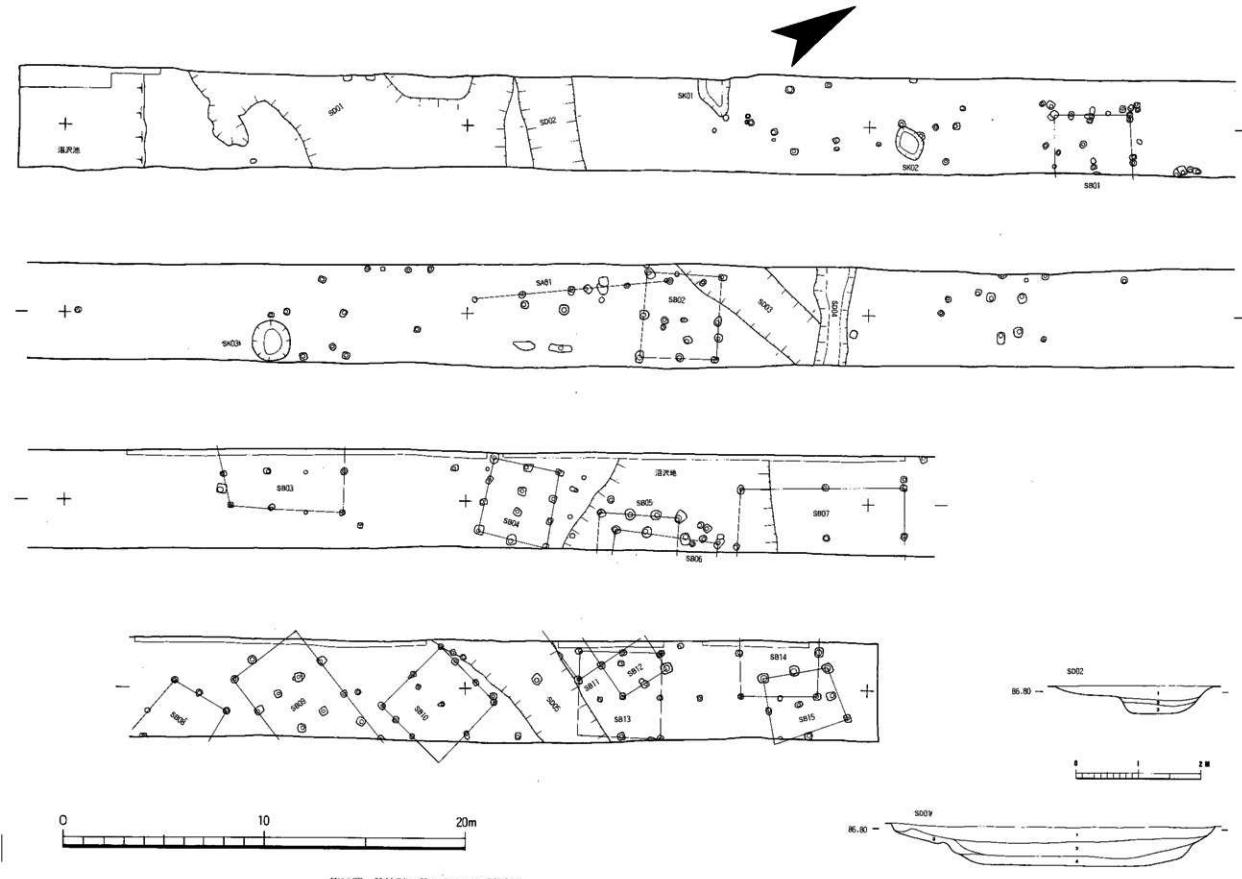
方位をN-13°-Wに保つ総柱の建物。桁行3間、梁行2間。柱穴はB類。柱筋は良く通り、柱間は桁行0.9-1.5m、梁行2.0程度。

掘立柱建物（S B11）

方位をN-3°-Eのほぼ正南北に保つ建物。大半がトレンチ外に伸びるため規模は不明。柱穴はB類。柱間は1.3mと1.6m。

掘立柱建物（S B12）

方位をN-4°-Eに保つ建物。桁行1間以上、梁行2間。柱穴はB類。柱筋は良く通り、柱間



第18図 X地区・X1トレンチ平面図

は桁行1.9m、梁行1.3m。

掘立柱建物（S B13）

方位をN-32°-Eに保つ総柱の建物。現状で桁行・梁行ともに2間を数える。柱穴はA類。柱筋は良く通り、柱間は桁行2.0m、梁行1.9m。

掘立柱建物（S B14）

方位をN-31°-Eに保つ建物。桁行1間以上、梁行2間を数える。柱穴はA類。柱筋は比較的良く通り、柱間は桁行2.2m、梁行1.8mを計る。

掘立柱建物（S B15）

方位をおよそN-22°-Eに保つ総柱の建物。現状で桁行・梁行ともに2間を数える。柱穴はA類。柱筋は不ぞろいだが、各柱穴はしっかりしている。柱間は桁行・梁行ともに1.6m程度。

柵（S A01）

方位をN-25°-Eに保つ柵状造構。5柱穴を確認する。柱穴は小規模で、覆土はA類。柱間は2.0-2.7m。

土壤（S K01）

梢円形を呈す土壤。過半はトレンチ外に伸びる。短軸1.7m、断面は浅い皿状。黒灰褐色粘質土の単純層で覆われる。

土壤（S K02）

ややくずれた隅丸方形の土壤。一辺およそ1.4m。断面は皿状を呈し、黒灰褐色粘質土の単純層で覆われる。

土壤（S K03）

径2.0mの円形の土壤。断面は椭状を呈す。覆土として2層が識別され、下部に黒灰色泥土、上部に黒灰褐色粘質土が堆積する。上部は厚く、一部に円礫の混入が認められる。

溝状造構（S D01）

不定形に蛇行する溝状造構。断面観察を行った箇所で幅5.2mを計り、深さ0.6mの皿状を呈す。
④淡黒灰色泥土層、③暗灰褐色砂質土層、②黒褐色泥土層、①黒灰褐色粘質土層の4層が確認される。④層はリン分を含み、焼けた木片などが混入している。

溝（S D02）

およそ現行条里の地割に沿って走る溝。溝幅2.5m、深さ0.5m、断面は椀状を呈す。南側には一段高くなったテラス部が存在する。③黒褐色粘土層、②黄褐色粘質土層、①黒灰褐色粘質土層の各土層で覆われる。

溝（S D03）

東西方向に走る溝である。次のS D04に切られている。溝幅2.3m、深さ0.2mの広く浅い皿状を呈す。黒褐色粘質土の単純層で覆われる。

溝（S D04）

現行条里の地割に沿って走る溝。溝幅1.9m、深さ0.4m、断面は椀状を呈す。②青灰褐色粘土層、①黒灰褐色粘土層の両層によって埋没する。両層中より12C前葉を主体とする黑色土器・瓦器・土師器皿類などが多く出土した。

溝（S D05）

東西方向に流れる溝。溝幅3.0m前後、深さ0.2m余、断面は浅い皿状を呈す。覆土は鉄分の沈着が著しく、赤褐色粘質土の単純層によって覆われている。

III 出 土 遺 物

今回の調査で出土したのは、須恵器、土師器、施釉陶器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁などの上器類のほか、土錘の出土があった。およそ、7世紀後半から12世紀前半と長期にわたるもので、コンテナに120箱に達する。

ただ出土傾向としては、G区で7世紀後半の、L区、M区、N区で8世紀中葉から9世紀前半代の、X区で12世紀前半代の遺物が集中しており、注目される。したがって、ここでは、7世紀後半代から9世紀前半代の遺物と12世紀前半代の遺物に分けて説明しておきたい。

(1) I期の土器

a 須恵器

須恵器には、环蓋、环身、壺、鉢、瓶などがある。

环蓋 宝珠つまみをもたないものをA、もつものをBとし、Bについては、さらにB-1からB-4の4つに細分した。

A-1 (10) 全体的に丸味を呈し、口縁部は屈曲して下垂し、端部は丸くおさめる。

B-1 (1) 天井部にやや扁平な宝珠つまみがつき、口縁部内面にかえりをもつ。

B-2 (26~29, 50, 90) 天井部に扁平な宝珠つまみがつき、口縁端部は下方へ短かく屈曲し、先端はにぶい棱をなす。

B-3 (21~25, 49, 51, 55, 58) 同じく扁平なつまみをもち、天井部と口縁部の境界は段をなし、端部は下方へ短かく屈曲する。

B-4 (15, 67, 71, 77~79) さらに扁平なつまみをもち、天井部と口縁部の境界がなくなり、端部は、下方に少し屈曲するものと、そのままでおさめるものがある。

环身 □縁に立ち上がりをもつものをA、平坦な底部をもつものをB、高台をもつものをCとし、それぞれ細部の形態によって細分した。

A-1 (13) 深い体部をもち、立ち上がり部が、比較的長いもの。

A-2 (2, 4, 14, 16) 浅い体部で丸底を呈し、立ち上がり部は短かい。

A-3 (3, 11, 19) 同じく浅い体部であるが、平坦な底部をもち、立ち上がり部が短い。

B-1 (5, 30, 31, 87) 平坦な底部をもち、口縁部は、やや内湾しつつのび、やや外反するもの。

B-2 (17, 76) 平坦な底部をもち、口縁部も直線的に外上方にのびる。

- C-1 (54, 63) 平坦な底部に、あまり高くないが、外方にふんばる高台がつく。
- C-2-a (32, 33, 75, 80) 浅く、径の大きい杯部の、体部直下に、ほぼ垂直の高台がつくもの。
- C-2-b (18, 20, 52, 53, 57, 59, 62, 68, 69, 72, 83, 89) 径の比較的小さい、深い杯部の、体部直下に、垂直ないし、やや外傾する高台のつくもの。
- C-2-c (34~36, 60, 81, 88) 口径が大きく、深い杯部の体部直下に、垂直ないし、やや外傾する高台のつくもの。

短頸壺 (6) 短かく立つ口縁部に、肩の張らない、球形の体部がつく。

長頸壺 (42, 44, 82) 口頸部は細長く、外湾して外上方にのび、端部は外反してのち上方に屈曲させる。底部には体部直下に、外にふんばる高台をつける。

直口壺 (65) 口頸部は垂直に立ちあがり口縁端部は、大きく外反し、上下に拡張している。

平瓶 丸底を呈するものをA、平端な底をもつものをBとした。

A (73) 口頸部は、漏斗状を呈し、体部は全体に丸味をもち、底部も丸底気味である。

A (95) 口頸部、把手を欠失するが、体部は、逆台形状を呈し、底部も平坦である。

鉢 大型のものをA、小型のものをBとした。

A (41) 体部はやや内湾し、口縁部で屈曲して、上方にのびる。

B (40) 体部は直線的に外上方にのびて、肩部で内湾した後、口縁部は外反気味に立ち上がる。

中型壺 口縁部の形態によって、A、B、Cの三種に細分した。

A (45) 頸部は短かく、口縁部は大きく内湾し、端部は短かく外反する。

B (47, 84) 口縁部が大きく外湾して端部と内側に肥厚させる。

C (74) 口縁部は弓なりに大きく外湾して、そのままおさめる。

直口壺 口縁部がほぼ直立するものをA、やや外傾するものをBとした。

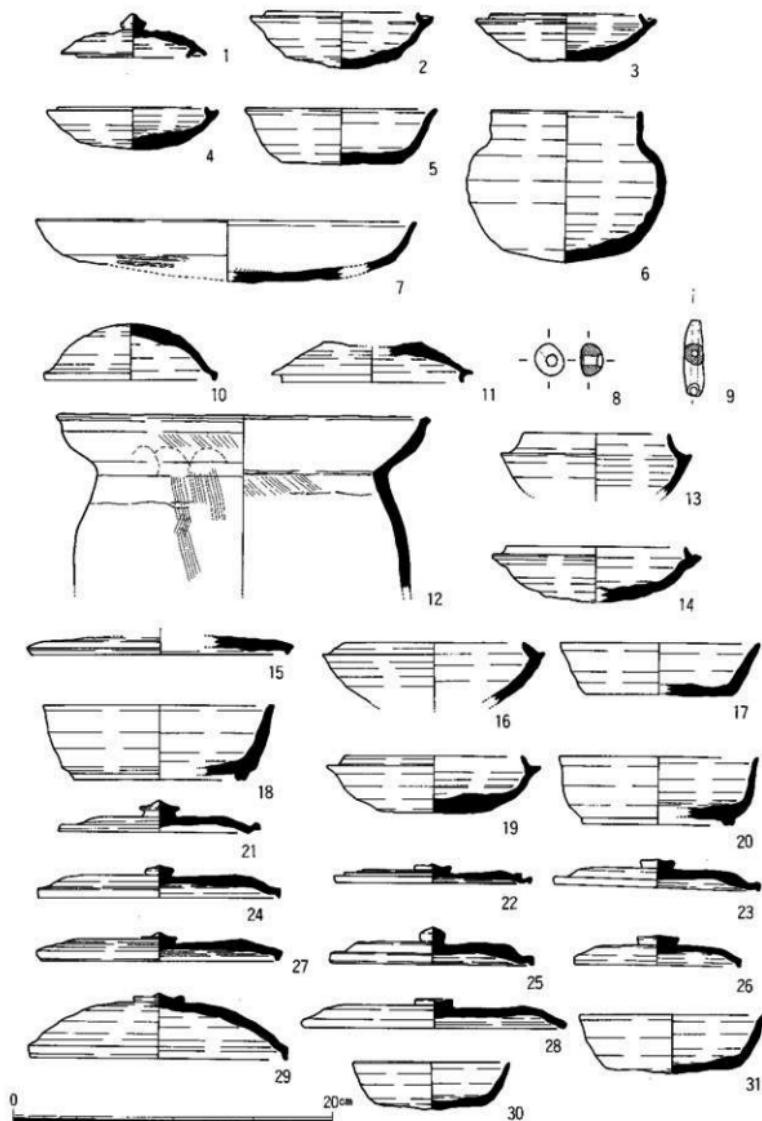
A (43) 口縁部が、やや外傾しつつもほぼ直立するもの。

B (46) Aに較べて、やや外傾が強く全体に厚い器壁をもつ。

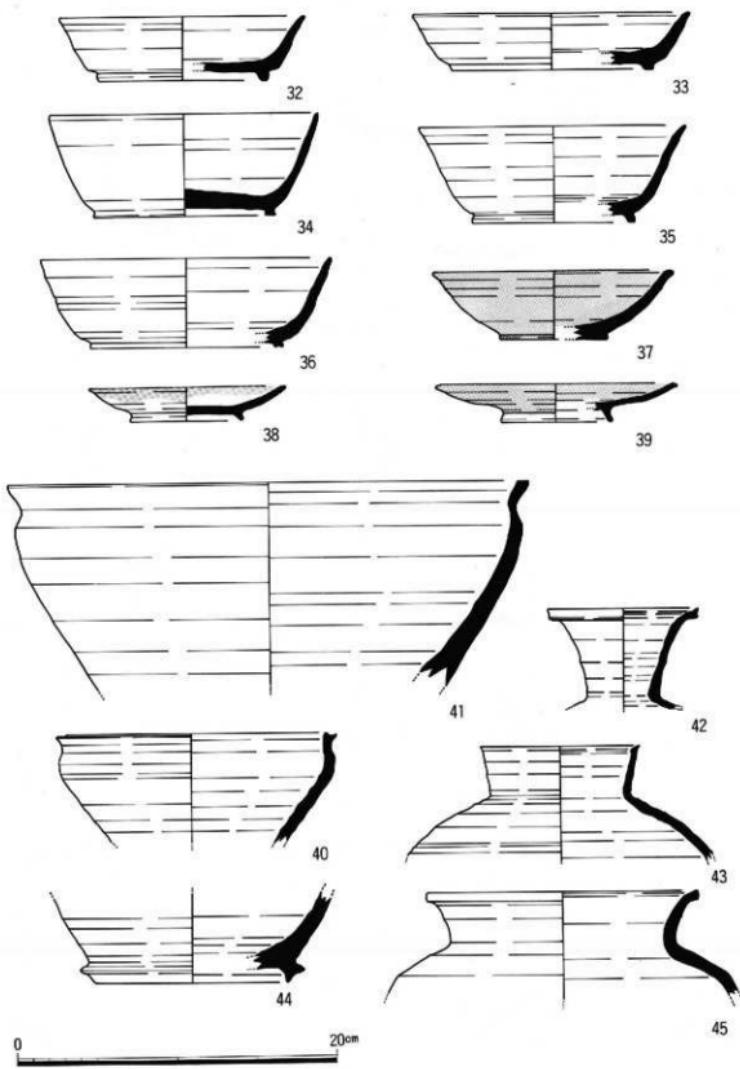
大型壺 頸部の長いものをA、短かいものをBとした。いずれも口径20cm以上の大型品である。

A (66) 頸部がやや長く、口縁部が大きく外湾し、端部を上下に拡張している。

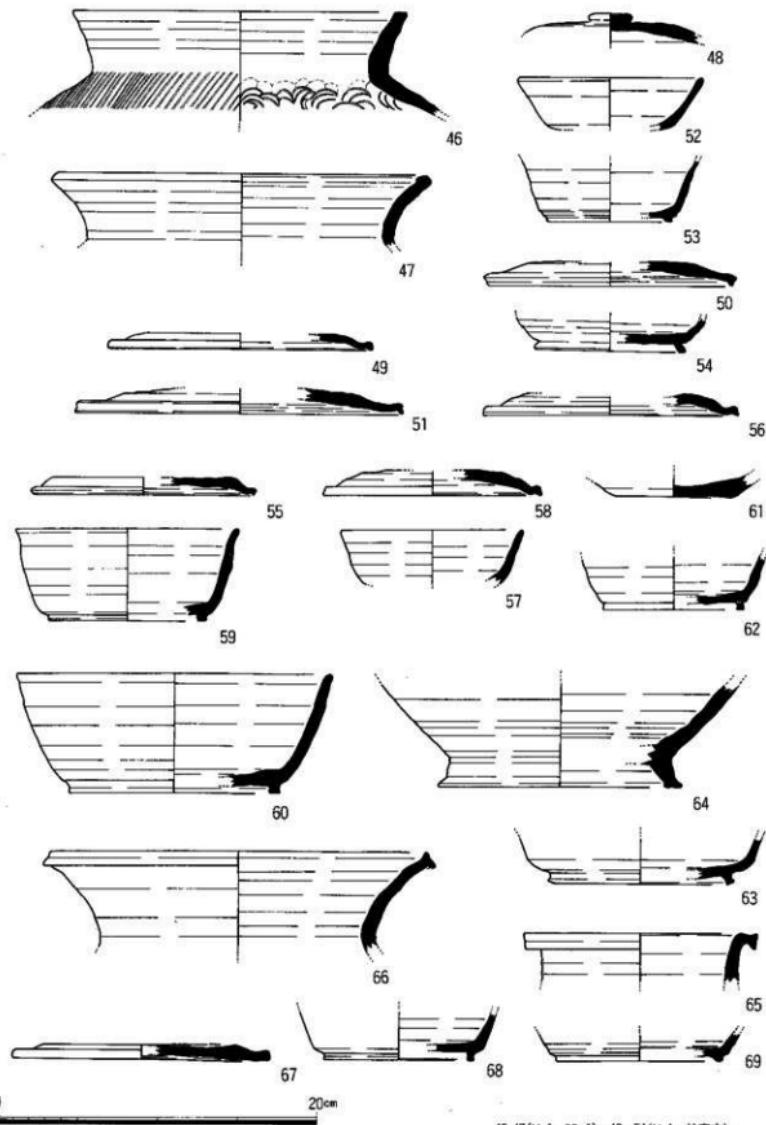
B (70) 頸部は短かく、口縁部は外湾して、端部は短かく内反する。



第19図 出土遺物実測図
 1~9(G-II, SD-1), 10~12(G-11, SD-4),
 13~14(L-1, SD-1), 15(L-1, SD-2), 16(L-1, P-1),
 17~18(L-1, 連構圖), 19(L-2, SD-3), 20(L-2, P-2),
 21~31(M-1, SD-1)

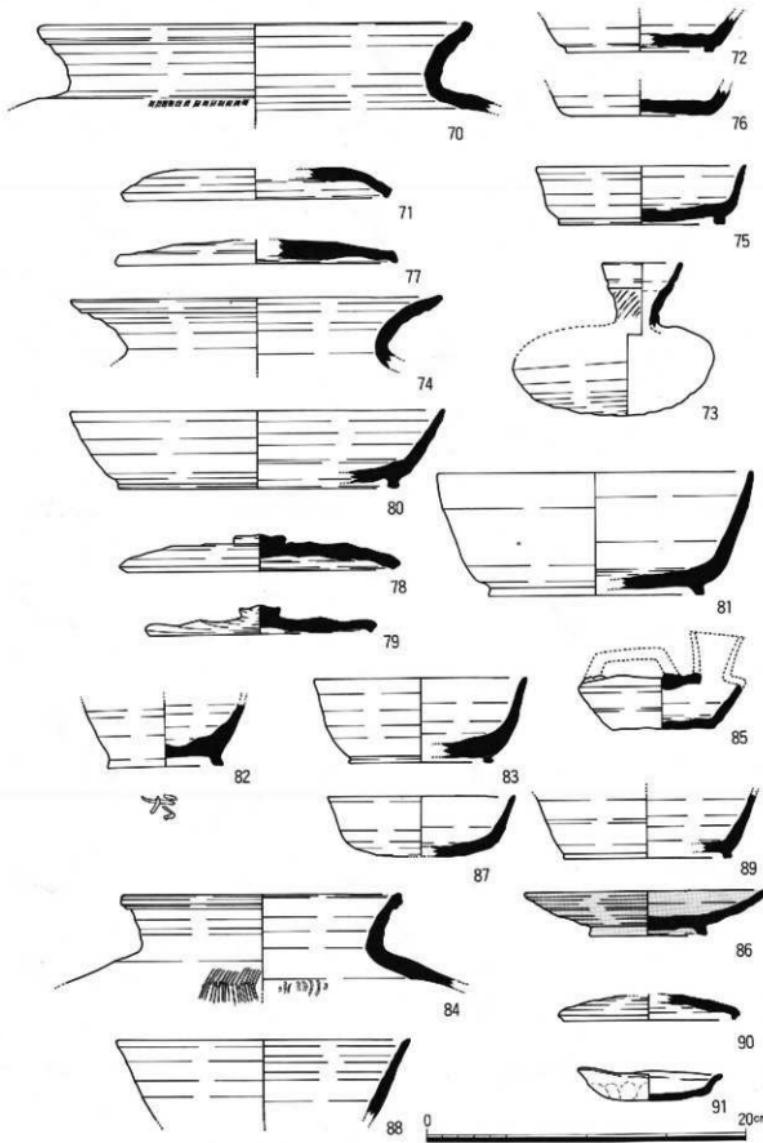


第20図 出土遺物実測図 32~45(M-1、SD-1)



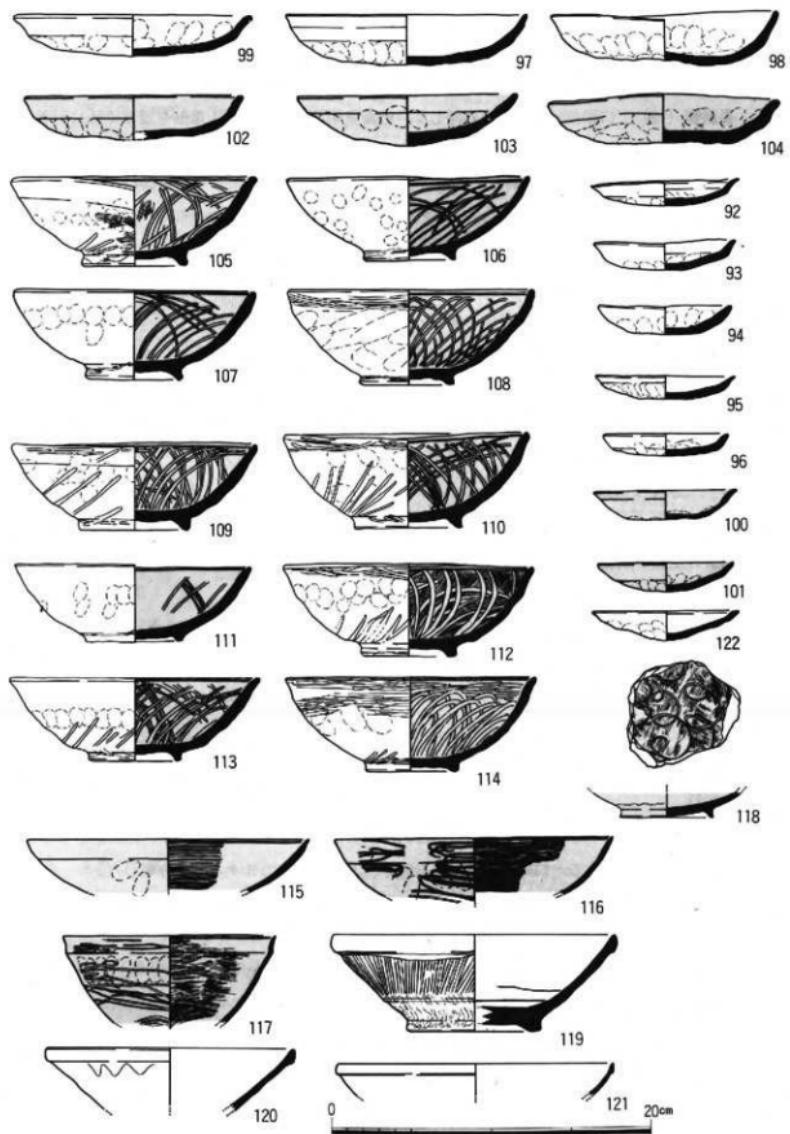
第21図 出土遺物実測図

46-47(M-1, SD-1), 48-54(M-1, 柱穴内),
55(M-1, 道標面), 56(M-2, SD-2),
57(M-2, SD-6), 58~60(M-2, 柱穴内),
61(N-2, SD-3), 62~64(N-2, SD-4),
65-66(N-2, SD-5), 67~69(N-2, SD-6)



第22図 出土遺物実測図

70(N-2, SD-6)、71～74(N-2, SD-3),
75(N-2, SK-1)、76(N-2, SX-1),
77(N-3, SD-13)、78(N-3, SK-4),
79(N-3, SK-9)、80(N-3, SX-2),
81(N-3, P-1)、82(N-3, 道構面),
83, 84(N-4, SD-16)、85(N-4, SD-15),
86(N-4, P-2)、87(N-5, SD-19),
88(N-6, SD-9)、89(N-6, SK-9),
90(N-6, SK-15)、91(X-1, SD-4)



第23図 出土遺物実測図 92~121(X-1、SD-4)

b 土師器

土師器で図示したのは、大皿と長胴甕各1点のみであった。

大皿（7） ほぼ平坦な底部で、口縁部は内湾してのび、端部が短かく外反する。

長胴甕（12） 口縁部は、大きく外傾して、内湾気味に立ち上がり、端部を短かく外に引き出す。

c 施釉陶器

施釉陶器で取り上げるものは、綠釉楕、皿各1点、灰釉皿2点の計4点である。

綠釉楕（37） やや浅い楕で、体部はゆるやかに内湾して外上方にのび、端部を短かく外反させる。高台部分まで、濃緑色の釉をかける。

綠釉皿（39） 体部は中央で棱線を有して屈曲し、直線的に口縁部にのび、高台は高く、外側にふんばる。薄淡緑色釉をかける。

灰釉皿（38、86） 38がやや小型であるが、いずれも体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾してのびる。底部は短かく、外側にふんばる。

d 土製品

土師質の土錠2点が出土している。形態によって2タイプに細分される。

A（8） 扁球状を呈するもの。

B（9） 円柱状を呈するもの。

いずれも、奈良時代に通有なものである。

(2) II期の土器

a 土師器

土師器には、大皿と小皿があり、前者は口径14.3cm前後、後者は口径8.8cmで、粘土板を手づくねで成形したものである。口縁部と底部の形態で、A、B、Cの3タイプに分類した。

大皿A（79、98） 平坦な底部をもち、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。

大皿B（99） 形態はAとほぼ同様で、口縁端部が外反しているもの。

小皿B（91、93、95） 形態は大皿Bに対応するもの。

小皿C（122） 口縁部はAに準ずるが底部中央が突出するもの。

b 黒色土器

黒色土器には、皿と楕があり、皿については、土師皿と同じく大皿、小皿があり、形態により、A、B、Cに細分されるが、Aタイプはなかった。楕については、すべて黒色土器B類で、口縁

部の形態により、A、Bの二種に細分した。

大皿B (102, 104) 土師器大皿Bに対応、内外面黒色処理。

大皿C (103) 形態は土師小皿Cに対応する。

小皿B (100) 土師小皿Bに対応するもの。

小皿c (122) 土師小皿Cに対応するもの。

椀A (105~110) 口径15.5cm、器高5.9cm前後のやや深い椀で、断面逆台形の高台がつく。

体部から口縁部にゆるやかに内湾し、端部を丸くおさめる。口縁外面に横方行のヘラミガキ、内面にナデの後ラセン状の暗文を施す。

椀B (111~114) 法量・調整等、Aと同様であるが、口縁端部が短かく外反するもの。

c 瓦器

瓦器では椀のみで、内面は丁寧な横方向のヘラミガキ、見込みに連続輪状の暗文を施す。外面には粗略なラセン状の暗文を施すものと施さないものがある。器壁は薄く、胎土は灰白色を呈し、堅緻なものであった。浅い深い2種に分けられる。

椀A (115, 116, 118) 口径17.5cm前後で、推定器高7.0cm前後の浅椀である。

椀B (117) 口径16.6cm、推定器高8.0cmの深椀である。

d 輸入陶磁

玉縁の口縁をもつ白磁椀が3点出土している。灰白色の精良な胎土に、白色釉をかけている。形態により、A、Bの2タイプに分類できる。

白磁椀A (119, 120) 厚手の器壁をもち、比較的大きい玉縁をもつ。

白磁椀B (117) 薄い器壁で、小さな玉縁をもつ。

(3) 出土土器の年代観

a I期の土器

須恵器 おおよそ、5段階が考えられる。

第1段階、陶邑編年で、TK 217、III型式1段階に比定できるもの。

环蓋B-1 环身A-2 A-3 短頸壺

第2段階、陶邑編年で、IV型式1段階、平城宮S D3035(平城宮III)に比定できるもの。

环蓋A-1 环身B-1 C-1

第3段階、陶邑編年で、IV型式2段階、平城宮S K 820(平城宮III)に比定できるもの。

环蓋B-2 环身B-2 直口壺A 中型壺A

第4段階、陶邑編年で、IV-3・4段階、平城宮S K219・S K2113、S K870(平城宮IV・V)に比定できるもの。

环蓋B—3 环身C—2—a 平瓶A、直口壺B、中型壺B

第5段階 平城宮S E 311 B (平城宮Ⅷ)、S D 650に比定できるもの。

环蓋B—4 环身C—2—b C—2—c 鉢 長頸壺 平瓶B

第1段階は、7世紀後半代、第2段階は8世紀前半に比定され、やや断絶があるが、第3段階は、8世紀中葉、第4段階は、8世紀後半、第5段階は、9世紀前半と、ほぼ継続して認められる。

土師器 図示したものが少く、具体的な変遷は明らかにできないが、大皿については、平城宮 S D 1900に類例があり、長胴壺については、近江型の典型的なものであって、8世紀前半代に類例が認められるものである。

施釉陶器 いずれも東海産とみられ、縁釉、灰釉とも、平城宮S D 650 A・Bにみられるもので、須恵器の第5段階に対応するものであった。

I期の土器は、G区、L区、M区、N区から出土したものであるが、G区では、須恵器の第1段階を中心に、一部第2段階を含むのに対し、L、M、N区では、第1段階のものは、全く含まず、調査地点のちがいを示している。L、M、N区についても詳しくみてみると、N区では、その中心は、須恵器の第4・5段階にあって、第2、第3段階に中心をおく、L、M区よりは、ややおくれて盛期を迎えていることが知られる。

b II期の土器

II期の資料は、すべてX—1区のS D—4から出土したものであるが、まず、土師器については、古代末から中世にかけて通有なものであって、年代的細分は、現在のところ不十分であり、一応当面の考察から除外するとして、まず黒色土器をみてみると、さきに野洲町久野部遺跡例について若干検討したところによるなら、C、Dタイプとしたものに類似すると考えられる。前稿においては、A、Bタイプの実年代を平安京六角堂遺跡例との対比から、12世紀前半としていたが、六角堂例に伴出する瓦器について、その後の研究により、寛治5年(1091)の墨書土器を出土した、藤原国明邸のS E 7出土例に後出ないし並行することが明らかとなり、六角堂例に後出ないし並行するとみられるA、Bタイプは、11世紀後半に、従ってC、Dタイプは、12世紀前半に各々実年代を修正する必要が生じたのである。従って、本遺跡例についても、一応12世紀前半代の実年代が想定されるのである。

次に、瓦器については、形態、手法は明らかに大和型に通有なもので、搬入品の可能性が高い。稻垣晋也氏の編年で、F形式、白石太一郎氏の編年でII段階の4形式に該当するとみられ、実年代で12世紀前半と考えられるのである。

さらに白磁碗については、大宰府出土資料による森田勉、横田賢次郎氏の編年で、III形式、IV—I形式に該当するとみられる。これらは、11世紀中葉以降、12世紀代に一般にみられるものである。

以上の検討によって、Ⅱ期の資料は、ほぼ12世紀前半代の一括性をもつものであることが明らかになった。そこで最後に、Ⅱ期の資料の器種構成を考えておきたい。一応実測可能な土器は総数で248点、そのうち黒色土器碗142点、同大皿4点、同小皿1点、土師器大皿20点、同小皿71点で、瓦器碗、輸入白磁碗各5点を数える。したがって、この地域において日常雑器として使用されたのは、黒色土器碗と土師器皿が90%以上を占め、瓦器碗、白磁碗は、数%にすぎず、ほとんど例外的な存在であることが伺える。これは、これまで明らかにされている湖南における一般的な村落のあり方とほぼ一致するものであった。そして、本遺跡のように少数ながら出土する遺跡が、近年、近江においても増加していることは近江と他地域との交流を示すとともに近江における黒色土器の展開が、畿内における瓦器生産の強い影響下にあったことを示すものと言えよう。

(大橋 信介)

出土遺物観察表

単位は推定 cm 参考欄は(無上・焼成・色調)

出土地点	遺物No.	器種分類	法 直	形 態	手 法	備 考
G-11 SD-1	1	須恵器 杯蓋B-1	口径 8.9 器高 2.7	・ゆるやかに内寄しながら下垂し、端部には比較的長いえりを有す。天井部外側中央には、断面ひし形を呈する宝珠様つまみを有す。	・口縁部内外面ナデ、穴井部ケズリ	精良・良好 暗青灰色
SD-1	2 4	須恵器 杯身A-2	口径 9.2 器高 9.4 2.6 3.6	・底部は丸く、全体的に圓正な形を呈す。立ち上がり部は短く内傾し端部は丸く納める。受け部は短く上外方へつまみ出し、端部は丸い。	・口縁部内外面ナデ	精良・良好 青灰色
SD-1	3	須恵器 杯身A-3	口径 9.2 器高 2.9	・平底な底部で、口縁立ち上がり部は短く内傾し、受部は短く端部を丸くおさめている。	・内外面ともナデ調整	精良・良好 暗青灰色
SD-1	5	杯身B-1	口径 11.7 器高 3.5	・平底な底部より、体部はゆるやかに内寄り立上がり、わずかに外反する口縁部を有す。端部は丸く納める。	・口縁部内外面ともナデ 微砂含有	良好・灰色
SD-1	6	須恵器 短頸壺	口径 8.6 器高 12.3 器高 9.5	・ほぼ球形の体部をもち、底部に短く立ち上がる口縁部を有す、端部は丸く納める。	・口縁部内外面ともナデ	精良・良好 淡緑灰色
SD-1	7	土師器 壺	口径23.6	・内寄気味に立ち上がり、端部は丸く納める。	・口縁部内外面ナデ	精良・良好 淡黃灰色
SD-1	8	土錐A	径 1.9	・錐形部を呈し、ほぼ中央に径0.9cm程の円孔を穿つ。	・手づくね	精良・良好 淡茶灰色
SD-1	9	土錐B	径 1.3 長さ 4.8	・円柱形を呈し、ほぼ中央に径0.4cm程の円孔を穿つ。	・手づくね	微砂含有 良好・暗灰色
SD-4	10	須恵器 杯蓋A-1	口径 9.9 器高 3.5	・全体的に丸味を呈し、口縁部はゆるやかに下垂する。端部は丸く納める。	・口縁部内外面ナデ	良好・良好 灰色
SD-4	11	須恵器 杯身A-3	口径 11.7 器高 3.6	・全体的に偏平な形を呈し、立ち上がり部は短く内傾し、端部は丸く納める。受け部は短く上外方へつまみ出し端部は丸い。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好 暗灰色
SD-4	12	土師器 長附縦	口径 22.7	・「」字状口縁を呈す。内寄気味に立ち上がり、端部は外方へつまみ出し丸く納める。	・口縁部内面横ナデ、口縁部外商及び、体部ハケ調整	小砂含有 良好・淡青 白色
L-1 SD-1	13	須恵器 杯身A-1	口径 9.1	・立ち上がり部は比較的長く内傾し端部は丸く納める。受け部は丸く端部は丸い。体部はゆるやかに内寄して深い。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好 灰色
SD-1	14	須恵器 杯身A-2	口径 11.2 器高 3.4	・底部はほぼ平底で偏平な形を呈する。立ち上がり部は短く内傾し、端部は丸い。受け部は短くほぼ水平につまみ出し端部は丸い。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好 暗灰色
SD-2	15	須恵器 杯蓋B-4	東口径15.9	・水平に広がる天井部を呈し、その端部はわずかに凹状の外端面を成す。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好
P-1	16	須恵器 杯身A-2	東口径11.1	・全体的に偏平な形を呈する。立ち上がり部は短く内傾し、端部は丸く納める。受け部は短くほぼ水平につまみ出し端部は丸い。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好
遺構面	17	須恵器 杯身B-2	口径 12.3 器高 3.5	・平底な底部より体部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は丸く納める。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好 暗灰色
遺構面	18	須恵器 杯身C-2	口径 14.2 器高 4.6 - 6	・平底な底部の周縁直下に、断面方形の高台がつく、体部はやや内寄して立ち上がり、端部を丸くおさめる。	・内外面ともナデ調整	精良・良好 暗青灰色

出土地点	遺物No.	器種分類	法 量	形 態	手 法	備 考
L-2	19	須恵器 杯身A-3	口径 11.0 器高 3.6	・底部は平底で偏平な形を呈する。立ち上がり部は埋かく内傾し、端部は段を有す。受け部は短かくほぼ水平につまみ出し端部は丸い。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好 灰白色
SD-3						
P-2	20	須恵器 杯身C-2-b	口径 12.3 器高 4.4	・平担な底部より、体部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は丸く納める、断面四角形の高台を有する。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好 暗灰色
M-1						
SD-1	21	須恵器 杯蓋B-3	口径 10.2 1 15.1 器高 1.0 1 2.3	・水平な天井部はその端で大きく「Z」字状にカーブを描き、端部で下方へ部曲させ段を成す。天井部中央に付された擬宝珠様つまみは偏平で中央がやや突出した形態を呈す。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好 灰白色、22は 自然釉付着
SD-1	26	須恵器 杯蓋B-2	口径 15.8 1 16.3 器高 1.8 1 4.1	・全般的に偏平な形を呈し、かえりは無く端部は丸く納める。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好 灰白色
SD-1	29					
SD-1	30	須恵器 杯身B-1	口径 9.8 1 11.4 器高 2.9 1 3.7	・平担な底部より体部はゆるやかに立ち上がり、口縁端部は内傾する面を成す。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好 30灰白色、 31灰白色
SD-1	32	須恵器 杯身C-2-a	口径 15.1 17.1 器高 4.0 3.5	・平担は底部の周縁直下に、断面四角形の高台を貼り付ける。体部はやや内傾してのびるが、口縁部は外反して端部を丸くおさめる。	・内外面ともナデ調整	精良・良好 暗青灰白色
SD-1	33					
SD-1	34	須恵器 杯身C-2-C	口径 15.1 1 17.9 器高 3.5 1 6.4	・平担な底部より体部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は丸く納める。断面四角形の貼り付け高台を有す。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好 灰白色
SD-1	37	綠細陶器 碗	口径 14.5 器高 5.1	・内窓してのびる体部を有し、端部は外方へつまみ出す。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好 緑色
SD-1	38	灰陶器 綠粗皿	口径 12.1 1 14.3 器高 2.1 1 2.3	・平坦な底部からなだらかに内凹する体部も有し、端部は丸く納める。「ハ」字状に聞く割り出し高台を有す。	・口縁部内外面ともナデ	精良・良好 淡灰白色
SD-1	39					
SD-1	40	須恵器 鉢A	口径 31.8	・口縁部は短かく外反し端部は凹面を成す。	・口縁部内外面ともナデ 調整	良好・良好 暗青灰白色
SD-1	41	須恵器 鉢B	口径 16.2	・口縁部は短かく外反し、端部は平担な面をなす。	・内外面ともナデ調整	精良・良好 淡青灰白色
SD-1	42	須恵器 長頸瓶	口径 9.3	・側部で「く」字状に屈曲し、なだらかに外反する口縁部を有す。端部は上方へつまみ出し外端面を成す。	・口縁部内外面ともナデ	精良・良好 暗青灰白色
SD-1	43	須恵器 直口壺A	口径 9.9	・球形の体部から、短かい筒状の口縁部がやや外傾してつく。	・口縁部内外面ナデ調整	精良・良好 灰白色
SD-1	44	壺底部	底径 12.0	・平底で、断面四角形の高台を「ハ」字状に内嵌して貼り付ける。	・内外面ともナデ調整	精良・良好 灰白色
SD-1	45	須恵器 中型壺	口径 16.8	・口縁部は太い基部から直立気味に外反した後、大きく外寄し、さらに端部は内傾する面を成す。	・口縁部内外面ともナデ	良好・良好 灰白色

出土地点	遺物No.	器種分類	法 直	形 勉	手 法	備 考
S D - 1	4 6	須恵器 直口蓋 B	口径 20.5	・口縁部は断面で圓曲して、やや外輪氣味に短く直立する。	・体部表面カキ日、口縁内外ともナデによる測量	精良、良好 灰青色
S D - 1	4 7	須恵器 中型型	口径 23.0	・口縁部は外寄り、端部を少し内側に肥厚させる。	・内外面ともナデ	精良、良好 灰青色
P - 1	4 8	須恵器		・平らな天井部の中央に偏平な鋳出様拂つまみを有す。	・天井部へラケズリ	精良、良好 灰青色
P - 2	4 9	須恵器	口径 15.3	・偏平な杯蓋で、口縁部端部は圓曲して段をなす。	・内外面ともナデ	精良、良好 灰青色
P - 5	5 1	杯蓋 B - 3				
P - 4	5 0	須恵器 杯蓋 B - 2	東口径 20.5	・全體的に偏平な形を呈し	・口縁部内外面ともナデ	
P - 6	5 4	須恵器 杯身 C - 1	底径 9.3	・平拙な底部の周縁に、外にふんばる台形の高台がつく。	・内外面ともナデ調整	精良、良好 灰青色
P - 4	5 2	須恵器	口径 11.4	・平拙な底部より体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く納める。断面四角形の高台を「ハ」字状に貼り付ける。	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 灰青色
P - 3	5 3	杯身 C - 2 - b	底径 7.9 9.4			
造構面	5 5	須恵器 杯蓋 B - 3	口径 13.4	・水平な犬耳部はその端で大きく「Z」字状にカーブを描き、端部で下方へ屈曲させ段を成す。	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 灰青色
M - 2						
S D - 2	5 6	須恵器 杯身 B - 3	口径 15.9	・水平な天井部はその端で大きく「Z」字状にカーブを描き、端部で下方へ屈曲させる。	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 灰青色
S D - 6	5 7	須恵器 杯身 C - 2 - 6	口径 11.2	・体部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は丸く納める。	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 灰青色
P - 7	5 8	須恵器 杯蓋 B - 3	東口径 13.6	・水平な天井部は、その端で大きく「Z」字状にカーブを描き、端部で下方へ屈曲させ段を成す。	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 灰青色
P - 9	5 9	須恵器	東口径 13.9	・平拙な底部より体部はほぼ直線的に立ち上	・口縁部内外面ともナデ	精良、やや 軟 (59) 良好、灰色
P - 8	6 0	杯身 C - 2 - c	19.4	がり、端部は丸く納める。断面四角形の高台を垂直に貼り付ける。		
			底径 9.6			
			13.1			
			5.7			
			7.4			
N - 2	6 1	須恵器 腹底部	底径 7.2	・平底を呈する。	・内面中央部不定方向のナデ、周辺部回転ナデ、外周部切り未調整	精良、良好 灰青色
S D - 3						
S D - 4	6 3	須恵器 杯身 C - 1	底径 10.3	・平拙な底部より体部はほぼ直線的に立ち上	・内外面ともナデ調整	精良、良好 灰青色
				がり、底部周縁に断面四角形の高台を「ハ」字状に貼り付ける。		
S D - 4	6 2	須恵器 杯身 C - 2 - b	東底径 8.6	・平拙な底部より体部はほぼ直線的に立ち上	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 灰青色
				がる。底部の端に、断面四角形の高台を垂直に貼り付ける。		
S D - 4	6 4	須恵器 腹底部	東底径 15.1	・直線的に上外方へ開く体部を呈し底部端に「ハ」字状に高台を貼り付ける。	・底部を除き、ナデ	精良、良好 灰青色
S D - 5	6 5	須恵器 直口蓋	東口径 14.4	・口縁部は筒状に直立し、口縁は大きく外反し、端部は上・下に被張して面をなす。	・内外面ともナデ調整	精良、良好 灰青色
S D - 5	6 6	須恵器 蓋	東口径 23.3	・ゆるやかに外反する口縁部を有し、端部は被張させて肥厚させ丸く納める。外縁面は浅い凹面を成す。	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 灰青色
S D - 6	6 7	須恵器 杯蓋 B - 4	東口径 15.7	・水平な天井部はその端で「Z」字状にカーブを描き、端部で下方へ屈曲させ段を成す。	・口縁部内外面ナデ、天井部へラケズリ	精良、良好 灰青色
S D - 6	6 8	須恵器 杯身 C - 2 - b	東底径 9.3	・平拙な底部より、体部はほぼ直線的に立ち上	・底部を除き、周縁ナデ	精良、良好 灰青色
	6 9		10.2	がる。底部の端に断面四角形の高台を貼り付ける。	調整	

出土地点	遺物No.	器種分類	法 番	形 勢	手 法	諸 考
S D - 6	7 0	須恵器 大型甕B	口径 26.2	・部との接合部からゆるやかに外反する口 縁部を有し、端部はわざかに上方へつまみ出 す。	・内面口縁部横ナデ、外 面肩部叩き調整	精良、良好 暗青灰色
S D - 3	7 1	須恵器 杯蓋B-4	※口徑16.3	・水平に広がる天井部を呈し、その端部はわ ざかに凹状の外端面を成す。	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 淡青灰色
S D - 3	7 2	須恵器 杯身C-2-b	※底径 9.1	・平担な底部より体部はほぼ直線的に立ち上 がる。断面四角形の高台を貼り付ける。	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 暗青灰色
S D - 3	7 3	須恵器 平底A	口径 4.5 腹径 12.5 器高 9.6	・体部との接合部で組曲し、上方へ開く口 縁部を有し、端部は丸く納める。体部は偏縁 形を成し丸底を呈する。	・外面部及び肩部回 転ナデ。体部及び底部回 転削り。	微妙含有、 良好、暗灰 色
S D - 3	7 4	須恵器 中型甕C	口径 22.9	・頸部で大きく外反する口縁部を有し端部は 尖らせる。	・口縁部内外面ともナデ	精良、強烈 淡青灰色
S K - 1	7 5	須恵器 杯身C-2-a	口径 13.0 詰径 10.2 器高 3.6	・平担な底部より体部はほぼ直線的に立ち上 がり、端部は丸く納める。断面四角形の高台 を貼り付ける。	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 暗青灰色
S X - 1	7 6	須恵器 杯身B-2	※底径 8.2	・平担な底部より、ゆるやかに内萼して立ち 上がる体部を有す。	・底部本調整	良好、良好 灰白色
N - 3	S D - 13	須恵器 杯蓋B-4	※口徑17.4	・水平な天井部を呈し、端部は下方へ組曲さ せ段を成す。	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 暗青灰色
S K - 4	7 8	須恵器	口径 16.8	・水平に広がる天井部を呈し、その端部はわ ざかに凹状の外端面を成す。天井部中央に付 された壓室痕跡つまみは偏平で、中央部がや や突出した形態を呈す。	・口縁部内外面ともナデ	微妙含有、 精良、良好 暗青灰色
S K - 9	7 9	須恵器 杯蓋B-4	13.8 器高 2.3	・平担な底部より体部はほぼ直線的に立ち上 がり、端部は丸く納める。断面四角形の高台 を貼り付ける。	・口縁部内外面ともナデ、 天井部本調整	精良、良好 暗青灰色
S X - 2	8 0	須恵器 杯身C-2-a	※口徑23.4 ※底径17.1	・平担な底部より体部はほぼ直線的に立ち上 がり、端部は丸く納める。断面四角形の高台 を呈す。	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 暗青灰色
P - 1	8 1	須恵器 杯身C-2-c	※口徑19.5 ※底径13.3	・平担な底部より体部はほぼ直線的に立ち上 がり、端部は丸く納める。断面四角形の高台 を貼り付ける。	・口縁部及び体部内外面 共回転ナデ、内面底部ナ デ、外面部削り調整	精良、強烈 暗灰色
遺構Ⅱ	8 2	須恵器 壺底部	※底径 7.2	・平担な底部より体部は直線的に立ち上がる。 断面四角形の高台を「ハ」字形に外接して貼 り付ける。	・内面回転ナデ、外面部 削り削り、墨書き有り。	精良、良好 暗青灰色
N - 4	S D - 16	須恵器 杯身C-2-b	※口徑13.2 ※底径 8.8 器高 5.3	・平担な底部より体部はほぼ直線的に立ち上 がり、端部は丸く納める。断面四角形の高台 を垂直に貼り付ける。	・口縁部内外面ともナデ	精良、強烈 灰色
S D - 16	8 4	須恵器 中型甕B	※口徑17.2	・肩部で組曲してゆるやかに上方へ開く口 縁部を有す。更には上方へ厚壁する。	・口縁部内外面共回転ナ デ、外面部ハケ調整	精良、良好 暗青灰色
S D - 15	8 5	須恵器 平底B	底径 6.4	・平底で台形の底部を呈する。ラッパ状に開 く口縁部と、天井部上面に断面 方型の把手が行くものと思われる。	・外面部削り	精良、良好 暗青灰色
P - 2	8 6	灰釉陶器 裏	口径 15.1 底径 7.2 器高 2.8	・ほぼ平担な底部よりゆるやかに開く体部を 有し、口縁端部は丸く納める。底部の端に断 面四角形の高台を外接に貼り付ける。	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 淡青綠色
N - 5	S D - 19	須恵器 杯身B-1	※口徑11.6 器高 3.8	・ほぼ平担な底部より体部はゆるやかに内萼 して立ち上がり、わざかに外反する口縁部を もつ、端部はつまみ上げる。	・口縁部内外面ともナデ	微妙含有、 良好、灰 色
N - 6	S D - 9	須恵器 杯身C-2-c	※口徑18.2	・上方へ直線的にのびる口縁部を有し、端 部はつまみ上げる。	・口縁部内外面ともナデ	精良、良好 暗青灰色
S K - 9	8 9	須恵器 杯身C-2-b	※底径10.3	・平担な底部よりほぼ直線的に立ち上がる体 部を有す。断面四角形の高台を垂直に貼り付 ける。	・底部を除きナデ調整	精良、良好 灰 色

出土地点	遺物No.	器種分類	法 量	形 態	手 法	備 考	
S K-15	9 0	須恵器 杯蓋B-2	※口径10.8	・全体的に偏平な形を呈す。口縁端部を内方へ屈曲させる。	・口縁部内外面ともナデ	精良・良好 灰色	
X-1 SD-4	9 1 1 9 3 9 5 1 0 0	土師器 小皿B	口径 9.6 9.3 9.5 1 0 0	8.6 7 9.3 1.4 7 1.8	・丸底を呈し、ゆるやかに内寄して立ち上がる。口縁部は短く外反して丸く納める。	・口縁部内外面及び底部 内面横ナデ、底部外面指 圧痕有り。	良好・良好 深褐色 100.黒色土 器
SD-4	9 4 9 6	土師器 小皿A	口径 9.6 器高	7.7 1.4	・ほぼ平らな底部より、ゆるやかに内寄して立ち上がり、口縁端部は丸く納める。	・口縁部内外面共窓調整 後横ナデ、底部外面指 圧痕有り。	良好・良好 淡褐色
SD-4	1 0 1 1 2 2	土師器 小皿C	口径 器高	8.4 1.8	・丸底を呈しゆるやかに内寄して立ち上がる。 ・口縁部はわずかに屈曲して端部は上方へつま み出す。	・手づくね (101. 黒色土器)	良好・良好 深茶褐色
SD-4	9 7 9 8	土師器 大皿4	口径 器高	13.5 7 15.1 2.6 7 3.1	・ほぼ平らな底部よりゆるやかに内寄して立 ち上がり、口縁端部は丸く納める。	・口縁部内外面横ナデ、 底部外面指圧痕有り。	良好・良好 茶褐色
SD-4	9 9 1 0 2 1 0 4	上漆器 大皿B	口径 7 14.7 器高 7 3.2	13.5 2.6 7 3.2	・ほぼ平らな底より、ゆるやかに内寄して 立ち上がり屈曲して外反する。口縁端部はわ ずかに外方へ引き出される。	・口縁部内外面共横ナデ、 底部内外面共指圧痕有り。 (102.104. 黒色土器)	良好・良好 淡茶褐色
SD-4	1 0 3	黒色土器 大皿C	口径	15.2	・底前中央がやや突出し、体部から口縁にかけて、ゆるやかに内寄する。	・手づくね	良好・良好 深茶褐色
SD-4	1 0 5 1 1 1 0	黒色土器 碗A1	口径 7 15.2 底径 7 6.7 器高 7 5.2 7 6.0	14.4 15.2 5.5 6.7 5.2 7 6.0	・体部、口縁部共ゆるやかに内寄し、口縁端 部内面に1条の波線を有し、丸く納める。底 部に、断面台形の高台を内接あるいは歪曲 に貼り付ける。	・体部内面に暗文を施す。 ・体部外側部荒磨き、指圧痕 有り、口縁部内外面共横 ナデ、内面に暗文。	良好・良好 内面及び一 部外側黑色 外側淡褐色
SD-4	1 1 1 1 1 1 4	黒色土器 碗B	口径 7 底径 7 6.7 器高 7 4.8 7 5.9	14.4 15.6 4.8 6.7 4.8 7 5.9	・体部、口縁部共ゆるやかに内寄し、口縁端 部内面に1条の波線を有し、丸く納める。体 部と口縁部との境に波線を有し、わずかに外 反する。底部端に、断面台形の高台を内接し て「ハ」字状に貼り付ける。	・体部内面に暗文を施す。 ・外側体部荒磨き、指圧痕 有り、内面に暗文。	良好・良好 内面及び一 部外側黑色 外側淡褐色
SD-4	1 1 5 1 1 6	瓦器 碗A	※口径17.7 17.4	・ゆるやかに内寄する口縁部を呈する。黒色 土器碗A類に比べると浅い。	・体部内面荒磨き、外側 指圧痕有り、116荒磨き、 暗文(横方向)	良好・良好 褐色	
SD-4	1 1 7	瓦器 碗C	※口径13.3	・体部は直線的に立ち上がり、屈曲して外反 する口縁部を有する。端部は丸く納める。	・内外面共荒磨き、外側 指圧痕有り、横方向の暗 文	良好・良好 黒色	
SD-4	1 1 8	瓦器 底部	底径	5.8	・丸底の端に断面台形の高台を「ハ」字状に 貼り付ける。	・内面底部にラセン状の 暗文を施す。	良好・良好 黒色
SD-4	1 1 9 1 2 0	白磁 碗A	※口径15.5 ※口径17.5 ※底径 7.4	・平坦な底より、ゆるやかに内寄する体部 を有し、口縁端部は外方へ肥厚する。底端端 に断面台形の高台を有する。	・口縁部内外面共横ナデ、 体部外側ハケ調整	精良・精密 淡褐色	

出土地点	遺物No.	器種分類	法 長	形 態	手 法	備 考
S D - 4	1 2 1	白磁 碗B	器高 6.0 ＊口径17.3	・ゆるやかに内湾する体部を有し、口縁部端部は外方へ肥厚する。		精良・良好 淡青白色（ 施釉有り）

図 版



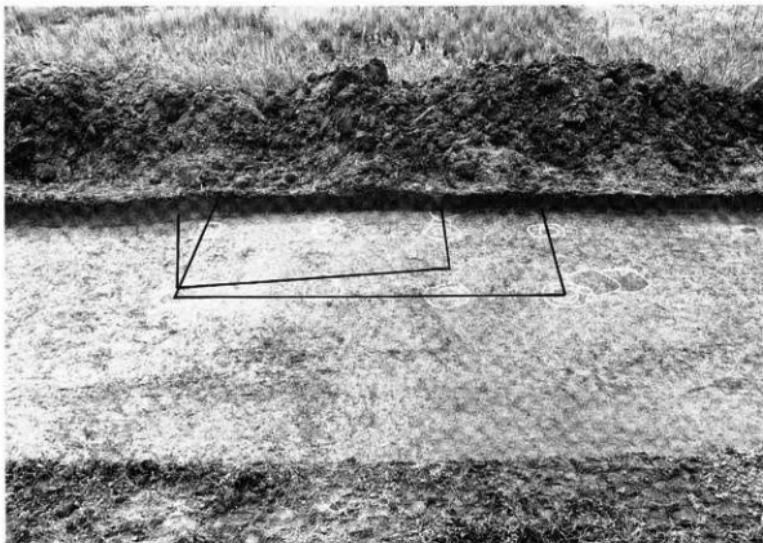
G地区・G01~G06グリッド設定状況



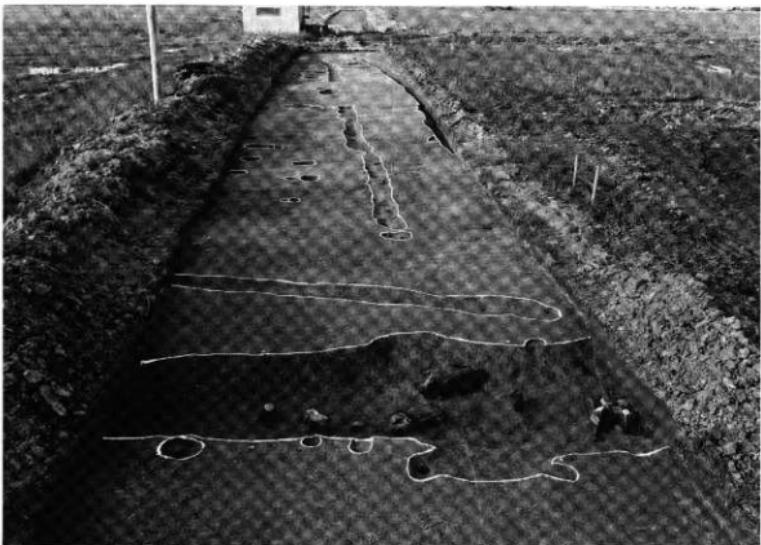
G地区・G11、G12トレンチ設定状況



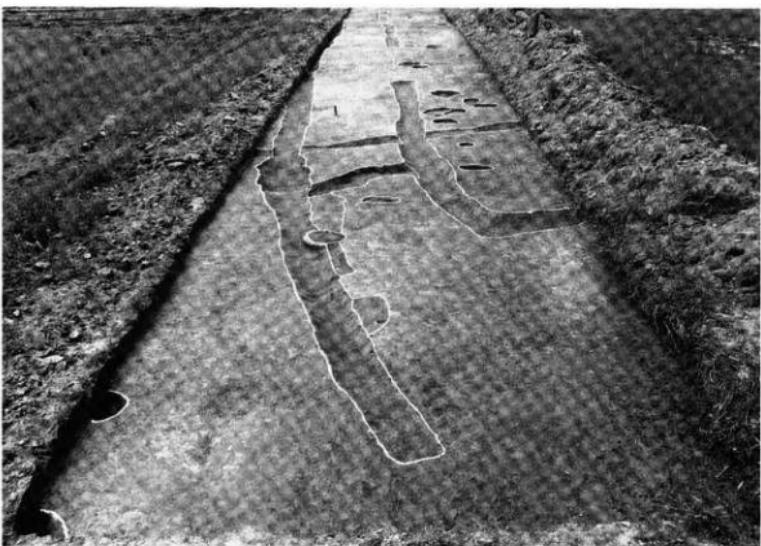
G地区・G11 全景(南西から)



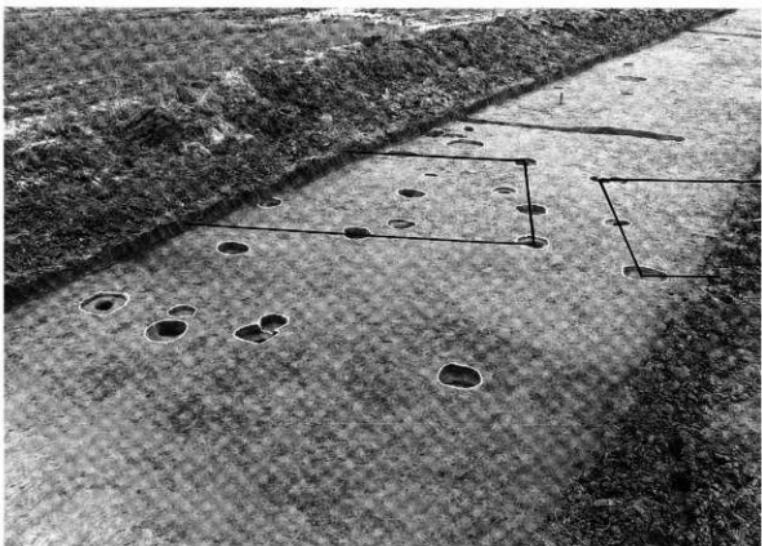
G地区・G11 摂立柱建物(SB02・SB04)



G地区・G11 溝(S D01)から北東を望む



G地区・G11 溝(S D04・S D05・S D06)



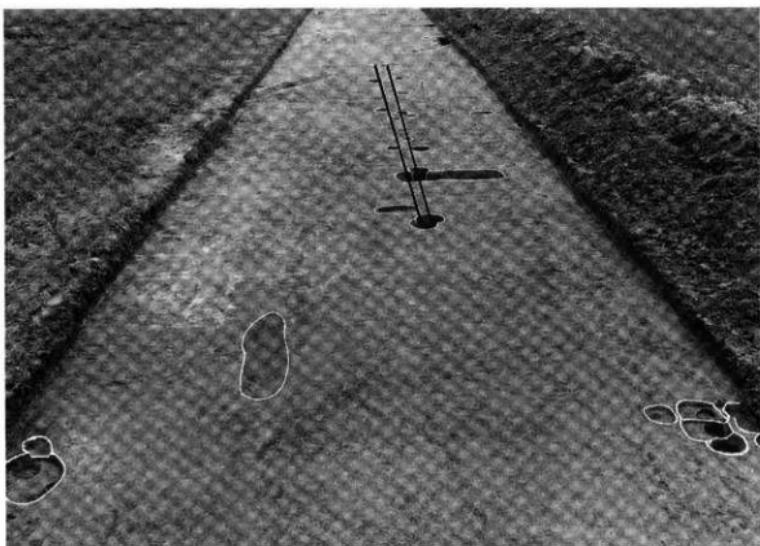
G地区・G12 堀立柱建物(S B07-S B08)から南西を望む



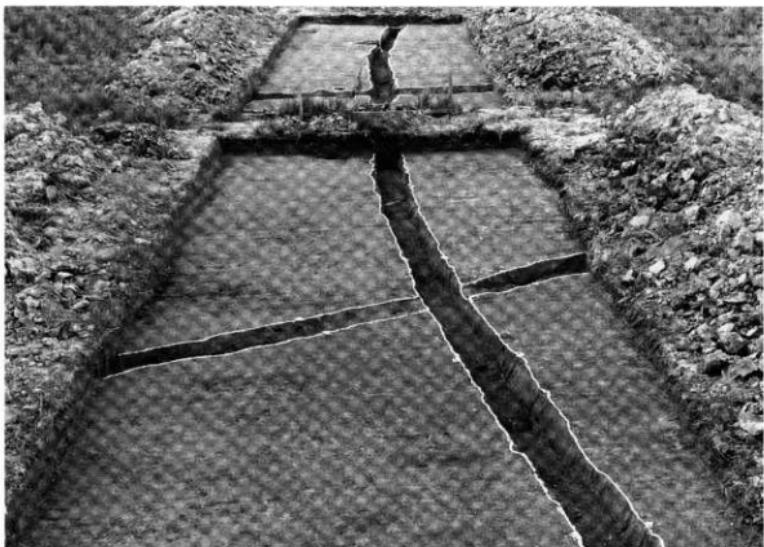
G地区・G12 堀立柱建物(S B09)、土塙(S K01)から南西を望む



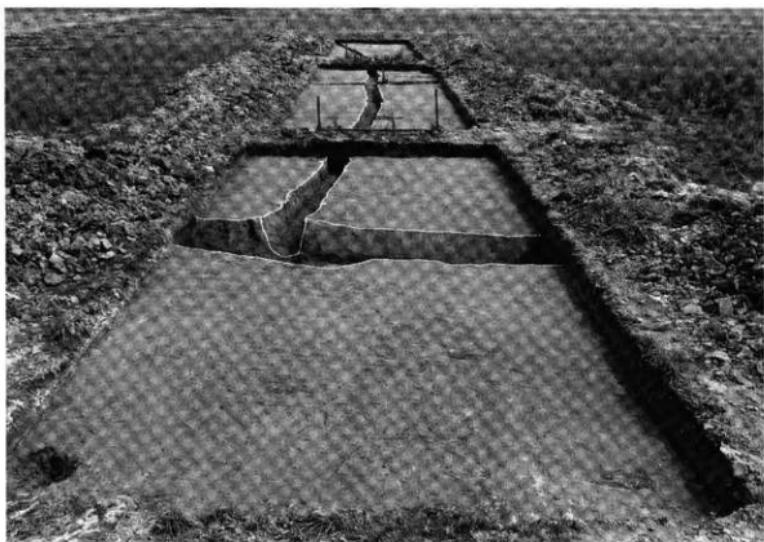
G地区・G12 土塙(SK01)遺物出土状況



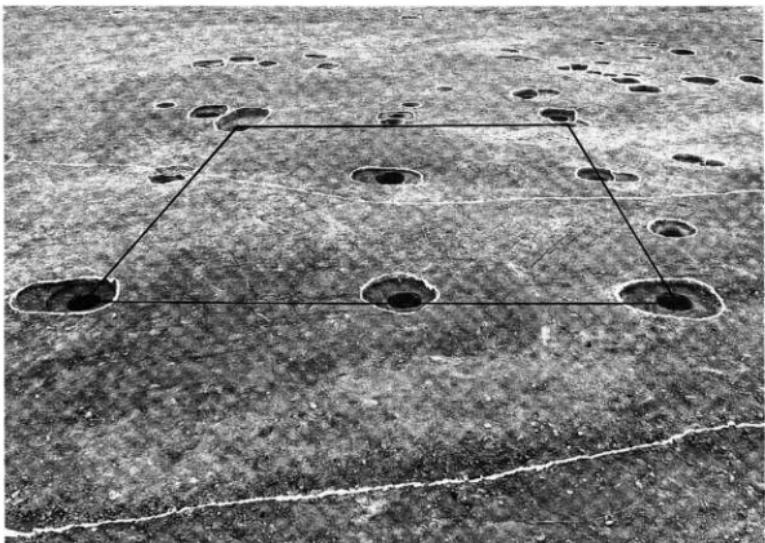
G地区・G12 橋(SA01)から北東を望む



G地区・G20 溝(S D02・S B03)から南西を望む



G地区・G22 溝(S D01・S D02)から北東を望む



L地区・L2 掘立柱建物(SB01)



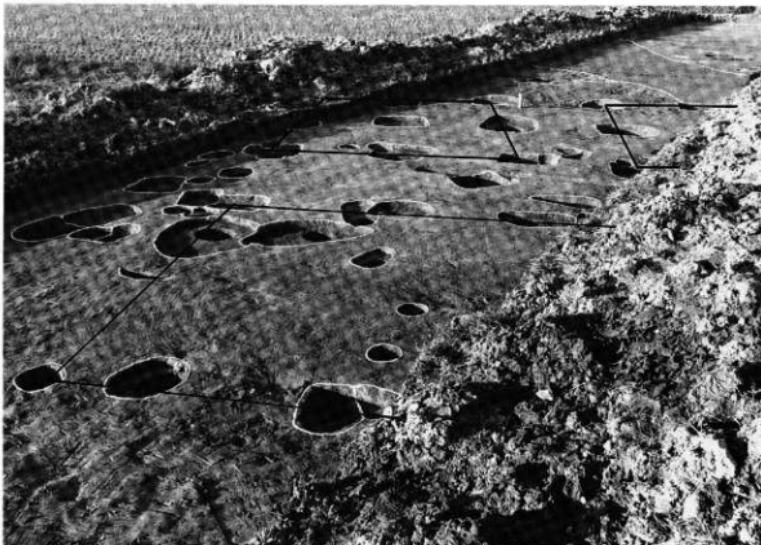
L地区・L2 掘立柱建物(SB02)から東を望む



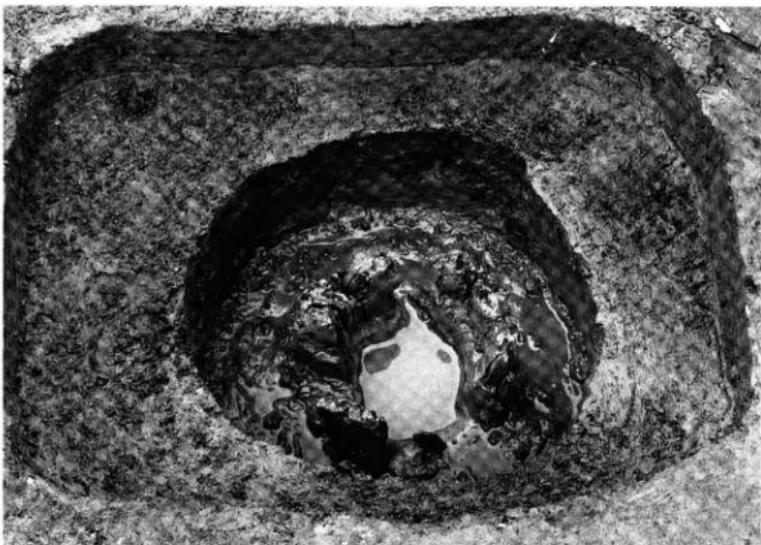
M地区・M1 全景(南西から)



M地区・M1 掘立柱建物(SB01-SB02)



M地区・M1 掘立柱建物(S B01・S B02・S B03)



M地区・M1 槽(S A01)柱根出土状况



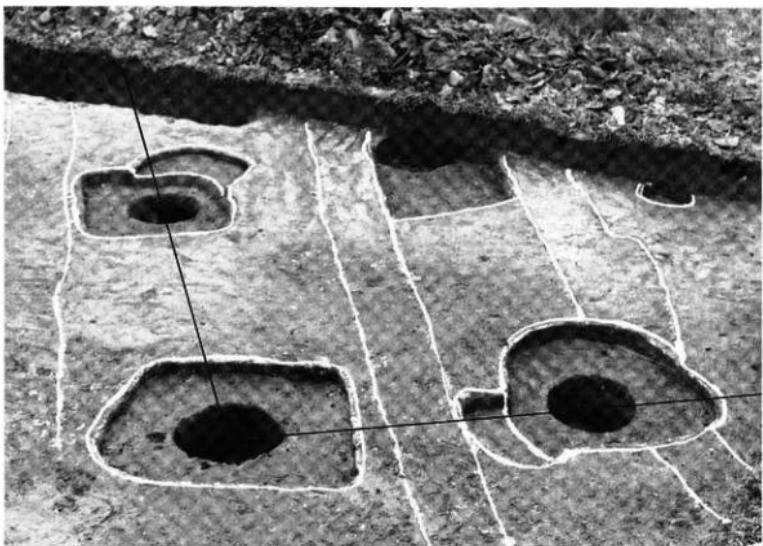
M地区・M2 掘立柱建物(S B06)



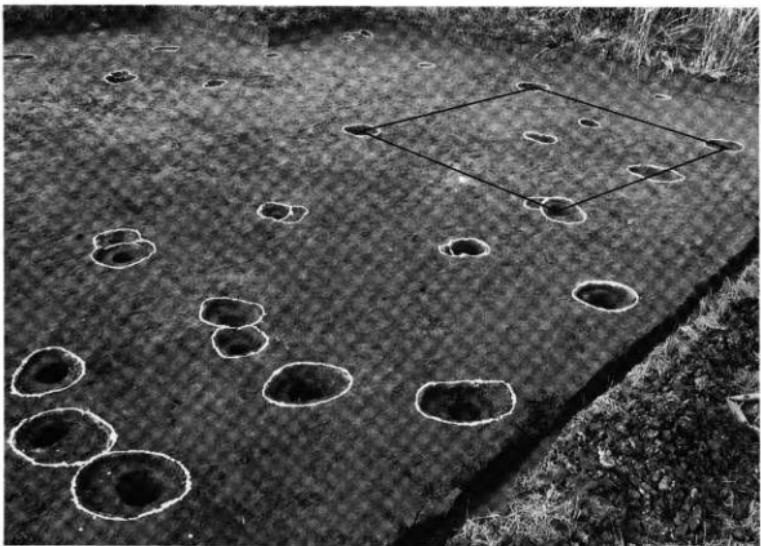
M地区・M2 掘立柱建物(S B07-S B08)



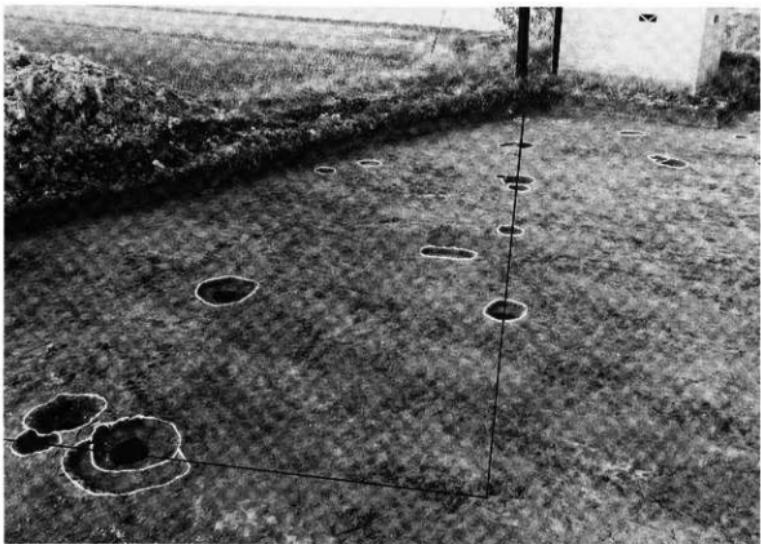
M地区・M2 挖立柱建物(SB07・SB08)



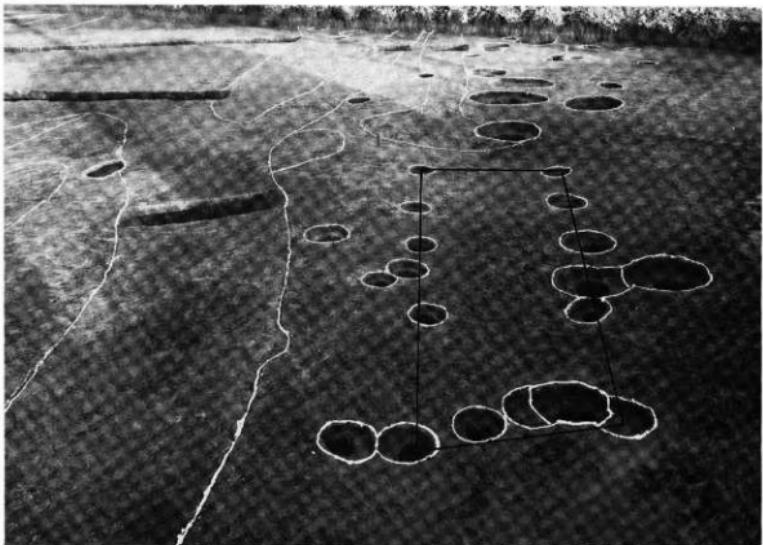
M地区・M2 挖立柱建物(SB09)



N地区・N 1 挖立柱建物(S B01-S B02)



N地区・N 1 構(S A01)



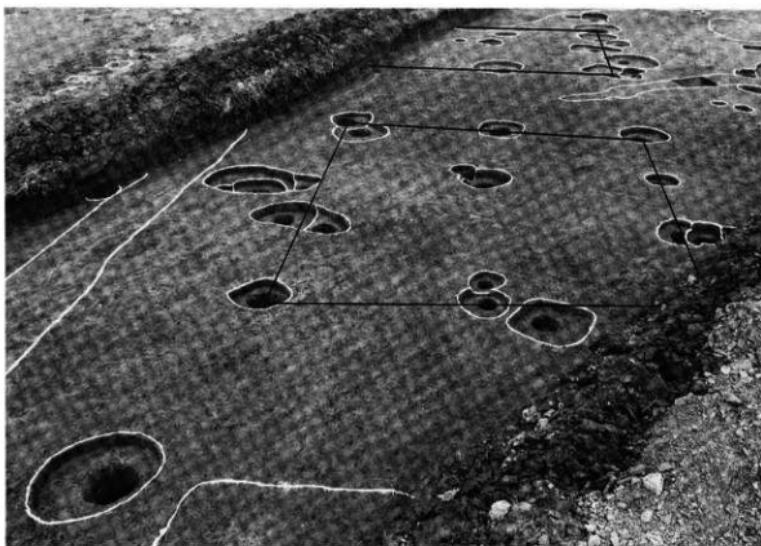
N地区・N2 挖立柱建物(SB03)と溝(SD06)など



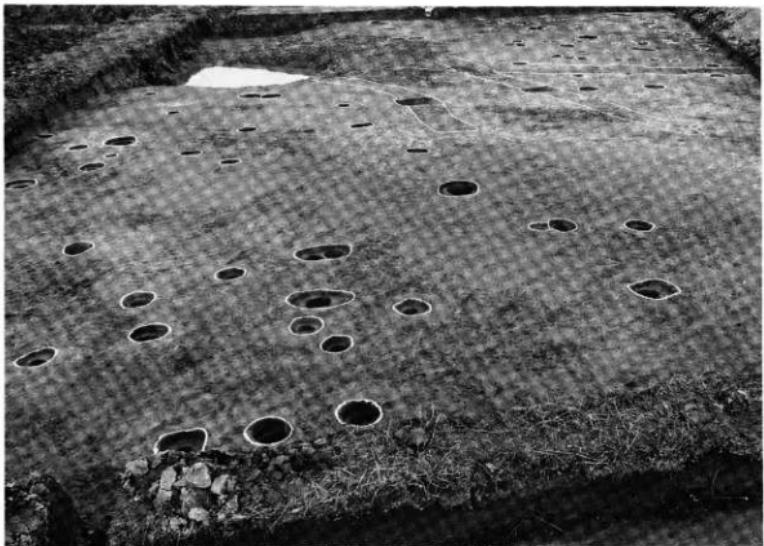
N地区・N2 方形周溝状遺構(SX01)



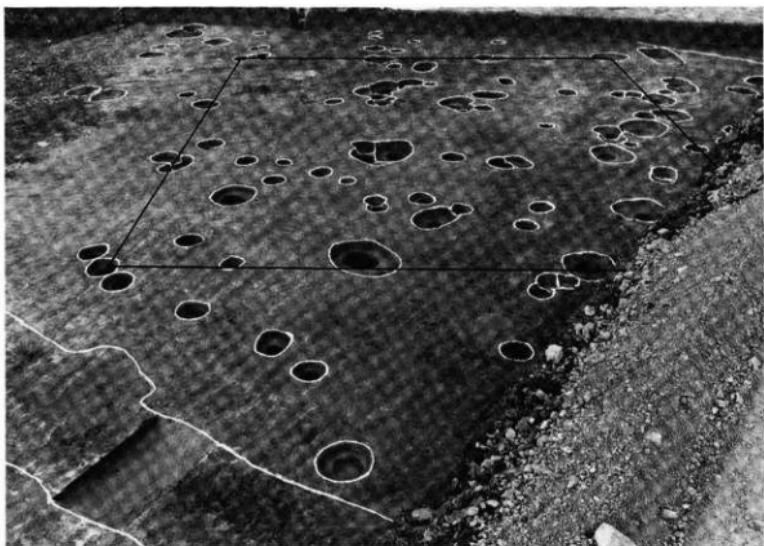
N地区・N 3 方形周溝状造溝(S X02)と溝(S D09)など



N地区・N 3 掘立柱建物(S B06・S B07)



N地区・N 4 全景(南から)



N地区・N 4 溝(S D16)と獨立柱建物(S B08)



N地区・N 5 全景(西から)



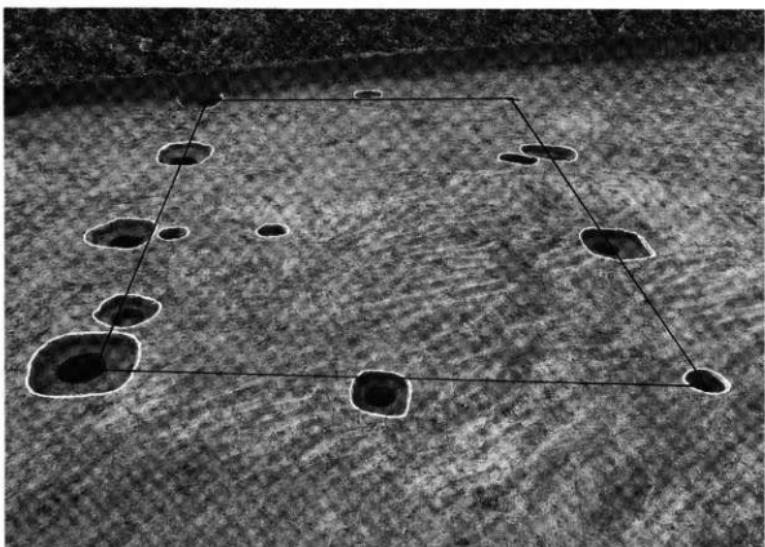
N地区・N 6 掘立柱建物(S B09)、方形周溝状造構(S X03-S X04)、溝(S D09)



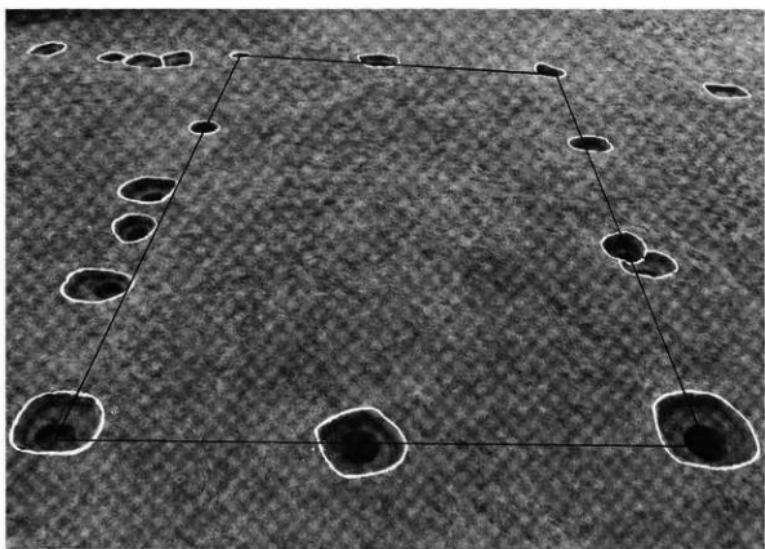
N地区・N 6 掘立柱建物(S B10)、土塙(S K08-S K09)



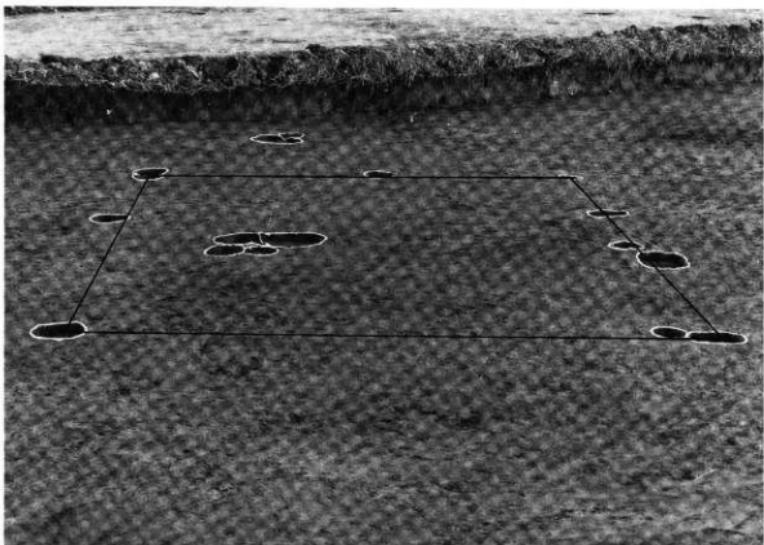
N地区・N 7 全景(南から)



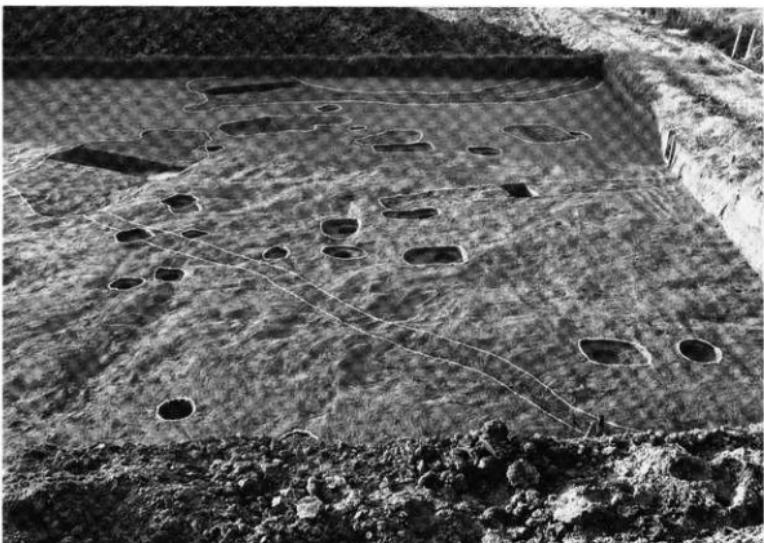
N地区・N8 挖立柱建物(SB14)



N地区・N8 挖立柱建物(SB15)



N地区・N8 摂立柱建物(SB16)



N地区・N8 北側遺構群



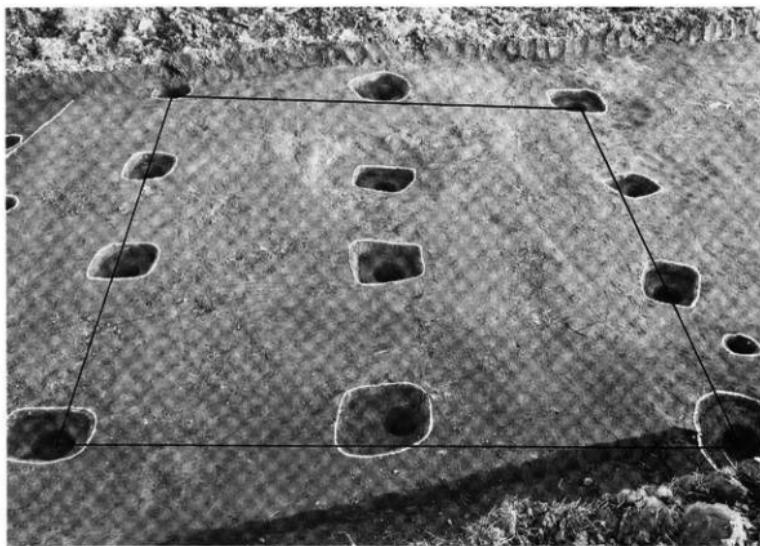
O地区・O1 方形周溝状造構(SX1)



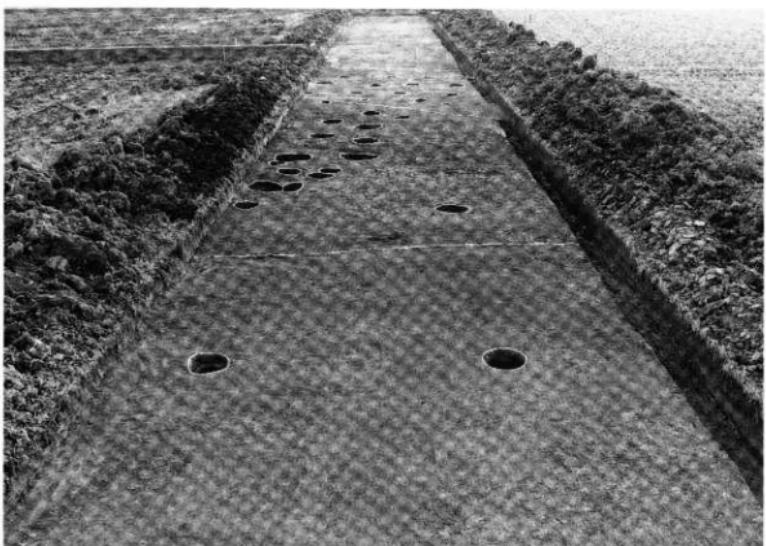
O地区・O1 方形周溝状造構(SX1)



O地区・O1 溝(SD 1~4)



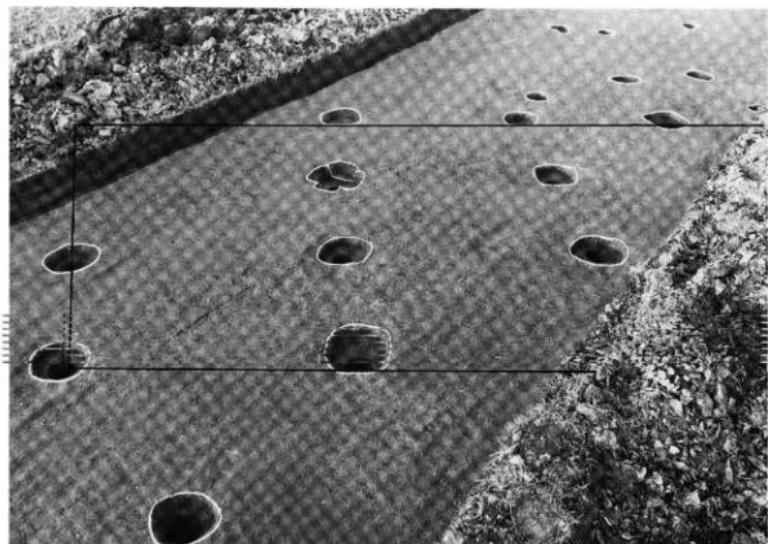
X地区・X1 挖立柱建物(SB04)



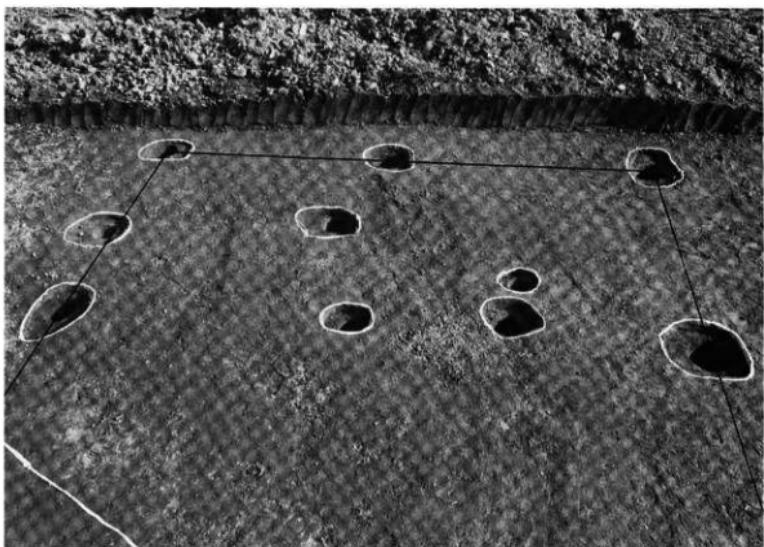
X地区・X 1 挖立柱建物(S B07)あたり



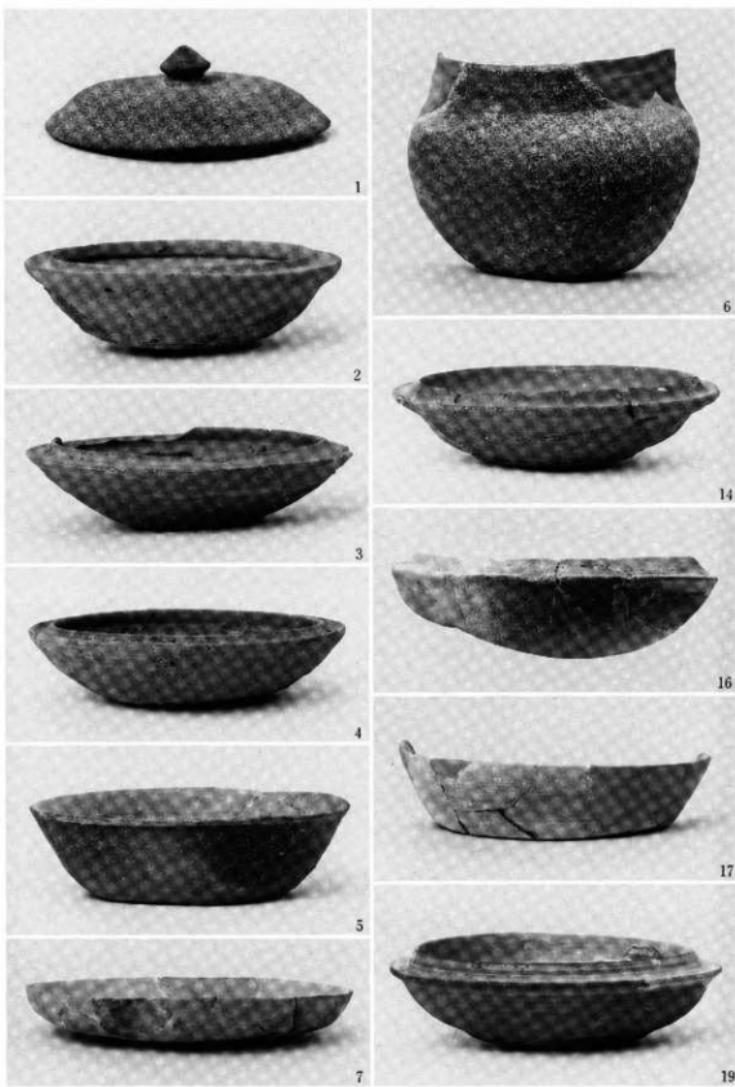
X地区・X 1 挖立柱建物(S B09)



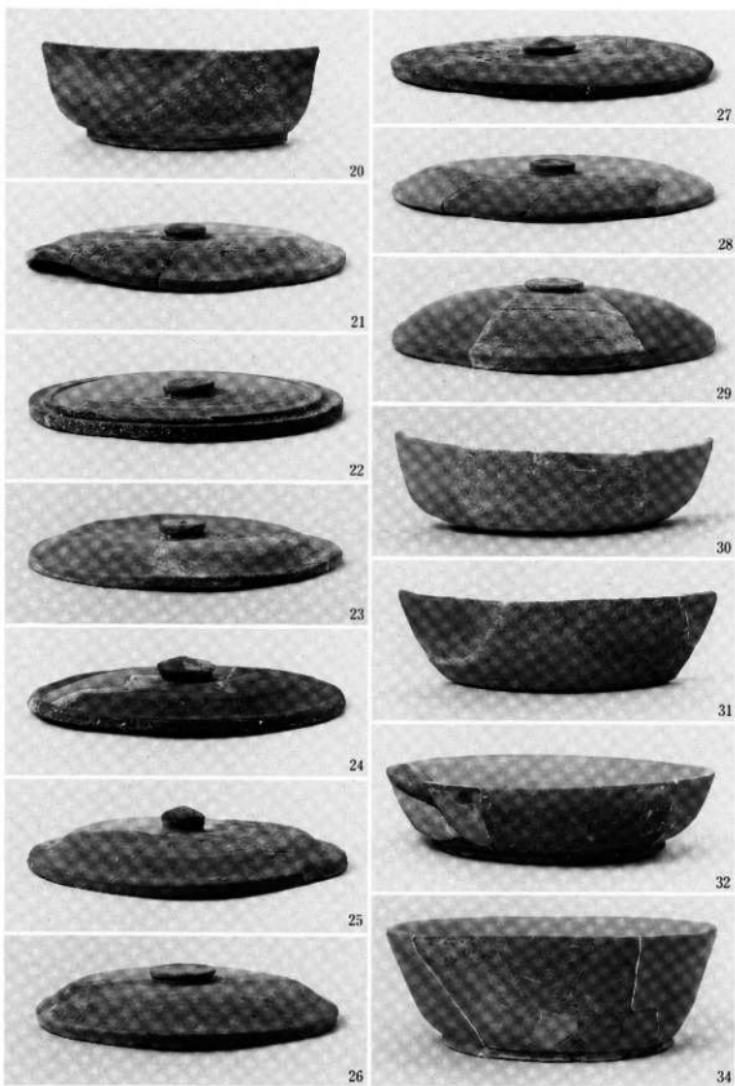
X地区・X1 掘立柱建物(SB09)



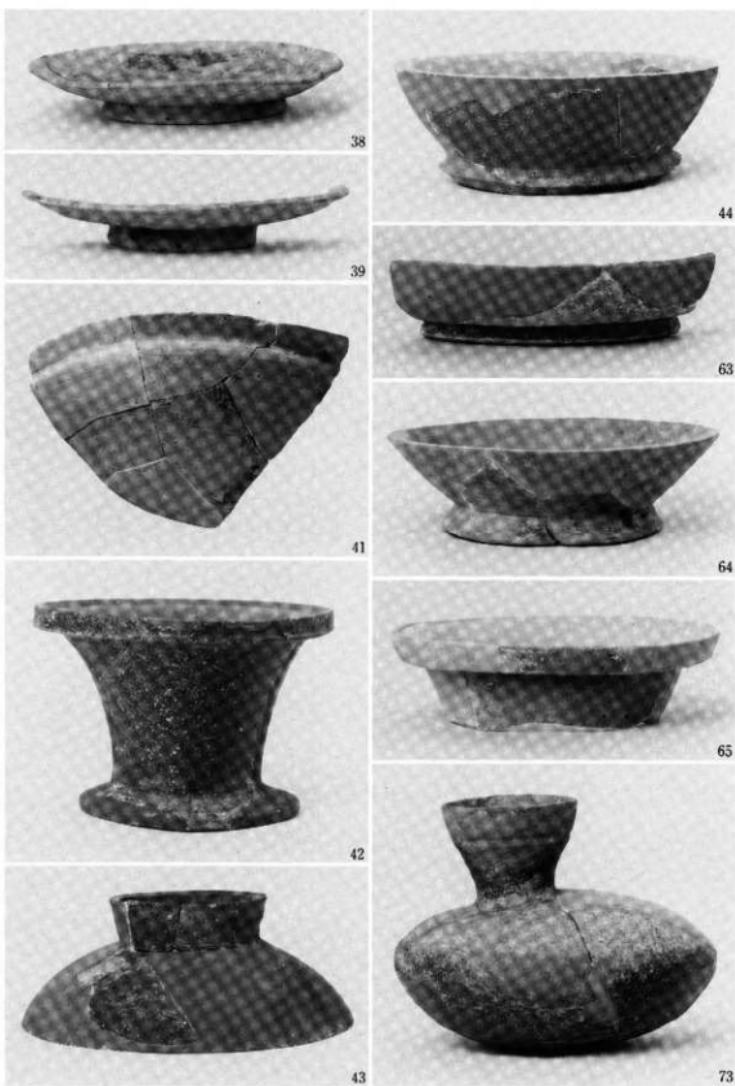
X地区・X1 掘立柱建物(SB02)



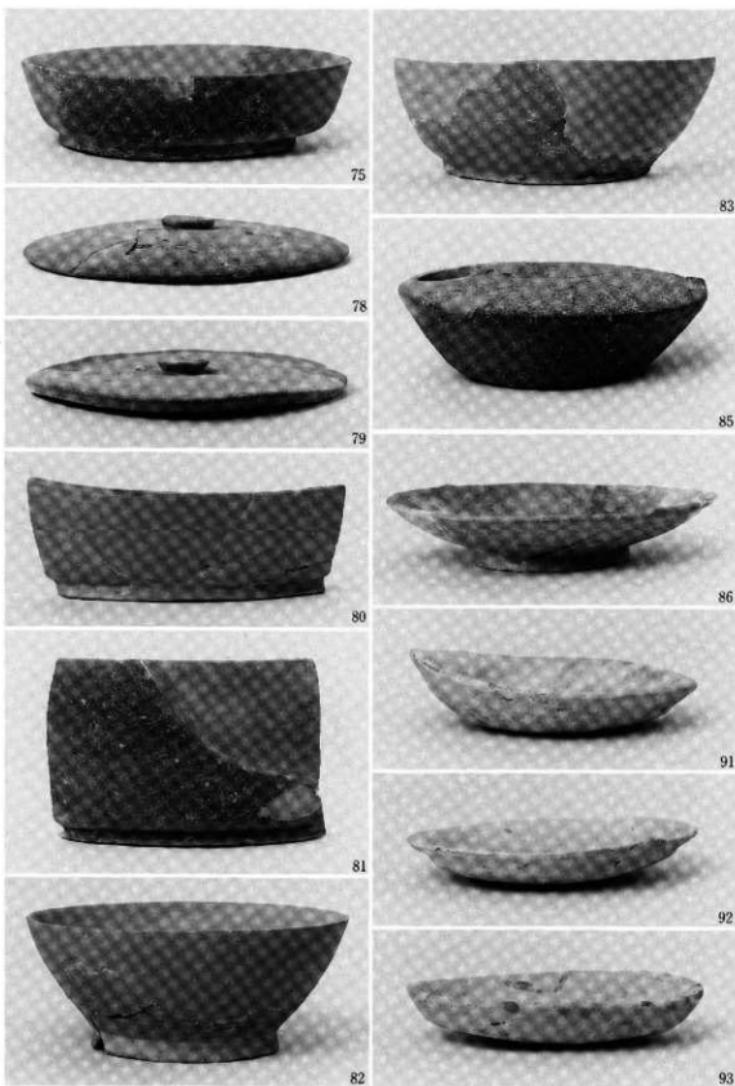
1 ~ 7 (G-11, S D-1)、14(L-1, S D-1)、16(L-1, P-1)、17(L-1, 造構面)、19(L-2, SD-3)



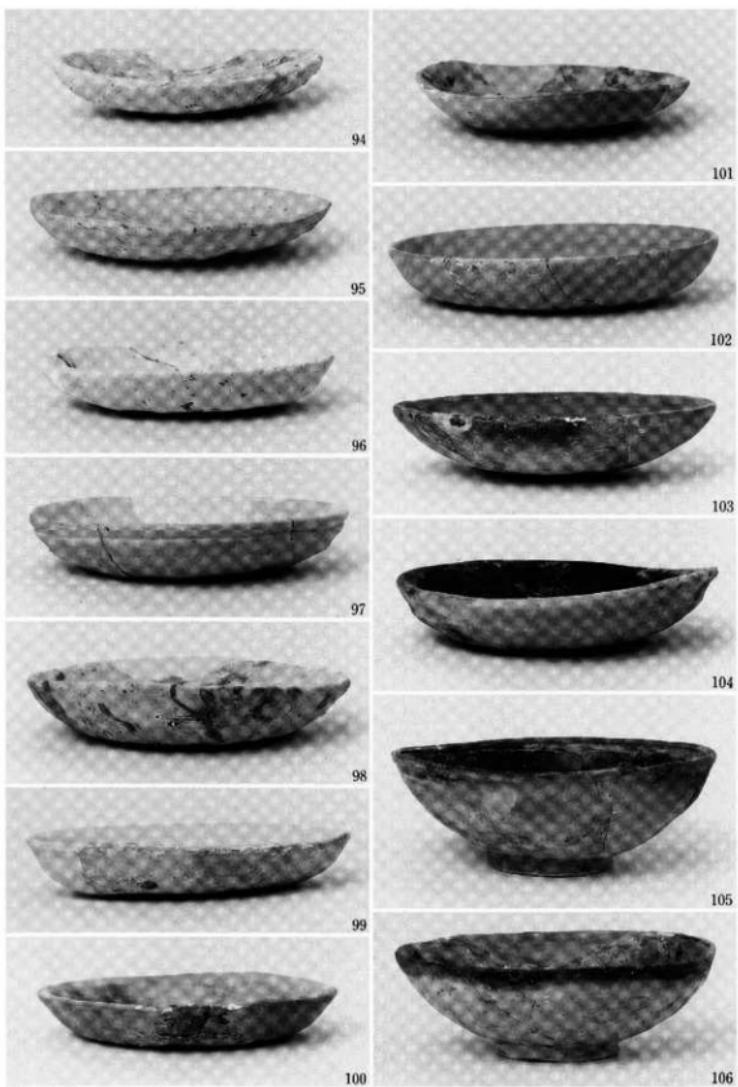
20(L-2, P-2)、21~32, 34(M-1, S D-1)



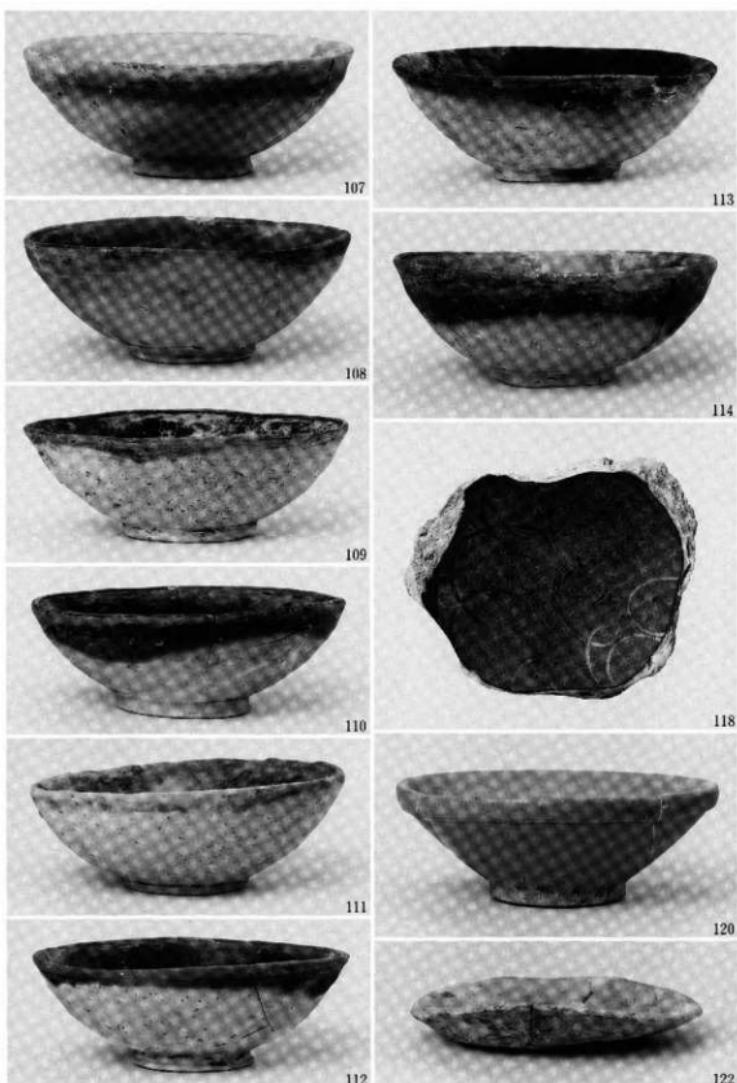
38,39,41~44(M-1, S D-1)、63,64(N-2, S D-4)、65(N-2, S D-5)、73(N-2, S D-3)



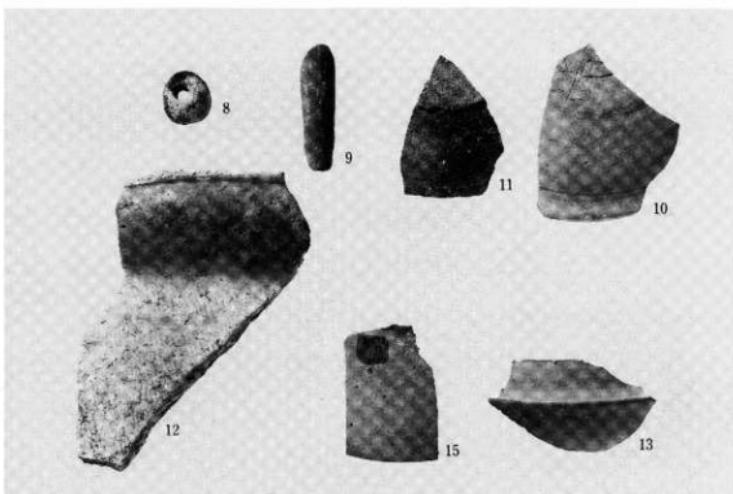
75(N-2, S K-1)、78(N-3, S K-4)、79(N-3, S K-9)、80(N-3, S X-2)、81(N-3, P-1)、
82(N-3, 造構面)、83(N-4, S D-16)、85(N-4, S D-15)、86(N-4, P-2)、91~93(X-4, S D-2)



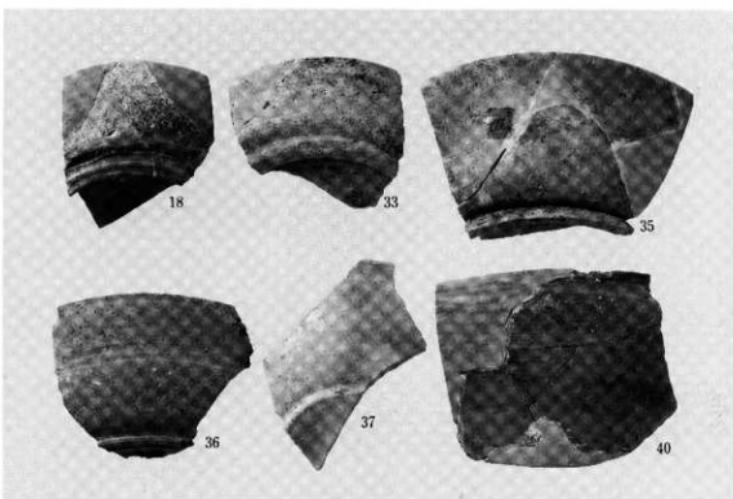
94~106(X-4, S D-4)



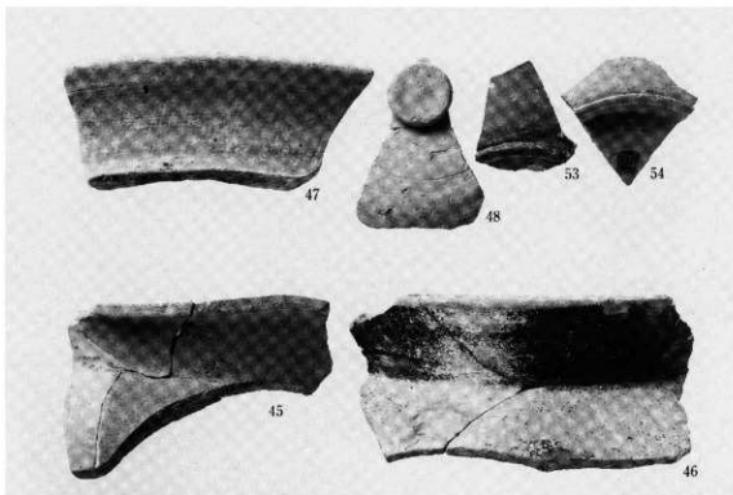
107~114, 118, 120, 122(X-4, S D-4)



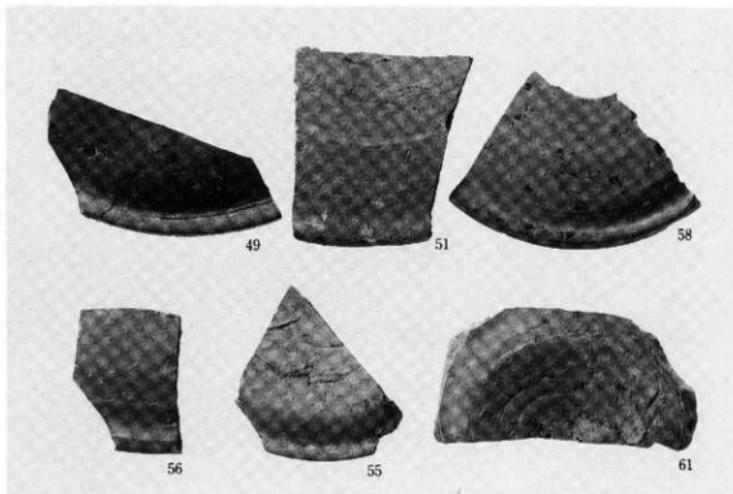
8,9(G-11, S D-1)、10~12(G-11, S D-4)、13(L-1, S D-1)、15(L-1, S D-2)



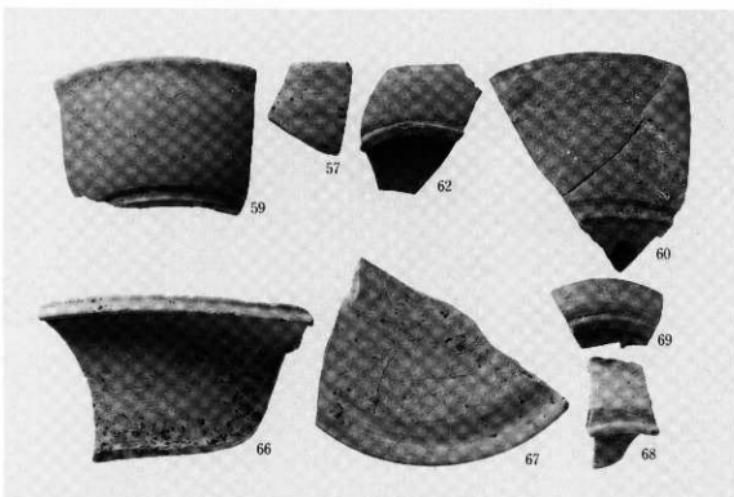
18(L-1, 通構面)、33,35~37,40(M-1, S D-1)



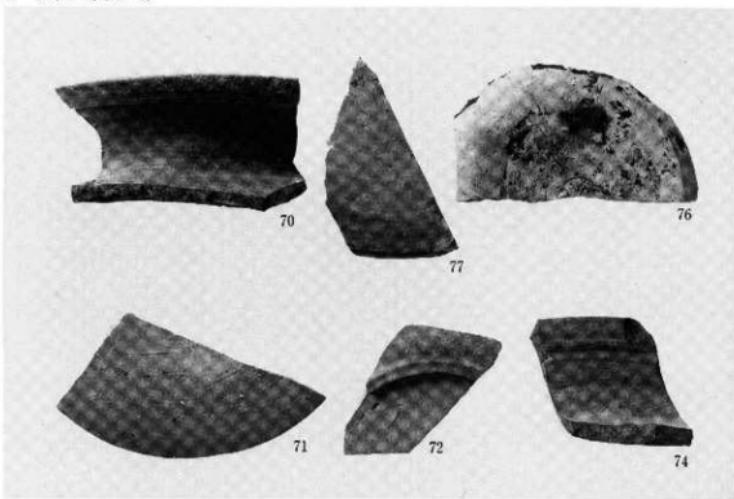
45~47(M-1, S D-1)、48(M-1, P-1)



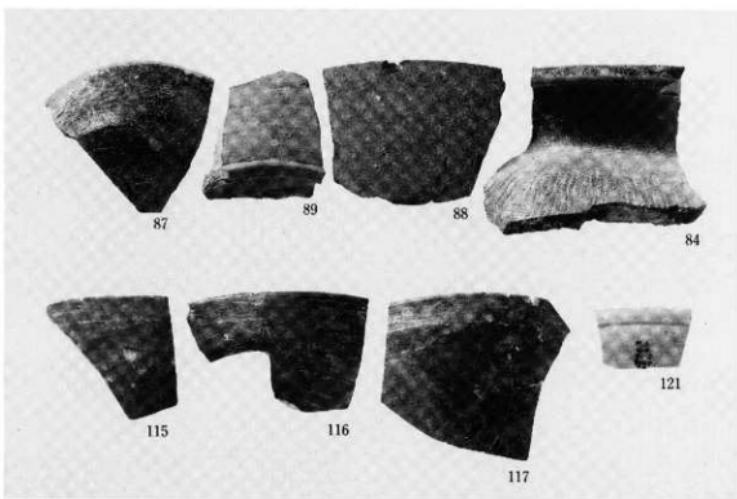
49, 51, 53, 54(M-1, 柱穴内)、55(M-1, 造構面)、56(M-2, S D-2)、58(M-2, P-7),
61(N-2, S D-3)



57(M-2, S D-6)、59,60(M-2,柱穴内)、62(N-2, S D-4)、66(N-2, S D-5)、
67~69(N-2, S D-6)



70(N-2, S D-6)、71,72,74(N-2, S D-3)、76(N-2, S X-1)、77(N-3, S D-13)



84(N-4, S D-16)、87(N-5, S D-19)、88(N-5, S D-9)、89(N-6, S K-9)、
115, 116, 117, 121(X-1, S D-4)

/

昭和55年3月25日

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書一5

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財團法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 梶岡同朋舎

京都市下京区中堂寺鍛田町2

TEL (075) 361-9121

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VIII—5

付図1 赤野井遺跡各調査地区設定図

付図2 N地区遺構全図

1981

滋賀県教育委員会
滋賀県文化財保護協会



付图1 赤野井道路各調査地区設定図

